101382-000-4

特11-274

曼府の叛乱

エーンゾルス/著

M22

DBY-0715

特11 274　No.17629/22

曼府の叛亂

發端

夢州譯

本書ハ Manchester Rebels と題し英國の學士 Ainsworth 氏の著に係る有名なる歷史小說なり今此を譯して「曼府の叛亂」と云へる一條の物語とし逐號本欄に掲出せんとす其本文の樂を芟り要を摘み務て讀者の理會し易からんことを圖る是前の昆太利物語に同じ

今曼に說出す曼府の叛亂と云ふハ英吉利の皇戎日第二世の御宇に英吉蘭、蘇格蘭の兩國に起りたる爭亂の始末にして然も此亂の因て來る所其淵源甚だ遠し抑も第十七世紀の最初に當りて英國に查兒斯第一世とやす皇おはします此皇、先皇惹莫士第一世の皇冠を受頂きて此國に君臨し玉ひしより御政治直ならず兎角に議院の權勢を殺ぎ玉てんとしたりし程に遂に皇家と議院との間に不和を生じ果ハ皇軍議院軍と相分れて戰ひしが皇軍散々に敗北して皇ハ其御位を廢され玉ひたる而已ならず千六百四十九年に弑逆の難に罹らせ玉へり其より後數年の間ハ議院政治と爲りたるが千六百六十年に及び前皇查兒斯の御子再び此國の皇位に昇りて查兒斯第二世と仰がれ玉ふ此君の皇子一柱もましまさねば崩御の後弟宮入て大統を嗣ぎ玉ふ是れ即ち惹莫士第二世なり此皇

英邊の質にては在しけれども兎角に民心を得玉ゑ且つ此國ゐ耶蘇新教を主とするにも拘むらず羅馬舊教に御歸依あつて何事に依らず其宗徒を贔負せ玉ふ御振舞も有るに依り彼是以て上下の折合宜し紀と得ず國民等遂に此君を廢して併せて續くの世代に至る迄も凡舊教を奉ぜらるゝ御方には此國の皇冠を頂うせ參らをまゝとの約束を結びあり斯て皇位ゐ一日も空しかるべきに非ず廢皇の空椅をば何れの宮にか就かせ奉つるべきと僉議するに皇家の血統にて新教を奉じ玉ふ御方ゐ前皇(慈莫士二世)の第一の姫宮にて當時荷蘭の阿連日公維廉第二世の御妃馬利より外にましまさず然らば此御夫婦を迎ゑ參らせて我ゝの君と仰がんとて議院の評定一決し頓て維廉馬利兩皇を迎へ入れ奉つる此を英國にて維廉馬利合同の御代とも士都華土、阿連日の朝(莫慈士一世以後慈莫士二世に至る四代の間を士都華土の朝と云ふ)とも申をな利然るに不幸にも此の兩皇の間に春宮さるべき御子ましまさず(皆夭く薨れ玉へり)斯て馬利ゐ千六百九十四年に崩ゝ維廉も千七百二年に崩れ玉ひて後議院ゐ又前皇慈莫士第二世れ第二の姫宮(馬利皇の御妹)安を迎へて立て奉つる此女皇にゑ亦繼体の皇子ましまさずして千七百十四年に崩御なりければ議院ゐ更に僉議して巴諾伯の君戎日第一世(巴諾伯家)を迎へて皇せ參せり原来此皇ゐ英國の皇統にて血系をば引き玉へども至て反かなる御續柄にて今

より八代の先の皇慈莫士第一世の姫宮、慕邊美亞國王(巴剌太印の選公弗列的力)の后となりて其腹に巴諾伯の選公豪我多士の御妃蘇非亞内親王を産み玉ひ而して又此の内親王(蘇非亞)の御腹に戎日第一世ゐ産れさせ玉ふあれば正しき男統とや申をにも座まさず唯御血縁ゐる新教御歸依の君と申をにく此國に迎へ入れ奉つりしなり斯て此皇千七百二十年に崩御あり御位を春宮戎日等二世に傳へ玉ふ今茲に記す處ゐ即ち此皇の御守に起りたる叛亂にて其亂魁ゐ先に皇位を廢され玉ひたる慈莫士第二世の御孫査兒斯、愛多華士親王なり

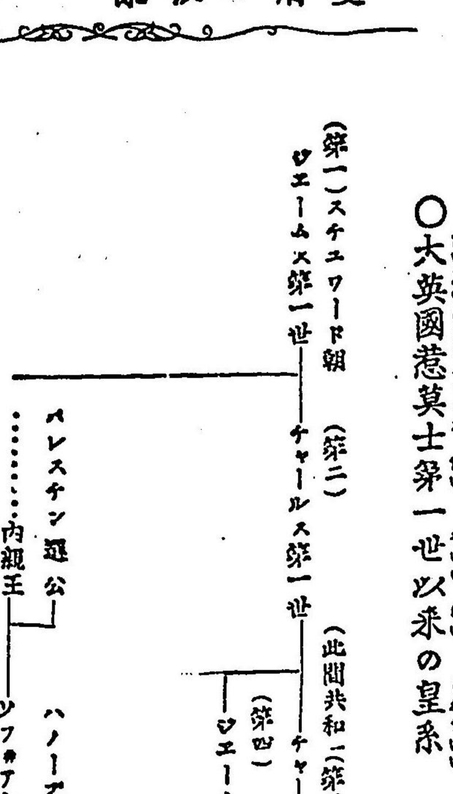
抑も此國の廢皇慈莫士第二世に皇子あり慈莫士、弗蘭西士、愛多華士親王と申を豫て舊教の信者にて在しゝれば父皇の廢位の時共に佛國に難を避け玉ひしが常ゴ其御心に吾ゐ舊教徒なりとゐ云へ正しき英皇の男統であるものを、女流の宮、然も他國の王公に嫁ぎ玉へる人人に大統を嗣れ參らする事の口惜さよ彌も有らば爭で吾が本懷を達せでやゐと思し立ち玉ひゝるが此時の佛皇路易第十四世も内ゝ此の親王に英皇の大冠と頂うせ參らせんとの御心ありければ御待遇も一方ならず寄ゝゐ大義の御談合も有りしに聞えしが千七百十四年に及びて英の女皇安崩御し玉へり親王ゐ此時こそとて佛皇に申し其國の大兵を藉て其翌千七百十五年に英國に攻入り玉ふ然るに又此の士都華土家

とやすゐ其元蘇格蘭の皇より英吉蘭に入り玉へる御家なれば蘇格蘭人ゐ今も此親王を最き參らせて舊恩を思ふの士ゐ招のざるに御陣に馳せ參じ日ならずして數万の大軍と爲り玉ふ（蘇格蘭の舊教徒を邪古閔黨と云ふ）英廷にてゐ此報を聞て急ぎ兵を召し、彼の爭位者が勢ひの強大ならざる先に疾く逐散せとて塞利非蒙耳に軍を出だし散〻に戰ひしが皇軍思ふ儘の勝利を得て敵兵を打散し猶其北るを逐て再び百士敦に打破りしかば親王も力を失むて佛國に引返さる然るに又其年の十二月再び大兵を率て海を航り蘇格蘭に上陸して先敗の恥辱を雪がんと試み玉ひしも御運未だ到らざるにや此度も墓なく打負て又もや佛國へ歸り玉ふ是を世に第一の血統の亂といやしきさる程に此親王に一人の御子あり查兒斯、愛多華土親王と云ふ父の親王（惹莫士）ゐ彼の兩度の敗軍に今ゐ世の中も斯うとや思れけん御子查兒斯親王の勇武の質あるを御覽じて第二の爭位者たる位置を讓り參らせらる親王ゐ父君の遺志を繼て晝夜に英廷の隙をのゞ覗それしが千七百四十五年六月に至り急に思し立て佛國を出で蘇格蘭に討入玉ふ佛國を船出し玉ふ時ゐ屬從の人數も僅少なりしが蘇格蘭の港に上陸し玉ふ頃此由を傳へ聞たる例の邪古閔等ゐ忽ち雲霞の如く附從ひ參らせて夫より此國（蘇格蘭）の高地（同國の東北部なる興地を云ふ）に進ミ玉ふに此地方の武士ども百騎二百騎打連れ〳〵軍門に着到した

れば程なく万餘の大軍となり其年の九月十七日に親王ゐ此國の首都壹丁堡に入り玉ふ倫敦にてゐ火急の注進柳の齒を挽くが如くにて親王の兵勢當るべからずとの趣きなれば文武の大臣方殺急に評定あつて討手の大兵を差向らる斯て兩軍百士敦の野に對陣して一場の大戰を閧死たるが親王の御旗色兎角に惡く、斯てゐ進軍も成り難しと思されければ一旦泥非にまで引揚らる猶此所にも支へ難くや蘇格蘭に退軍ある英廷の總督昆伯蘭親王ゐ、此勢ひを拔すまゝ何國までもと逐ひ玉ふ程に其翌千七百四十六年四月に於て哥兒路田の大戰あり查兒斯親王ゐ此軍を最期ぞと出立れて身命をも惜まず駈立て馳廻り親ら御佩刀を拔騎して英軍を切靡々敵陣を打破り玉ふと數箇度に及びしが衆寡の勢ひ敵すべからざる其上に數度の敗軍に退癖の附ゐる兵なれば遂にさん〳〵に打成されて親王の御身さへ既に危く見えさせ玉ふを隨兵の者引下り〳〵殿りして防矢射ける其間に親王ゐ辛く御船に召せられ佛國へと落ち玉ふ是を第二の血統の亂といやすなり其後親王ゐ爭位の望を絶ち王ひ佛國より羅馬に赴きて靜に餘年を送らせ玉ひぬ是れ英國にて皇位を爭へる戰亂の略史なり今爰に說出だす物語ゐ此查兒斯親王が蘇國の高地に御陣を召され今や英吉蘭に攻入らんとし玉ふ時に筆を起して其軍の始終につき哀れに面白き話柄を編成せるものと知るべし

○此物語の根元たる英國皇位の系統并に爭位者の系統を明あにせんが爲に左に其系圖を掲ぐ

○大英國惹莫士第一世以來の皇系



❶第一回　奇秘盜

千七百年の頭初ごろなり英吉蘭、蘭加舎兒州の山地ある秩舎兒と云へる地ゐ一個大々的邸宅あり茲に其邸の結構を云へば四方ゴ巨大なる濠を周らし此濠ゴ刎橋を架しまス八軍と云ふ時ゐ此橋を引き敵の侵入を防ぐと云ふいと要害好き構なり門内にゐ又廣大なる家ありて其建築ゐ年古たれども猶背の美麗を失ゑず然るに此家の主公と云へるゐ

今より一年程前ゐ世を去て跡ゐ一人の妻一人の男兒を遺したり原より此の廣大なる家ゴ母子兩人僅少なる僕婢を召使ひて世を送るゐれば其不樂さゐ謂ふ計り無きが上ゐ先代の主公ゐ世ゴ聞えたる驕者漢ゐて益も無き事ゐ先祖相傳の財産を失ひ盡し猶其ゐても贅澤の癖の止ねば果ゐは我が領地ある樹木を伐倒し材木ゴ賣て著侈の資にあせしと云ふされば身に病づきて枕重き頃とありてゐ家ゴ殘りし資財とても何も無く其身柄ゴ應じたる療養と受るとも成らぜして墓なく身逝りぬ斯りし後ゐ年ゴの收納も減じ活計最も困難の地ゴ逼りたれば とく今迄召使ひたる數多の男女の雇を辭さ唯二三人の侍婢と當主ある嬰兒の亂母百答と云へるを相手ゐして若後家の夫人ゐ此家を待耐へしが斯る少人數に手廣なる住居も無用なりとて母屋の方ゐ閉切せし庭の隅なる狹小ある離坐敷を居間として唯此の嬰兒ゐ成長を樂みゴ日を送りける然るゴ先代の主公ゴ一人の弟あり此頃ゐ廿八九か三十左右あるべし未だ俗に謂ふ身の固らぜして此家の近くゴ住ひたるが若し此時此家の當主たる嬰兒の身ゴ變事あらば血緣の續きを以く此家の財産ゐ悉皆此弟ある人の手に歸をる順序なりされば今ゐ甥の代然も其が幼稚ゐれば後見としく諸事取賄ふべきゐ勿論なるに此等の嫌疑と又其外ゐ嫂の後室ゐ世ゐ稱なる美人あれば若き同士の人の口の端ゴ上る事もありてゐと速慮しさるか常ゐ親しくも問來ら

ぞ又此方(後室)も今こそ財政の困難なれ素より此國の舊家として田園山林も數多所持したれば斯う質素にして物の十年と送りもせば又以前の富裕ある身代に立復るべし知れて有り斯れば慈母に後見など此人に頼みて後日に面倒の起る事抔ありてはと懸念したるの先方の遠慮を幸ひして別に相談ふ事も無く唯此の一人子丹變事あらせじとのみ念じ居たるが時は是れ千七百廿四年の秋なりし此夜は雨催ひの天暗く殊に月無き夜半なれば目指すも知れぬ間なるを如何にして彼の濠乃刎橋(夜は用心の爲め引くなり)を渡り來るけん覆面したる二人の曲者此離家の庭先近く忍び寄く合鎗もて入口の戸を開れ一間二間と進み行く第三番目の部屋の戸より灰かゝる燈火の外に漏るゝを曲者は透し見て首領さ合ひ爲をほとほとゝ打叩けば内よりも唯と答へて頭て彼戸を引明るは百姓なり　曲「百姓、豫ての約束通り今夜此所へ忍んで參つたシテ彼者の模樣は、と問へば百姓も聲を潛て「今和子樣はお與にてお母樣と御寢なツてゞ御座り升今にお目も覺ませう其迄此所で、と與を指む曲者は首を掉て「否左樣は待て居られを出入の時間も有る事なれば東方おど白みまは大事なり八ツ方添乳する体にもてなして疾く連て來よ百「私しも何角の都合と其處らの心配も致しましたが世に中す出の知せ而今宵は和子樣がお母樣の手をお離れ成されを頓と當惑致し居る最中で……　曲「コレ〳〵左樣な心弱い料見で何とする此大望に一味致した唯今と成ては兎角をやすナ無理に成りとも連て參れ、と手を以て彼方へと指示し小聲ながらに勵したり

乳母の百姓は迫立られても急ては起ず思案顔なる首を傾げて　百「シテ貴方は和子樣をお連やた後何樣に成されまを　曲「其は豫て其方にえやた通り暫く他所へ連行て隱し置くのみの事にして誓て生命には害を加へぬ　百「其の隱をと仰しやるのが私しには不安心で……若し御命に關る樣な事ばし有ては此の乳母は何致しても　曲「渡を事は出來ぬとやをかハテ合點の惡い拙者も男兒じゃ殺さぬやたら決して殺さぬ、好し左程迄に疑がゞ上帝に掛て誓約を致さう――サ箇樣に誓た以上はよもや其方にも疑念は有まじ疾く〳〵那兒を引連て來よ――ヤ此程にやても座を起ぬは不得心か、汝は〳〵他の大事の企望は一味し置き其上ならぬ大切の誓約とさせながら猶やす事を聞ぬとならば予が當の敵は其方なり汝活ては置くまじきに覺悟をせよ、と言も敢ず隱し持たる短刀をキラリと拔て百姓の胸の邊りに差附れば是にぞ驚く百姓はワナ〳〵と戰へ出して百「ソハ御短氣なり惱まり玉ふな如何にも御身の仰の如く和子樣を連れ參らせん先づ此刀を退せ玉へ、と身を摸騷くを曲者は左もこそと北叟笑みて　曲「左やさば其方て好し但し汝が料見では大事の仕事を過つも知るべからず此はりぬ予が身に附添て往ん

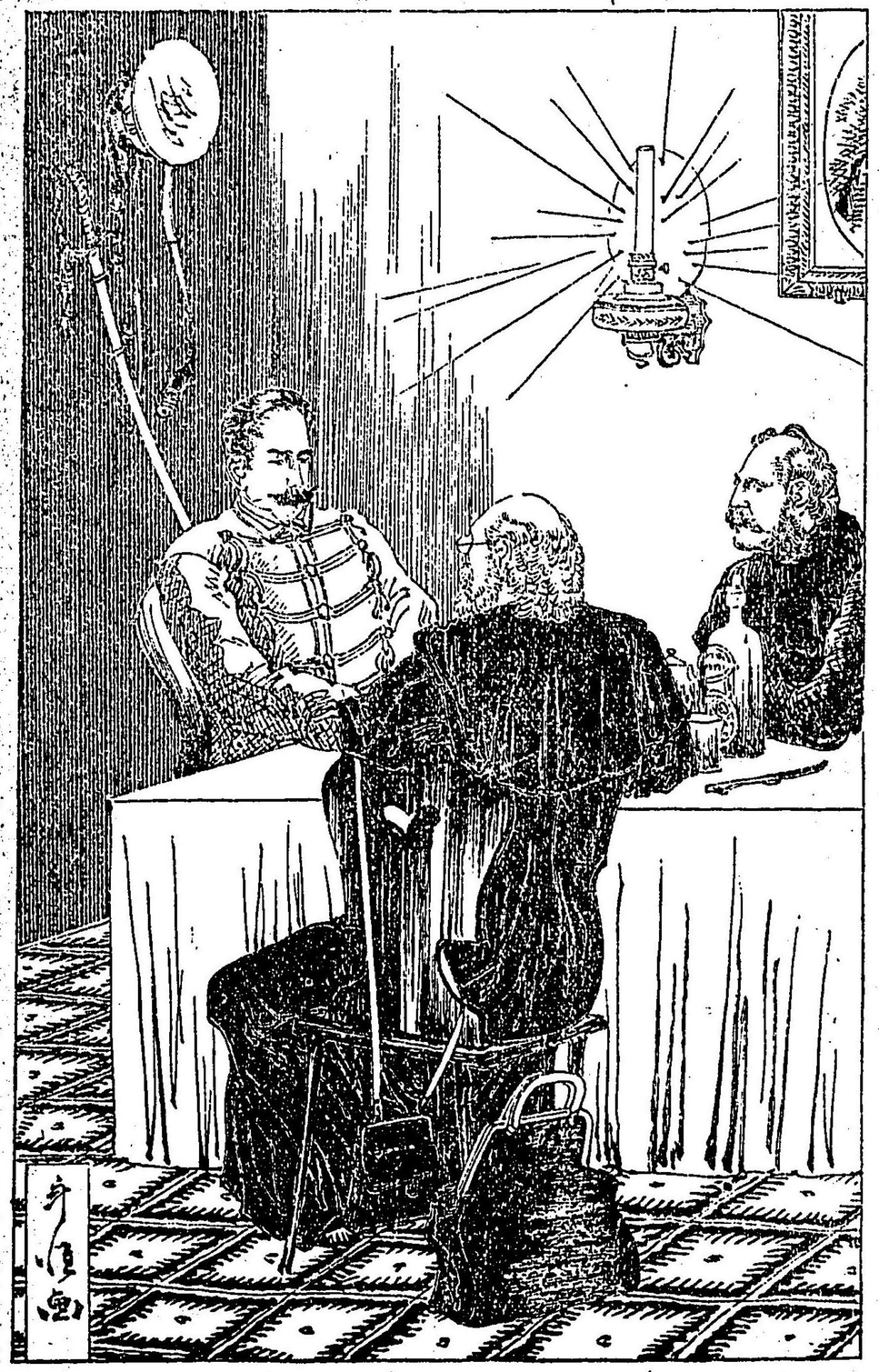
間其方先ヨ案内せよ疾く疾くと引起され百答ハ此所に至りて又何とせん術も非ず彼の曲者に領髪を捉られつゝ房を出れば供なる曲者ハ主の曲者の傍に引添ひ百答をして隔離の戸鎖を一々ヨ明させつゝ頭て彼の後室の寢室ヨ忍び入り只見れば二十四五の美麗き婦人二三才なる珠の如く水の滴るゝ様なる可愛き男兒を懷中ヨ抱拒き左の腕ハ手枕させて前後も知らぎ熟睡せり主の曲者ハ百答の耳につき　曲「サア百答疾く取ヨ母親母目ハ醒させ彼女を起してハ面倒あり、と押遣られ百答ハ是非もなく〳〵枕邊に悄と寄て彼兒を抱取んとハ爲したれど罪も報ひも無き和子の我爲ヨハお主ゆり殊ヨハ年頃我が乳房ヨく是まで成長くあり玉ひゐる我寶の子とも思ふ嬰兒を如何にして彼の鬼に齊しき人々に渡さるべ紀アラ悲しやと泣聲を立んとする母驚く曲者矢庭にツカ〳〵と進み寄て那兒を引抱紀走せ出る此時に驚紀醒たる母親の後室ハアナやと云つゝ取縋る乳母も今ハ怖さも忘れて、ノウまア待く、と曲者の上衣の裾ヨ纏ハるを、邪魔だてすなと右手ヨ持たる短刀にて突排ふ無惨の刀ハ百答の胸元深々突裂たればアッと魂消る聲と共ヨ四邊ハ鮮血の韓紅百答が其儘ヨ息絶るを見て後室ハ恐怖の餘り其場ヨ倒れて悶絶す家内の男女ハ此物音ヨ驚きて馳附たれど如何ある故とも其由狀知ぎ唯盜賊の入来りて主の兒を奪ひ去んとするを母親ハ支へて悶絶し乳母ハ又主の後室の身ヨ代りて對

是さるものゝおらんと云ふ而已ヨして餘義なく其場ハ濟せたるが憐むべし母親の後室ハ其後醫師の治療ヨ由て蘇生ハしたるものゝ我子を失ひたる悲哀の爲ヨ心亂れ風狂したる後ヨ至りて數年なりぎして果たりと云ふ是れ此物語の端緒ヨして本文なる曼府の叛亂ハ此より二十年程も經たる後なり

第二回　千七百四十五年の曼府

千七百四十五年の初ゆ當つて曼府の人心ハ如何ある態なりしかと云ふを記さんヨ此時府中ハ邪古閔の黨與（舊教黨）充滿て人ヨ異口同音ヨ我が士都華土の御家ヨハ嫡ヨの皇子（查兒斯親王）ましますヨ御續拠も灰かゐる女流の宮の血統の皇を立て參らせじハ不當なりあれ是如何なる變も出で来よ我ヨハ我が尊愛する惹莫士第二世の御孫查兒斯親王を迎へ奉つり我が正統の皇として仰がんものをと言ひ罵り宴會の席抔ヨ出でゝ祝盃を擧る時ハ查兒斯親王万歳と言揚するも有り海外に在ます我が正統の天子万歳と書ゞも有りて其有様を譬へて言ゞ春野の牧に放たれたる若駒の狂ふに異ふらぎ然るが中にも最も此の狂焔を助けて人心を煽動する事ヨ力めたる人士三人あり其一人を博士、日根と云ふ此人初より舊教の神學師ヨして今を距る三十年の昔千七百十六年ヨ今の查兒斯親王の御父即ち第一の爭位者なる惹莫士親王の此國ヨ討入り玉ひし時御味方して

今の朝廷（巴諾伯家）の爲に誅戮せらるる舊教信徒の子孫等が歸依僧たりされば此人が此府に於る宗教上の權力と云ふ恰も大僧正の地位を占る者ゝ如ならも其次の一人を博士、戎、貝論と云ふ此人年齡五十五六身材高く眉厚くして外見たる所も一衣の人品あるが上ゝ柔和忍辱の行ひを脩めて人ゝ接るゝ愛敬あり且つ學問才智辯舌ともに勝れたれば教法上の階級と云へば日根の下に在りと雖も宗徒の尊敬は倒て其上に在が如し又文筆ゝ巧にして詩賦を善し時ゝ惹莫士黨の機關たるスペクテートル新聞ゝ書を投じ或は其社説をも受持つ事なるが毎も士都華土家再興の事を論じて其陰謀の幇助と爲さゞるは無し又其次の一人を弗蘭西士、屯士禮と云ふ此人其生は蘭加舎兒州の人ゝして今は職を陸軍大佐に奉じたり然れども熱心の舊教徒ゝして剩さへ其父は彼の千七百十六年の亂に惹莫士黨第一の味方として親王の爲ゝ忠を盡し軍敗るゝて後捉へられて既に死刑ゝも處せらるべきりしを保庇士と云へる裁判官の援助に依て僥倖に無罪の宣告を受たるが斯る人の兒子なれば同く父の氣脈を受繼ゝ今の査兒斯親王の御許ゝ心志を通ぜ年少き頃より恢復の大謀を成さんが爲ゝ佛國ゝ航りて其國の陸軍ゝ從事をると十五年夫より本國ゝ立歸りて曼府駐營の士官となりしが此府ゝ在る中も絶ず佛國なる親王とは密書の往復を屢ゝし又或る時は自身彼國に赴さて大義の計謀に與りたる事



もあり而しく彼是自ら本府駐在の士官を望みやたるも亦た其の素望を達し得べ𪜈方便さるに外おらも最初此人の心中ゴ謂へらく曼府ハ英吉蘭北西の大市府にして蘇格蘭ゴも程近し殊に其人民の衆𪜈貨財の富る誠ゴ天賦の要地なる丹幸ひある哉此府の人ハ我一と親王を顯さ奉つれりそれは我ゴして一回足を擧ベ二聯隊の精兵を得るハ容易からん此府丹して我手ゴ入らバ恢復の大業も既ゴ半ハ成れるものと云ふべしとの計較ゴて此所ゴ移り住さるが此年(千七百四十五年)の六月豫て謀し合せたる旨やありけん佛國なる查兒斯親王ハ御船ゴ召されて蘇格蘭の北方の地ゴ上陸あり其地の舊教徒ハ招かざるに馳せ參じて親王の御勢雲霞の如く早や彼國を征服へて此國(英吉蘭)へ御馬を入らるゝも近ゝの事なるべしとの注進此府へも疾く聞えゐれバ、スハや大事の起りたるぞ出てや防ぐ居てや守る貨財を盜れお足弱を逃せよなンど府中の人しハ足下より鳥の起たるが如くゴ狼狽て周章さ騒の沸かへる樣に騒ぎ立て、何とハ知らぞ足手を空ゴ摔め𪜈合ひ唯專一ゴ身支度する者のみなりき

曼府の動騒既に斯の如くとなりて、我こそ親王の御味方ハと名告り出づる者も無く偶ゝ志しを通ぜる者も倫敦の朝廷お憚りてや又戰陣に臨む事の恐しゴゴや、如何ゴも親王の御方へハ隨從せんが自ら兵器を執て戰場に罷り向ふ事だけハ御免ハへと尻込を

る者のみにて捗々しき事も無し殊に此府（曼府）より蘇格蘭に打越むべき途中の要地ある客律西尓府の新教徒は親王の軍を遮へ止めんが爲に義勇兵を募集して尾遜敦の橋を燒落し撒伯多の橋一條を殘して（退軍れ用意の爲め）南北の通路を截斷さりとも聞えたれど此地の陰謀者は愈々其力を失ひて屯士禮大佐が嘗て半日が程に集め得べしと見積りたる精兵二聯隊は扨置れぬ今は一聯隊の驅集め兵すらも容易くは得難しとは見えたりける」さる程に此府の陰謀者三人（日根、貝倫、屯士禮）は空しき奔走の間に夏も過ぎ秋も經て十一月の中旬となりぬ此夜は雪催ひの風寒くいと不愉快なる季候なりしが街盡處の建家古たる旅籠屋とも見ゆる家の與坐敷に圓形の食卓を据ゑ其上に一陶の葡萄酒の瓶を置く三脚の椅子もて之を圍み此ふ各〻坐を占たるは別人ならぬ又那の日根、貝倫、屯士禮の三人なり其中ふ日根、貝倫の兩人は神學師とて緇衣法衣を長く着下し殊勝氣ふ椅子に倚りたるが屯士禮のみは大佐の軍服を光耀に裝ひて長靴を穿ち腰劒を壁邊に引つけたる体年は壯し威貌はあり天晴れ一騎當千の勇士とこそは見受らるぬ、先刻よりの長評議も思ふ如くに其結局の纏り難てや屯士禮は少しく急立たる面色にて屯「時に兩君拙者が此より北方なる親王の御陣に參りて諸事の御打合を致に附ても其前に此府の部署を篤と定めて内應の手筈を十分に調へ置ねば相成らぬ既ふ先刻より種

々の御議論も承はれたが未だ蹈切たる御決答も仰聞られぬは到底此地では事の擧られぬと御見込の附たる故う其處らの邊を唯今確と承はらねば拙者彼地を赴きても何樣とも口が開ぬ、サ、御兩所の御決心は如何で御座る　貝「大佐の其の御懸念は一〻御尤もに存ずるが既に御身も知るゝ如く我等兩人も御旗揚は當時より此地の市人等を樣〻に說勸め我が正統の天子を戴く爲に十分の力を出せよと諭したれども奈何せん商人の癖として金錢を儲くるには拔目なきも義氣勇氣など云ふ物は毫も無く平生は我皇の擬位を企望して其熱心恰も狂ぎる如く見えたる者もいでと中を今日には何方へか逃失て偶〻殘り留まる者も中〻身命を大義の爲に抛たん抔思ふ者は一人も見當らぎされば此有樣にては内應の部署は愚の銃器を執て北方の御陣ふ馳せ加はる者も有や無や我等が料見には覺束あし　屯「貴下の御議論では此府に於ては我々の大事既に去りとやすより外なきがよも左程にもひろはし今我々にして旗揚せむ一千人の兵士は得らるべく思ふなり　貝「イヤ中〻左は參るまじ　屯「然らむ半數と見て五百人かナ。日根は傍らより口を出して　日「されバサ五百人位の兵は如何に腰拔のみ揃ひたる此市民でも寄集らぬ事は有るまじきが、されど此衆を率て鋭精なる敵軍と勝敗を爭はんは（首を左右に掉おがら）兎ても出來難し〳〵。屯士禮は此辭を聞よりも稍沈着たる顏色を又荒のにして

屯「然らば御所所に如何あさるゝ、抑も親王が此回の御討入も半は我〻のやす吉を頼み思召ての故ならぜや今此の危急存亡の秋に當りて前約に我〻が見損じおり料見違ひにていと何とて御陣へ推參して此方の口よりやさるべき況や此の大義の擧を餘所に見て親王の爲に一臂の力を出す者なるしと言れてに我〻れ生涯に云ふにも及ばず子〻孫〻末代迄の恥辱なり否曼丟士多一府市民全体の恥辱なり、口惜き哉我〻が多人數相會して秘密の議を凝し今日迄に力を盡したる結果に實に斯るものなる歟、時機未だ早しと宣ふ御旗揚を強て勸め折角に御出馬ありて遥〻此國へ來て御覽ぜれば股肱とも手足とも頼ませ玉ふ我〻の手より御味方に馳せ參る者一人も無しと云ふ此旨を聞し食さば如何ぞ御無念ぞや思召されん殊に況や其首謀者たる御身等が此上に勝も負るも御運次第御身の存亡に御身自身に計らせ玉へと箇樣にやされぬ計りの口振に言語同斷勿体至極も無き始末にはいてぬ歟、と一心凝たる屯士禮に亞み掛け〻辛兒を叩て論じおがら熱き涙をハラ〻と軍衣の袖に濺ぎたり

日根に熟〻と屯士禮大佐が悲憤の言論を聞居たるが此時徐に口を開て　曰「大佐左も かり に力を落し玉ふな我等に尚此府民ふ丸さりの望を絶たりと云ふに非ず原來斯る都府の住民に事の未だ擧らざる先に見込を附て自ら進まて事を爲をと云ふ勇氣に之

しきものあり故に今日に斯く尻込のみして事捗々しくも行はれざる如くには見ゆるも一旦親王の御旗の影を眼前に見參らせなば不思議の勇氣を心中に發しく我一に御陣に馳せ參る者るしとも中されずさきば我等が考案には親王ふに一日も疾く此府近く御陣を寄られて其兵勢の爽かなる樣を府民等に觀し玉ふが肝要なりと思ふあり。貝倫も亦頓に首肯て　「我等が謀る處も日根博士と其說を同くす其に早や今日でに實ふ先刻も述たる如く我々に與して事を擧んと謀る者一人も無しとて見やるもの、凡人間の皮を被りて幾分か羞惡心の存をる者が平日の言辭を丸〻反古ふして親王の興廢存亡と餘所に見るを快しせする者の有るべ紀乎要するに其羞惡心即ち義勇心の引立ざるに其上面ふ疑惑心即ち恐怖心と云ふ物の掩へばあり而しく此の疑惑心に千七百十五年ぶ大敗に依て眼の邊りに其父祖父等が嚴刑ふ處せられたるを見もし聞もして其恐怖の念未だ失ぎあいや又此回も前轍を履て御軍利無んば自個等も亦斯る目にや遇はらんと惑へばなりされば此府の舊教徒の心中にも決して親王の御勝軍を願はざるに非ず十分心中には願ふと雖も此を決行するを果さざるは全く前年の事に懲て二の足を踏む故に由れば此膠病風を醒まにに大旆の光輝を此府頭に翻ろし衆心を一つに纏て其等をして我軍の勝利疑ひなしと惑しむる外に有らず　屯「左云るれば親王の御陣を此府に進め玉ふ

ふ非されば御味方は一人も無しとやさるゝ歟　貝「先づ其通り、今我等が萬全の策をやさば佛國より大軍の援兵確と此國に到着すべしと決せざる其間は親王ふは佛列西敦の南方より御陣を据られ姑く敵軍の動靜を探り其に由て進退を定め玉ふが肝要ならんと存ずるなり此義貴殿より奏上あらば御用ひ無き事もいまじ。大佐も少しく首を捻りて　色「一歩も倫敦ゐ近づき玉へとやすならば拙者如何樣ゐもや上んが懸軍を中途に停め而して他國の援兵を待ち玉へとは拙者の口よりや難し良又た我等より利益なき議と知りつゝや上たればとて親王よりも其に隨えんとは仰らるまじ原来親王の御心中には兵を停むるは扱置さぬ時機若し有らば長く驅く明日ふも此國の首都ゐ討入り王はんとれ御心なるは我等豫てより存知の事ゐて有れべなり　貝「我等の心中ゐも左有ま欲しとは思ふものゝ未だ聞玉はぎや倫敦よりは昆伯蘭親王を大將として更に大軍の討手走せ向ふと正のを聞く然る程ならば由ゝしき味方の大事なり若し大急りに急り立てゝ前後も思慮もおく功を貪るのみ熱心あらば御前途の程も甚だ心痛に堪ざるもあり今日の我等が考案には昆伯蘭の大軍罷り向はゞ倫敦は愚か味方は兵を此府近くへも寄せまじと思ふは如何、と難ぎれば大佐は又も氣色を損じて色「ナニ昆伯蘭とや其の昆伯蘭が何程の戰爭を爲し得ると思召をかや既ふ我が親王には弗列西敦ゐ於て善尼哥夫（將軍の

名）程の老練の勇將をすら一戰の下に御退治あらせ玉ひしとは知し召さぬ歟然るを那の敢爰をだに辨ぜぎ昆伯蘭親王が縱ひ少〻の軍勢と召連れて向へむとて打破つて通らせ玉はんには何程の事有るべきや我等ゐも有れ三三聯隊の兵を引具して進軍せば彼は其風を臨みて戰はぎして敗れんは案の中なりと論ずれば　貝「イヤ〳〵左樣ゐ侮り玉ふな彼も亦た巴諾伯の朝廷（英廷）にて人選せらるたる人物なれば木偶にも死人にもいふまじ殊に其帥る兵は有名の近衛隊其他も此に劣らざる精鋭の聯隊にて現に昨日得たる通知に據れば芥智禮に城砦を設け十分に兵を間配りして味方寄せなば一舉に挫しぐべしと講へたりぎ聞くものを、と云へば色士禮は愈々氣色を惡くして　色「貴殿左程に敵兵が恐しくは何ぞて最初より此大義の企望に與し玉ひしゐ抑も此時に當て味方の勇威を示さんとはせぎ頻に敵ゐ美を賞讃あるは御邊も此の曼府は市民と同じく臆病風と冐れしゐ、良や今言るゝ如く敵の將卒如何程に勇猛にも有れ我が親王は天の生せる英傑にく在ますぎ若し右の如く奏上せば益々勇進の氣を增し玉ひて彼の敵砦を見る前に踏破り倫敦に御馬を入れ參らせよと宣ふならん而して我等は我が親王が實に彼の昆伯蘭を逐ひ捲りて勢ひに乘じて大都に入り簒位者（今の英皇）を彼の都より逐出して父君祖父君ゐ血統を嗣ぎ威士多閔西太に於て大位に上り玉はんに相違おしと信ぎるなりと取

を血走らして論じたり

日根、貝倫ハ口を揃へて「否我等とても親王の英邁の質ゐ在すことを知らざるにハ非ず唯今日ハ此の勇武の上ニ天助の御利運あれかしと祈るに外ならず決して〳〵我等が御軍の不利なる事を豫言する抔とお思ひ玉ひそ、兎ハ言へ實ニ我軍ハ前面ゐハ昆伯蘭の大軍あり又後面にハ陸軍大將阿威土の精鋭あり今ニしく言ハ進むも難く退くも難く進退共ニ是れ不可と云ふ場合に陷ち玉へり我等ハ實ハ如何にせハ此の難所を切抜て御身ハ安全を得させ玉ふべき歟と其のみ心痛いたすゐり、大佐ハ洪歎して　兎「左樣にやさるれハ其の如し實ハ我等も今程ハ親王の御勢にて昆伯蘭ハ大軍を駆破らんハ十死一生乃軍せでハ叶ハじと思ふに又退軍せハ彼の阿威土に襲留られて是亦た難義の合戰たるべしせハ豫て知れり然らハ今ハ退くと云ふ念を止め唯一途に勝負ハ運と天ゐ委せ進んで前面の敵軍を破り上帝若し我々ハ棄て玉ハぎハ倫敦ニ馬を乘入るゝ歟さらずハ潔よく屍を戰場ハ土ゐ曝しを朝恩を泉下ニ報ぜんと思ふのみ現ニ御身等も此外ニ策なしとハ御存じなるべきに先刻より我等が兵を進めんとやすを遮へらるゝ如くあるハ如何ニゐ今日ハ於て要用あるハ口尖ハ達者ある論客ニ非ず一人なりとも身命を拋つて御軍の真先駆け戰場ニ忠を盡さんと存ぜる者の多ゐをこそ望ましけれ叛て御身等ハ實に親王

の御爲に生命を無ゐ物ゐせらるゝ覺悟あるや　日「其ハ仰までもいらハぬ但し我等ハ早や年も罷り老をひへた此老体ニて戰場に向ハんと中ニニ若き人達の足手纏たるべし依て御軍ゐハ子ニてハ三人の者を出立せ忠義の爲めに身命を輕んぜべきよし豫ニ申聞せ置てハぞや　兎「御志しの殊勝なるハ拙者もわと〳〵感服ニ堪へず愛子の命すらも惜まずと申さるゝ其許が何分先刻の御議論より引續きて十分の御奮發ゐ様あるハ抑も如何の理由なるぞ御心中殘る所ゐく真直ゐやさせ玉へ。貝倫ハ傍らより「其義ハ我等よりやさんが我等兩人決しく貴所と反對の議論ゐ持して親王の佐軍不利を謀る如き者ニ非ず飽迄も士都華土家の再興を祈るニ他念ハ無きが唯奈何せん我々の心中ニ一種不思議の疑惑ありて其爲ニ事の決行ニ躊躇をるゐり、其仔細ハ外ならず平たく云へバ此の曼府の住民ハ彼の蘇格蘭の高地人と一團に爲りて事を爲ゐを厭ふと云ふ一義あり　兎「其ハ又何故ゐ高地人を厭ふニや彼地の人ハ皆勇壯の武士ニして急ニ臨みて約に背くゐ云ふゐ如き卑怯未練なる者ニあらず抑も今日斯る勇士を忌嫌ひて何人と此の大事を成さんとハするぞ、と憮めハ　貝「イヤナニ別ニ忌むの嫌ふのと云ふ仔細ハあらぬが其實ハ此府の市民ハ彼地の人を懼るゝと云ふ情ハ有る故あり猶委細乃情實をやさハ唯彼の勇壯の武士どもが入来らハ婦女財産を擧て悉く捕分に遇んゐと云ふを懸念をるなり。

大佐は呵々と嘲笑て「其は入らぬ心配なり拙者其取締は十分ゐ爲さしむべし　日「大佐、其話は先づ措て足下は豫て義勇兵を募るとの事をやきましが其姓名簿は既に整へ置れたりや　兎「左様、と云ながら上衣の隱袋より手帳を出ざし　兎「實は此に認めさる姓名中には左のみ高名ある人も無く殊に人數も寡なく且は各々に見せ參らをるも赧顔の至りなれども唯拙者が見込だ々を披露をるのみ叔拙者が第一の味方として認け置たるは慈莫士、那烏遜なり　貝「ハヽア慈莫士那烏遜とな、如何さま彼は此街にての第一の舊家と云ひ殊に人品好き舊教の熱信者なり實は我等と少しく緣合の間なるが此を初筆に認られさるは我等に面目ありと存ずるなり叔其次は　兎「比得、莫士其次は多度士、莫耳合此は成耳斯の舊家なり其次は戎、聰土西此は諾全伯爾の紳士あり此等の人々は予は皆士官ゐ引拔て使んと見込み居れり之に加ふるゐ日根先生の倅子息三人あり即ち多度士達理西。查兒斯。魯伯土是等なり

日根は愁然として涙を浮め「唯今大佐のやされし我等が兒子三人は即ち此國正統の天子慈莫士第三世陛下（查兒斯親王を斯く云ふ）の爲に死を以て忠節を盡すべ死者共ゐて此彼等が平生より朝夕上帝ゐ祈る所は何卒陛下に幸福と下させ玉へ仇敵たる者共を亡ぼく退治あらせ玉へ天晴此國の人衆を以て悉く陛下の號令の下ゐ服從せしめ

陛下の御頭の上には御祖父なる慈英士皇（第二世）の大冠を再び戴かせ玉ふ様にと其外み祈念し居る事は我等も常に存知仕つてゐ、と云ながら眼鏡を拭ふ蓋し此の老博士の心中には此回戰爭ゆゑて打立せおは再び活ての對面は叶ふべからず愛さ兒子等と相語ふも幾程も無き間かと思へば老人の心弱くて不覺の涙に搖蕩たるものおるべしと想像たる兎士禮も亦あ鼻打かみて「伜子息等の忠誠の段は拙者より具に親王に奏上をべし但し斯る忠勇の壯士を子丹持れたる伜身の面目は如何許りぞと夫のみ伜喜びあるべくゐ、と色代しつ、　兎「扨其次おるは骨弗苦おり此は我宗教若僧なるが隊く御軍ゆ隨從して陣僧に成らんとを望めり尤も同人の話に據れば僧侶の方にも或は十字を把て吊祭を掌り又は兵器を振つて敵陣に當らんと欲する者も少なからぬ由に聞けり　具「ヤレ〳〵骨弗苦も我々の一味に加はるかや彼は年若なれど學問の質が好くて今二三年せば神學の博士とも成るべきものをよしおき俗事に關らひては今迄の僧業も水の泡と成るべきか、と眉を顰むれば兎士禮は冷笑く「左様、其は頭ら夜被は冠りて蠹虫と同じく聖書の蝕荒しを爲るにあらねば或は學問の退歩するやも知る難し併し若し味方にして勝軍し此國が親王の伜手に入るとすれば彼の小僧めは一足飛の大僧正ナンと少々學問の退歩を厭ふて斯る大投機の事業ゆ掛らぬと云ふ痴人は無欲を飾る僧侶社會ゆも多く

御座るまい、扨其次は安德弗、伯多。戎日、弗列丟兒。戎佛律古。多麼士、查土瓦古。多麼士、沙德兒。先は箇樣の人達なり……日根先生此沙德兒は貴寺の講中の一人では御座らぬゥ日「其お尋ねと蒙ぎば拙者も甚だ尊が高し勿論同人は鬚剃職にて身分は至つて輕けれども精神は最も大丈夫ゆして決して是まで英吉利の皇位を竊み居る者（今の英皇）の爲に幸福を祈つた事は見受やさぬ殊に此者の父なる人は千七百十六年の亂に生捕とおり首を刎られて此地の獄門に梟られたるが斯る懼ろしき目を見ても怖しとも思はぬ結句今の朝廷を君の讐父の敵宗教の魔窟と惡み居りて此回の擧にも真先掛て御味方に附き身命を棄て悔ぎと奮發し居るは如何に頼もしき人物にはらはぬ歟　兎「ハヽア左程の盡忠家で御座る歟然らば拙者取揚て下士官に致さう扨其次に一人の若き男あり尤も愈〻我黨ゆ加はるか否やの血判は致さぬが此者が入れば中〻役に立つ立派おる士官が出來べしと存ずるなり殊ゆ其男は實に奇麗おる美少年にて精神の確なるは似ぎ外見は深窓の妓女子とも見紛ふ程の容色おり。此を聞て貝倫は「然らば其者の名を我等が當てゝ見やさん歟美少年にて精神の確おりと云へば大方亞熱兒敦、令廣で御座らう　兎「如何にも其人おり誰目も美を見るには左程には違はぬもの哉と打笑へり

兎士禮は日根丹對ゐて「那の美少年に初て逢たるは先生のお宅おりしが一体那男は何

で御座るナ。日根い笑ながら首を傾げて「されば
なり阿熱耳敦、令虞い矢張阿熱耳敦、令
虞おり那男ぢ身分ゴ就て我等ぢ知て居る處い其丈あるが大方當人も矢張其丈より外い
知るまじと存ぜるなり。貝倫い微笑つゝ「否然らば我等い今少ゴ悉しく知れり元来那の
若者い今甚士藝多街ゴ住居する小商人の平烏德と云ふ者が世話人ゴて最初い其文法小
學校ゴ入學したるが其後邊伯德……君等も知る彼の豪商の許ゴ引取れて當時も猶其家
に居れりされど彼の父親い何人なるか今ぢ分らぜ唯其親戚ゴ金滿家ありと見えて月ゴ
少額からぬ小遣と送り来るが如何ある故にや其姓名を告ず殊に其親戚即ち後見者の姓
名を強て問ふ時い其時より月の金を送るまじと其金の取次人ある銀行より彼の少年ゴ
斷りたりとて彼者も遂ぢ之ぢ糺すことを得ず何様是にい餘程深重なる仔細ありと覺えて
也「如何ゴも其ぢい仔細も因縁も有り氣ぢ聞ゆるが併し最初よりの世話人平烏德い其
後見人の誰さる歟を知り居るならん　貝「否彼も知るまゝ抑も平烏德が那の少年を引取
たる最初を言へば頗る奇怪の話説あり其い今を距る十八年以前の事ゴぜよ一人の老婆
……此の老婆い自ら令虞ぜい名乗たるも見名の果して真なるや否やを知らぬが兎ゴ角
身装人品ともに惡ごのらぜ倫敦邊からゴても此府へ旅行したる歟と見ゆるものが生れて
三才程ゴも成ぬべ　ち一個の男兒を懐さて彼の平烏德の家ゴ来り、此兒い我が一人の孫

ゴて名を阿熱耳敦、令虞と呼り其理由い告難さも仔細ありて親知ぜと云ふものゴて人
に與へんと思ふなり勿論此兒の養育料并ゴ成長せし後の小遣として年ゴ五百磅の金を
銀行して送らすべきがお家を見掛くお頼みやす如何ゴ貰ひてい給いらぜやと云ふ平烏
德の女房い情ある女あるが家ゴい一人の兒子も無し見れば可愛き男の兒なり、其いい
と易ち話なり然らむお貰むやさんとの相談整ひて此時より今の令虞い此家の世話を受
る事と成りたる如し然るに老婆い其後影も形も見せぬが約束の金子い指名の銀行より
間違なく送り来る又令虞も成長くおりて知るゝ如ち少年とある平烏德夫婦い實ゴ天よ
り授りたる寶玉なりとて我が實子の如く愛で慈しむ程ゴ早や入學の年とも成たれば我
等い彼等夫婦ゴも亦當人にも諭しく小學校ゴ入學備業させたるが彼れ學問の質甚だ好
ければ幾程おく見科業を卒りたり予い又勸めて此程の學問ぢて其業と廢んとい然るべ
からず此よりい實地ぢ就て修行せよと云ひ當人も其氣ぢ成て彼の取次の銀行して其旨
を右の後見者に通ぜしめしに後見者も其幾い至極なるべしと云ふ依て予い又彼ゴ勸め
て邊伯德の銀行ぢ遣り當時い其事務を見習いせ居るが極めく怜悧ゴ然も勇氣ある生れ
あれば彼店にても今い一顧の役ゴ立つ若者となれりと聞く但し我等も那の少年の態度
と云ひ骨柄と云ひ天晴れ然るべ　ち名家の子孫なるべしと思ふが唯其進退のみい一ゴ右

の後見者は意中に在りて當人の自由よも成難る事なるべしされば彼の者の我黨に一味はるゝ唯今ゝ豫じめ其然る期し難らるべし、と云へば日根ゝ傍らより「一應の道理ゝ左も有んが素こ此舉ゝ君の爲こ忠誠と盡もの意こ出る事なれば後見者が士都華土黨で有る以上ゝ決して否を言ふべらず既に先日我等も内〻此事を語りて其心を素引ゝ見たるに本人ゝ頗る決心の樣なれども唯後見者の意中を測り兼る如くに見受たり　屯「如何にも其後見者が巴諾伯黨の者あれば詮方なきも左も無き以上ゝ別の仔細あるべからぜア、何卒我黨の人であれのし彼と味方こせば片腕の頼みとも爲る男なり……時にお話に身が入て此所に酒の有るをも忘れたり如何に御兩所寒さ凌ぎこ一盞傾け玉ゝぜやと云つゝ大佐ゝ葡萄酒の瓶を取上げたり

●第三回　力査勞苦利

屯士禮大佐ゝ酒盞を下こ置き隱袋より時計を出し見て「ヤ忘て居た今夜ゝ勞苦利こ面會もる約束で有さ今一時間經ば其時刻で有る……各〻方にも那の男ゝ御知人で御座らうナ　日「左樣先年一寸と面會した事も御座るが大方先方でゝ忘れて居りませう殊こ那男ゝ更こ當府へゝ參らぬ男で我が知行の勞苦利（地名）このみ引籠り居ると云ひ其故に別に親しき朋友も無しとの噂、何やらん容子と見れば顔色も愉快ならぜ料見も狹さ

うに其受らるゝが、と云へば屯「否其御說を承ゝれば世間でゝ餘り那男の上を知らぬと見ゆる、如何こも彼ゝ外見も何か面白からず所行も頗る豪慢の所ありて至て自負心の深き人物でゝ有るもの、決して陰險の性質ある男にゝあらぜ恰ど我等ゲ佛國こ出立つ頃彼ゝ其兄の家を相續し財産も已が手こ歸しく程なく大夫の爵にも上りしが此折拙者の叔父力査屯士禮が懇親ゝ交りたれば我等も其續ゝよりく互こ知る人とゝ成れるなり日「何樣所行も性質も左樣かゝ存ぜぬが千七百十五年の旗揚こゝ確か連判にゝ加ゝらぬ男と思へり　屯「如何ゝも連判こ加つて直接に働きゝ致さぬ其故ゝ彼の父闌德布ゝ巴諾伯黨と直接の關係を持て我黨に必死の敵對を致せしが其折彼ゝ父と一所に住たるを以て勢ひ十分の力を出すを得ぎされども内〻ゝ餘程の援助を我黨こ與へしとか聞えたり　貝「左樣の意味合も有るで御座らう原來彼家ゝ舊教徒と存じたが　屯「如何こも以前ゝ舊教徒で御座つたが彼の父闌德布の時改宗し其嫡子即ち今の勞苦利ゲ兄こ當る阿西華土の代も同じく新教を奉ぜしが其兄が死し今の勞苦利の代とおりてより表向ゝ新教を奉ずるも内〻ゝ舊教こ心を寄るか其邊ゝ拙者も確とゝ知らず扨又た彼が兄の家を相續したるも亦た不思議ゝ因緣ゝ抑も先代の阿西華士ゝ昆威家の上人の娘こて美人の聞えある邊律多を妻こ娶り夫婦の中こ一人の男兒の出來たるが自身ゝ世を去り此の

男兒の相續者と定まりし後如何なる仔細か其幼兒の踪跡知れぎとありしよつて彼男が我家即ち甥の跡目を相續する事となりしなり確か其年は千七百三十四年のと覺えしが今以て彼の幼兒の生死の程も知れぬと云ふ何と不思儀の咄では御座らぬ歟　貝「シテ見れば彼の勞苦利は未だ實の相續人とは云ふを得ぎして其幼兒即ち正統の嗣子が生死の知るゝ間暫く財産を保管すると云ふ樣なる次第で御座るかナ、と語ふ時此家の主人は遽がはしく此室より來りて大佐に對ひ「唯今大夫力査が貴官に御目に掛らんとてお出あり此へとやさんぬ、と云ふ端ゐ力査勞苦利は早く室の中に身を進めて屯士禮大佐と互に握手の禮を爲したり

今此室に入來りて屯士禮大佐と握手したる力査勞苦利の人物を如何にと見るに年齢は尚五十前後なるべきが如何なる心苦ぢや重ねたりけん其齢よりは殊の外に老く見ゆされども容貌は頗る嚴めしく筋力も逞ましきが何とやらん不人相の面色にて眼は凹く與の方へ入込て底光りのするに其上より長き眉毛の生騎りたるは深山の木の間と漏て射る電光ぎも謂ふべからん歟衣服は騎馬の服裝ゐして長靴と穿ち長き腰劒を左手に提げていと横柄ゐ大佐と二つ三は應答し夫より一座の人々にも挨拶したるが日根博士ゐは左のみ尊敬の意を表せぎ尋常の會釋のみゐて例の自負心を眉宇の間に呈はしたるも貝

倫には殊の外節を屈して、蹤て先生の芳名は聞及びたり今夜拜顔の榮を得るは此身に取て何寄の幸福ぞや抔繰返し言つゝ心底より喜ばし氣に見受られぬ、此等の應答の果てたる頃を見て宿の主人昵哥兒西は親ら携へ來りたる新しき葡萄酒の口を開きて新舊の客に勸め及菓子抔類を取並べて周旋を大佐は先づ酒盞を擧て「如何ゐ各當家の主人の爲に健康を祝さうでは御坐らぬ乎、とて一杯喫む夫より銘々四五杯の酒を傾けさる頃　昵「大佐殿尚御入用とあらば別の靜閑なる間も御座り升ると　屯「否其ゐは及ばむ朋友と會て談話をるには此室ゐて十分なり殊ゐ貴公が別ゐ巴諾伯黨の者共を引來りて此方の密談を聞する心配も無しと思へば、と打笑へば昵「イヤ其義計りは御安心たとひ如何樣の事が御座らうとも彼奴等ゐは私し方の扃口とも跨がせませぬ、屯「ソレガサ何寄ろ御馳走で御座る、ぎ又打笑ひつゝ再び酒盃を擧て一杯喫み屯「時に大夫力査先づ用談抔仕つらう、如何で御座るの貴所の方に少しは勇義兵の御目的も御座らず歟實は我々三人とも必死となりて募兵の心配を致せども何分にも事思ふ如くに捗々しく參らぬので困却致す。力査は之を聞て彼の凹き眼を光し長き眉毛を擧おがら「ソレハ甚だ承はつて驚き入る我等の方にも然らば箇樣ゐ人物をとやぎ其人間の見當とても差向き御座らぬ既に我等が知行所の小作人をも先般采樣々に覘得いたし親王の御味方やせよと勸

めしが彼等は一同大不承知ふて強てやさむ大事は破裂をも来し無まで死勢ひおれば我等も餘義なく説得を先づ中止と致し右の募兵の行届かざる旨を目の當りお咄やさん爲に實はあざ〳〵當府まで出張せし理由あるが去とは困却なる次第かな、と額に手を當て案じ入たる体なりしが暫くして首を擧げ　力「右の通り兵士の見込は御座らぬが軍用金調達の御約束は拙者十分履行いたす此は拙者が家産を擧くも我君の爲に差上る心底で御座る、と大佐の面を見詰ながら熱心なる口氣を以て言出せり

屯「人數が出来ぬと有まで是非も無し但し其軍用金調達は何寄にて實は當方其の金員の不足なるに只今當惑をる最中なり、扨何程御調達下さる、や　力「差向き一千磅だけを出さべし勿論前にもやす如く親王の御爲と有らば家産を傾くるも厭はざる心底おれば、伯差支やいらはど何時にても更に力の及ばん限り差出すべし……扨先づ我等が持參したる一千磅を此場で伯渡しやさん、とて力査は我が隱袋へ手を入れて紙入の間ふ分みて右の金額の手形を出して屯士禮の前に置くゆゑ大佐は確と受取て懐中に入れ　屯「誠に過分の伯出金にて親王殿下にも嘸このし伯滿悦と察せらる我等は此より直様北方の伯陣に參り此旨を伯前にて奏上し又手形をば會計官布耳令の手に渡すべし、と云つゝ又歎息して「實に我黨の紳士豪商など云る、者が貴所の如き心入にて各々奮つて献

金せば戰爭の最中軍用の事欠く抔の事は有るまじきまで其まで附ても貴所の忠義は我等は旅でも感慨に堪ぬ、と云は日根も貝倫も辭を揃へて其出金を喜び其忠誠を賞讃す。力査は勝を進め「金元事は先づ跡廻しに致しても肝腎の兵が無れば行末の我等が運命も氣遣はし既に拙者が當府へ參る途々なども早や此地には何千と云ふ大勢の義兵等集り居りて皇軍の先鋒をも承はられし事ならんと存ぜしに……シテ應ぜる者無しやさきゝも凡何百程の兵はあるにや、と問は屯士禮は肩を振て失望の意を示しつゝ、屯「今更ら貴下に偽りを言んも益なけれど事實有の儘に斯うやそは殘念ながら愈々旗揚の日とおりをば何百は扨置きぬ何十と云ふも覺束なき程の少數なり。力査も極めて不興氣の顏色みて　力「併し貴所が譯て同盟々々とやされし其同盟の人々は如何致した屯「所が平生伯忠節々々と忠義立を鼻尖に光らせし同盟の奴原は親王の伯旗揚を聞くや否や家産ありて身動きの成ぬ者は尻込し身の輕き山師共は皆逃散りて今日は誠にやそも恥かしき淺猿き有様と成り果てたり。力「ハテ扨承はれば承はる程驚き入る左様なる始末とは夢にも知らず既に毎度出席する我黨の集會席にて豪飲激論常に葡萄酒の瓶の數を飲干し事有らば命を塵芥よりも輕くせんとの口氣あるは此の曼丟多の府民に多く拙者も天晴れ頼母しき少壯有爲の人々なりとの思ひもよ……併し其人物が悉く逃去た

りとやを譯よも之有るまじ其中の十分の一を得さりもえ五百や千の義兵を得るまじ容易のるべき事と存ずるが、と日根と貝倫の顔を見顧りたり

日根い力査の問ふ應じて「唯今兎士禮大佐ふりの作說もあれど拙者が考慮る所ふてい左程の絶念せしものとも思われぬ今てこそ斯く人氣の引立たれ「旦親王の大軍此府ふ臨み先陣の鼓聲府の墻壁ふ響き渡らば人心忽ち擬昂して今迄二の足を踏たる者も奮つて味方ふ馳せ加わるとあるべくやとも思ふなり」力「其いさる變化も有らん然あがら現ふ今迄同盟せし者すらもいでと云へば逃散る如き形勢あるふ是まで然とも見る四人間が作旗の影を見て急ふ馳せ附き參らせんと云ふ確と頼まれぬ詰おりされば万全の策を謀るふも又我等の名譽を全くして親王ふ忠誠の實を觀し奉つらんふも兎角ふ募兵の事第一なり、やれもは失敬の至りなれども日根博士ふは當府ふ於て内外の信用衆人の濁仰名望勢力兩ながら十分に在をあきけ一回勸進の勞を取れなば大義ふ與する者小荊の大風に靡ふが如くあるべしと思はるいが殊ふ作子息三人も作味方に屬じて忠誠を抽でらるいと云ふ其親しき學友抔をも勸め玉はば二十や三十の人を得るには半日も費きるべしと思ふは如何ふ」日「否愚息等も拔目なく周旋ば致し居るが其につき唯今一人我兵の士官に引揚げ度しと云ふ人物が現ば是たり」力「其は何と申す名の男

おや」日「名前をやすも貴所ふは作承知あるまじきが阿熱耳敦令虞と云ふ少年なり」力「左ば之を聞くや否何か少しく驚きたる面色ふて」力「ナニ阿熱耳敦令虞とや其は爾加多出の男ではは作座らぬ歟」日「其義は我等も存ぜぬば作返答を致し無るが何ち世間の評判では何國の生れが當人も知らぬとの事ふて人品と云ふ態度と云ひ兎角高貴の落胤とやでも宜しき男おり「ア丁度宜しい今其少年が來れり」と貝倫が云ふ時此家の主人昵哥兒西は彼の阿熱耳敦令虞を伴ひ室の戸を開きて座敷の中ふ進み入るを

第四回　英雄の初對面

令入來りし阿熱耳敦令虞の風采は既ふ前回より其美少年たる事を屢ふ言たれば今又事細ふ云ふおも及ばれど顔色の白きは北方の雪をも欺くばく切目長き眼ふ愛嬌あるは南方の花かとも疑はる眉の濃く鼻梁の徹り口元の確りたるふて才氣の逞しきも知らるる手足の節伸て身材の高きふて骨格の健かなるも推測らる總ての動作ふ禮法に適ひて物言ひたる辯恰も鈴を鳴すが如し容貌に由て其年齡を量れば廿才と云て一才をや踰たらん歟正ふ是れ口を開ふは千万の人士も立地に其命ふ應ぜじとやへく義を見ては半生の生命も只棄て塵芥の如しと云ふ勇剛辯才美貌の四長所を兼備へたる稀世の俊秀才絶代の美少年とは見られたり

斯て令廣に人を會釋し又也士禮大佐の紹介にく加査にも知己となりさるが此時力査い令廣の人品をや思ひ附けん頻る懇懃を運びて物言ひ掛けなどするが令廣に又如何なる故をや不興氣と云ふまに有らぬも心中自から分さむ所あるが如く打解たる氣色なし是れ抑も如何なる理由ぞ此時令廣に最初まで力査と名對面せし時より主地に素より何處とも知らぬ又果して然るや否らぬや確と心まに覺えねども鬼ぬ角彼が底光りのする恐しき眼まて只一度睨まるたりと腦の何處やらまに覺え居るものゝ如くまて何とやらん不愉快の感情まに堪ざりしが例の才氣まて其を押鎮め漸くぬ破綻を現はさぬ迄に語り合たり力「令廣君今承はれば貴君も我黨の爲まに一臂の力を添らるゝとの誠まに此上なき喜べしき義まい、と會釋をまべ也士禮大佐も「左樣ドウゥ左樣致し度い尤も先は概方は承諾下されるとやものゝ未だ十分の域まには至らぬが、如何で坐る令廣君幸ひ此まに大夫力査勞苦利も臨席あり此席を借て我が皇即ち慧莫士第三世の爲まに忠節を盡さんと云ふ一言の誓を承はり度が何で坐ろう左も有らば直樣貴君に事務を與へ官命を申降し參らせんが、(前まも云る如く査兒斯親王即位の日には祖父慧莫士第二世の後を承て慧莫士第三世と爲り玉ふべ也につき此黨にては竊に前途を視し又尊崇の意ふて斯く云ふ)と云へば令廣は正確せし口狀まて「其は少し是親切ゲ早過るとまものに

ひはぜや、と云ふ大佐は笑ながら「否く我等は早い處か寧ろ遲過ると者へ居れり故如何とをれば貴君の如也有爲のお人を親王の是味方まに附け奉るは第一の是忠節とやものゝまる未だ其場合まに至らぬ而して親王は最早や昨今此府へ是馬を進ぬ玉ふされば我等方にては甚だ不手廻りと思へばなり　令「數ふらぬ我等を人ゲましく思召ての是口狀は心魂に徹して辱けなくは存ぜるがサテ奈何せん右のお詞は是即答の出來ざる而已ならぜ丸で反對の是斷りをやさねば相成りません皆樣も略是承知の如く小生ゴは人は知らぬが一人の後見人が是座ります其後見人より令日一封の手紙ゲ參りて此度の事は是つ也決して親王の是味方を致を事は相成らぬとや越したり我等も自由の体をらむ今朝大佐よりの是談示も有り外ならぬ貝倫先生又た日根博士も御思立の事なれば盡樣ゴも是返事を申上る筈なれども殘念なる哉右の仕送を受る不自由の身上にて何分其は後見者がゲを事を親の命令とも唯今は守らねば相成らぬされむ今朝大佐に對して略是約束を致したる一義は遺憾ながらも是取消を願ひます誠まに情け無き身の程は是推察下されよ、と言終り無念の涙を汗拭にて悄と拭ひたり

力査は令廣の辭を聞て氣色を損ド「拙者が差出でゝ事をやすい失敬ながら拙者が着し大佐で有む蹤ひ其約束が半表半裏で御座うとも一旦斯うと誓れた上からゴは其辭を反

舌まゐさせぬ又貴殿とても天晴れ名譽を重ぜらるゝ紳士と見ゆるまゝ良や後見者が兎角の是非をやせはとて其爲まゝ前言を食み不信實の名を甘んじて受らるゝと云ふ如き卑怯の擧動ゐ自ら恥て爲し得らるゝ義理でも無らうと存ずるが、と云ふ辭の調子も急くし少しく迫込たる樣子より大佐ゐ暫くと押止めて「力査殿御迫をさるお令君震ゐ未だ「此度御味方」とやす誓約を致されたでゐ御座らぬ然る以上まゐ「此が當然れ道理で有る」と御自身まゐ信ぜらるたる道を行ふまゐ於て御當人の存意次第決して舉兵の義まゐ御同意お紀を食言の不信實のとゐやされぬこゝ併し拙者も此程まゐ見込たる其人と味方に附け得られぬとやてゐ自身の不面目ゐ扨置て我黨の爲まゐ甚だ殘念る次第なり、如何に日根博士、ドウか好き御考案も御座らぬ歟、と云へゐ日根ゐ少しく調子を高くして「令震君の言るゝ處ゐ一應理あるが如くおれども我等の見る處とゐ甚だ違へり、凡人間世の行義忠節の二字より高きゐ無しされど主君への忠義の爲まゐ親兄の命を背くも道理まゐ於て苦しからず況や其他の後見輩の云ふ所をや夫のみおらず總て事の何たる如問ゐず其本人の斯と決心したる上まゐ後見者と雖も之を差止るの權無き筈のなり況や此ゐ右まゐやを人間第一の高義おれば縱ひ如何なる有力の後見者とやせども此まゐ迄も其威力を及ぼして忠義を爲すを障事おり予の命を用ひざる不義の者おりとゐやを斯く

云ふ權利とてゐ決して之無きものなり、と論ぜれば其倫ゐ徐まゐ「否左を宣ひぞ何樣忠義を盡さと云ふを差止る權利ゐ有るまじきが又其代り我命を用ひざれを住送を何時にても止ると云ふ權力ゐ後見者の手まゐ在るまゐ非ずや然らば今令震君が後見人の命まつ此の思立を廢ると云ふゐ道理至極にして且つ勘辨ある至當の振舞なりと予ゐ思へり、力「拙者又た失敬ながら一寸と御忠告やたし拙者が今令震君なれば其承知をやず後見者を說勸め其者ぐるみ親王の御味方まゐ致をが如何で御座る。令震と此時思案の首を漸く擡げて令「如何にも力査君の御忠告と雖尤もまゐ存ずやを然らば後見者と拙者との嫌ひ者おる銀行に手紙を送り其旨を委しく申し通じませう。也士禮と首を捧て「否まゐ其の義と拙者甚だ不贊成なり元まゐ此事と漏泄を恐るゝ秘中の秘事なるを唯今でゐ寧ろ敵方たるべき御身の後見者に口ずからおらば未しもの事書簡おど送りて云まゐするとゐ大危險の所業と謂ざる可らず殊に我等も御身まゐところ一味を望め其氏名も知れぬ後見者に用も無しされる輕卒の擧動ゐ平まゐ拙者よりお斷りやを……扨先刻より一味の事をば樣ぐまゐやすものゝ一身の進退ゐ實に人間ゐ最大事なり故に事の是非と其身の利害とを好しく思考して其後我等へ明白に御決答あれ尤も我等ゐ今夜此より親王の御陣まゐ參りて即日再び歸府すべくれば返答ゐ其折まゐ好し然らば或ゐ親王へ御味方をやさるべき至極

の道理と君の胸中より發出さるべき歟も知れぬ兎も角今晩は此まで相談を止むべし、と云ふに令虞も親話の纏まきまに「然らむ、と暇乞の會釋しつゝ、部屋の戸を出でんとする時先刻より何ら物を考へ居たる力査は突と起て「令虞君暫く、と呼び掛たり

力査が「暫く、と辯を掛たるに令虞は「何御用ぞや、と再び室の中に入り來れば　力「令虞君拙者少く貴所に御意得たい事が有る尤も今晩は外に少しく用事も御座れば明日の正午頃若し當家に御出張下されば此上なき仕合なり但し時刻の義は如何樣にても宜しく、と云ふ令虞は心得て「委細承知仕る其時刻には必らず參會やすべし　力「御承知と有れば辱けなし尤も其節には拙者の妻をも連來りて御引合せや度し此女は此坐の方々にも知らるゝ如く熱心の親王方にては、と云へば大佐はホク〳〵と首領ながら「宜い勞苦利令壞の御助力が有るとあれば拙者の所望も多分滿足致すで有らう……中に令壞の辯舌で說着らきては見國を破る事は六かしく……然らば我等は最早貴殿を連判帖へ署名の一人と見做さん歟、兎に角又近日御目に掛らう

●第五回　忠告

阿熱耳敦令虞は後見者の異見に本意ならぬも親王方の同盟を思ひ止まり其旨を忠士禮大佐に斷りて彼家を出で我家へ歸る路すがらも何と無く心落着ぬ兎にて奸人角して

は如何あるべき抔思ひ續けて一人淋しく歩を進むる時後面より來りし一人が「令虞君か、と聲を掛たり此方は驚きて振顧れば此人は別人ならぬ今彼家にて暇を告たる神學の博士貝倫なり　貝「恰ど好い貴所と我等とは歸る路次も同じ方なり夜中の歩行は伴の有るに限る、と云つゝ、互に四方山の事を語ひながら頻て貝倫の住む學林の近くへ來りぬ此時宵の間の雲晴れて月の光は晝の如し貝倫は四邊の氣色を見廻しながら「ナンと好景色では御坐らぬか……併し此の好景色の好街も二三日内には恐しい騷ぎに成るで有らう。令虞は暫く考へて「否小生は左樣には考へませぬ案外に騷動は少なからうと存じまを何故とやすに當地の義勇兵（此義勇兵は政府方なり）も既に此程解散いたし其跡には別に戰ふべき兵とても見當ませぬ併し或は烏合の新教徒が政府への忠義立に少々の抵抗を試さるのも知れませぬが……ナニ其とても寄手の大軍に二三發の鐵砲と擊たれましたら直に敗北で御坐りませう　貝「如何樣足下の言は、通り激しい戰爭も先は無しう殊に親王が御入府に成たらとて永く御滯陣も在ツしやるまい詰り募り得る丈け兵を募ツて直樣南方へ御進發に成るで有らう扨其は左樣と致して私は足下に忠告……否忠告をすると云ふ權利は御坐らぬが斯う知己の間で見ると足下の御爲に相成らぬと信ずる事は一言御異見が申度い姑らく私が私の兒子に異見をするものと思ひ做し

で聞玉へ扨足下ハ明日力査と出會の約束を成されたるらにハ其約束通り明日彼家へ出掛られるで御坐らうナ　令「如何ゴも　貝「然らバ貴所ハ篤と料見を落着て寸時も貴所の後見人が令命を忘れぬ樣ゴ注意し玉へ貴所ハ未だ若盛の經驗が積ず且つ其胸中に才氣が充滿て居らるれば自信の氣も定めて厚からう併し我ゴ老人の目から見ると未だまだ危險い現ふ目前其危難ハ迫く居る其時限ハ遠くも有らぬ明日の正午ゴて即ち勞苦利令壞と云との出會が其時で有る我等ハ唯今其理由を委しく御話ゲさんが彼の勞苦利令壞と云ふハ世にも稀なる美人あり而して其辯論亦た自在ゴして人を虜と爲すと最も其長所たり我等ハ未だ一度も過ハ致さぬが其等の評判ハ隱きも無し其上に彼ゴ父（力査）が先刻ゲせしを聞れしあらん彼の令壞ハ無二の親王方ゴして殆ど死をだも恐れずと云ふされば明日の參會ゴて彼の壞子ハ色と舌ゲ熱心との三と以て足下を捉へ彼黨の囚獄に取籠んと謀ると鏡に映して見るよりも明白にして爲も其事ハ今ハ彼の壞子の第一の職掌と云んも可あるが如し、男子常に言らく我ハ鐵心石腸なりと處が此鐵も石も色と舌との吹鞴に掛ると案外に早く鎔解るものあり さゴ力査が足下を我黨に引入んとして事成されば後陣の壞子を新手ゴして全勝の功を一擧ゴ收めんと謀りしハ智ありと言ふべし足下願くハ注意の上ゴも注意して彼等父子をして智慧者の名を擅まゝゴさせ玉ふな、

と信實を面に現ハして異見の言を重ねたり

貝倫が忠告を聞て令虞ハ莞爾と笑を含み「御忠告の段ハ實ゴ有難く感佩仕つる小生も注意致して其令壞の虜と成らぬやう用心仕ませう　貝「否ゴ其辭が極めて危ふし未だまだ我等の見る處でハ足下ハ足下の力量を知らぬ我等の忠告とて外ゴハ無し唯足下が此危難を免るゝハ明日の出會を斷らるゝの一方のみ　令「否其義ハ我等ゴハ出來ヤさぎ一旦約束を致した以上ハ縱ひ何程の危難あれバとて是非とも參る所迄ハ參らんければ相成ませぬ就て先生ゴ窺ひ度きハ彼ゴ大夫力査勞苦利ハ男の兒を持たれたるや　貝「イヤ男ゴ兒ハ無し兒子ハ今ヤした令壞唯一人で御座る此令壞ハ右の絶世の美人の上ゴ大分の家産を相續すべき順序の人ゴて其名を君子丹令壞と申すがイヤ中ゴの才女じゃテ　令「唯今の御話を窺ひますれバ其君子丹令壞ハ才色兩全の上に財産ふ富ゑ所謂る人間の三長を無たる天晴れ稀代の壞子と存じ升左樣な婦人と知己に成らぬのも殘念の至り……然ながら小生ハ十分に腹を据て此身に降懸る危難を避るに十分ゴ注意仕りませう其段ハ何卒御安心を願ひます、と云ふ端ふ早や貝倫の家の前ゴ來りたり貝倫ハ今や別れんとするゴ臨みて更ゴ令虞の手を握り「先刻よりの說話ゴて最早や十分の得心ならんが兎ふ角明日ハ成得べき丈の注意をこそ望ましけれされば貴所が力査ゴ對し一歩二

歟の約束を立んとする前まへに願くは今一度此老人と相談あれ我等素より貴所の一身に立入るべき權利は無きも今の貴所の身を考ふれば親も無く兄弟も無く又頼母し充親類も無しさらば其身の進退を決する俗に謂ふ相談相手とも云ふものは唯一の朋友あるのみ我等年齢は遠へども貴所をば一方あらぬ思ふを以て箇樣に差出で、事をやすあり努惡くお思ひ玉ひそ呉くも明日の出會には用心あるべし、と誠心面に現はれて轉ばぬ先の杖柱鑑に打つ老人家は規諫の辭に令廣も感涙を拭ひ合ず「世に有難き先生の佞忠告は我等確に肝に銘ぜり明日は必らず共お參向して猶行末の方向の佞助言に預りたいらはんと〻丁寧に會釋しつゝ袂を左右に分ちたる其歸路に又一條の出來事あり其は次の回を讀て知るべし

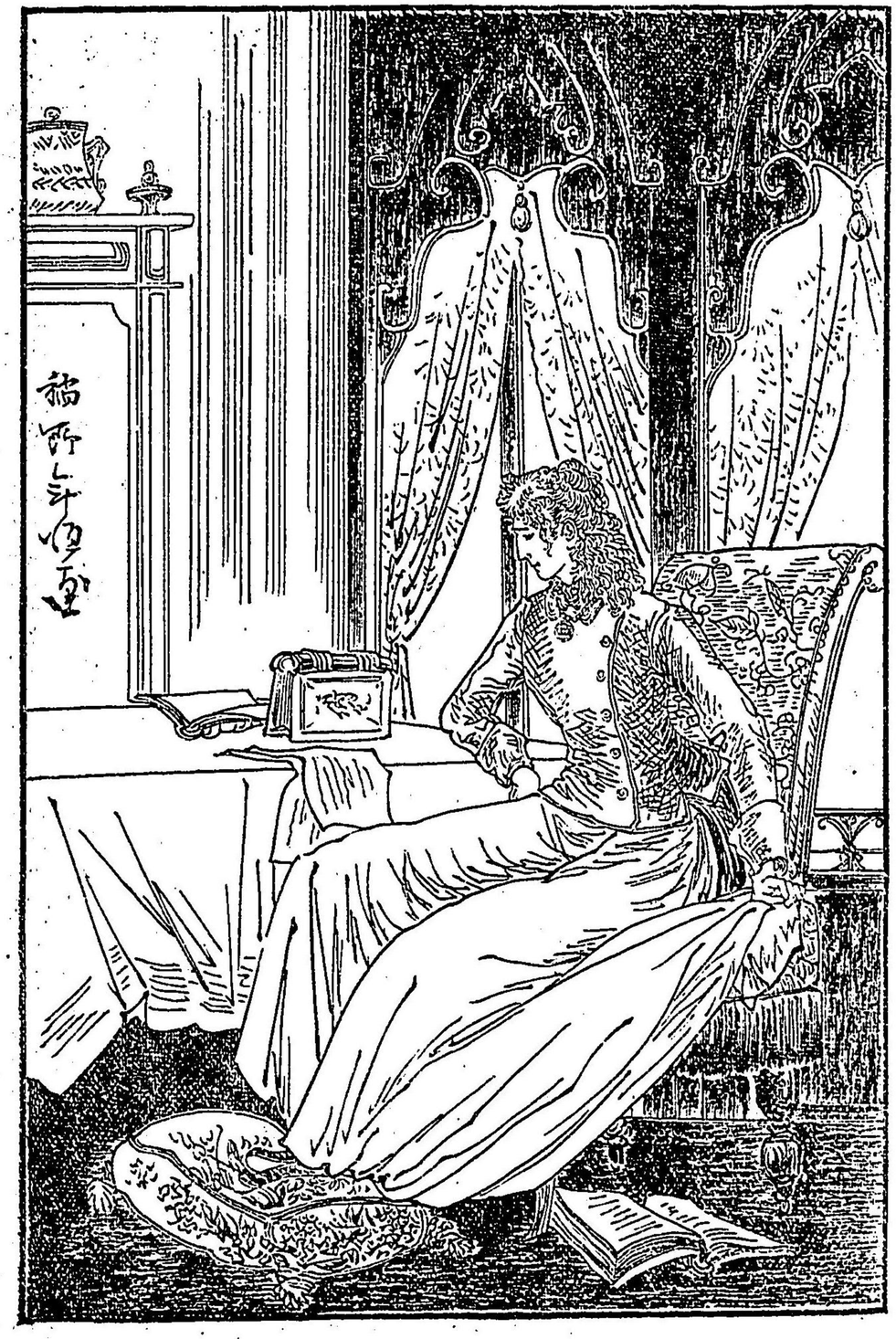
●第五回　行合の辻

阿熱耳敦令廣は貝倫に別れて後月を燈火に我家の方へたどりたるが其心中は今の忠告を聞てより猶安からず其中殊に心に懸るは彼の勞苦利令壤が絶世の美人の上に辯舌に富み凡そ男子と云ふ男子を籠絡するに妙を得たりと云ふ諾にて今迄に物驚させぬ老博士の貝倫が箇程迄に舌を掉ふて我等に忠告の辭を盡すは抑も如何なる壤子あらん其眼中は鬼あらん歟其態度は角あらん歟又其辯舌は如何あらん歟黄鸝の如き舌をや弄かす

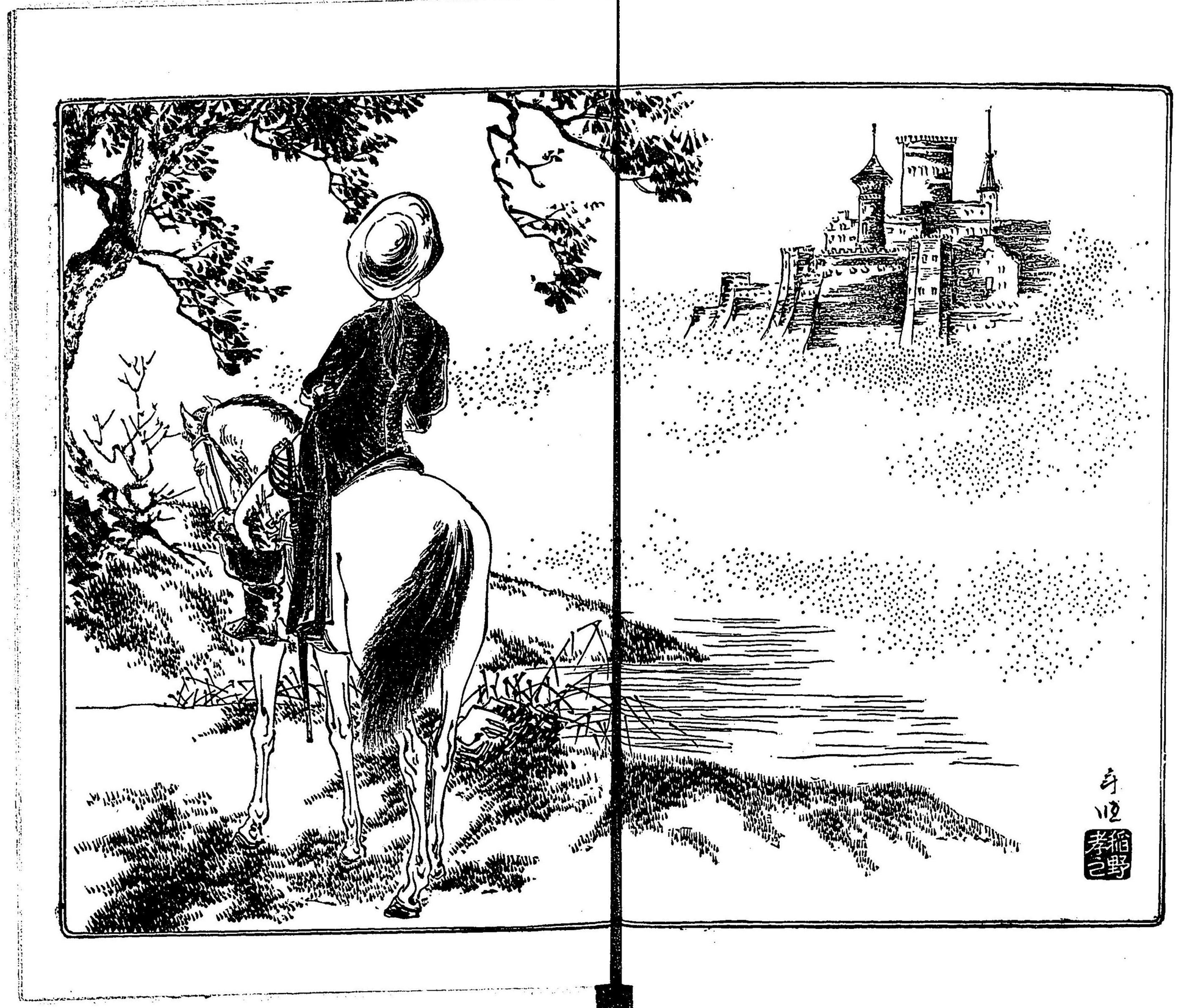
金鈴の如き音をや發すさる美貌に此の巧舌を副へて親王の御味方にと予を誘はゞ予は此に何と答へん歟能迄も後見者の命を守りて不同意ありと刻附ん歟否に其も餘りに情あしさらば對手の出方に依て合体せん歟否に老博士が那程までに忠諫の辭を費されしは此所の事なり此身の危難とは其等の事なり親王の軍も極めたる勝利との見据も附ぬに後見者の仕送を止られなば明日よりして乞食なり如何にして此身の前途を全くすべき恐るべし〳〵抔獨り胸に問つ答へつ河端に出で河岸通りを横に橋を渡りて甚西藝多街に出んとする四辻の此方まで来るに夜の更しの又敵の大軍明日明後日に寄んと云ふに人に戒心を挾まてのは迄は唯一個の人にも遇ぜ折から隈なき充月の影に前面を見れば何とは知らず二三人の人影したり

令廣は前面に人影の見ゆるを眼を定めて熟く視れば二人は婦人にて一人は男子なり又其處を少し離れて僕らしき男も一人見る前の男女三人の者は容貌も夜目にて定かに知れねども衣服物腰確に身柄ある人と見へたり斯る處に又傍らの大路より騎馬の武士二人現出来る其一人は士官にて一人は隨從の騎兵と見ゆるが其士官の樣樣何處やらか見覺にある如くおるは令廣は歩を潜めて月明に窺へば見覺あるも道理なり此ぞ今方昵哥兒西の家にて遇さる兎士禮大佐なりければ扨は彼人は今夜此街を脱出でに北方なる親

王の陣に參らるゝにや要こそ有れと猶身を物の蔭に潜まして窺ゐとも彼方ゐ知らでや大佐ゐ右の婦人の傍に進み寄り馬上ゐながらに稍暫く物語りを其間遠々聞ば何事を言ふか確には聞えねども唯其婦人が其面を半ば掩ひたる被衣を漏て仄に聞ゆる聲と聞ば細く凉しく今宵の空の月よりも冴渡りく先に我が心に想像したる彼の君子丹令嬢ゐ物言ひたるも斯やと思ふ程なるまゝ令嬢ゐ漫心になりて如何なる標致う其顔色を見て遣らんと歩を竊に物蔭を小楯ゐ彼方へ近くを屯士禮大佐ゐ早くも見認て「其處ゐる ゐ令嬢君か、と呼掛たり令嬢も事茲に至りて愁ゐに逃隠れせば惡かりなんや思ひたれば遽ゐしく傍に進み近づきて「大佐にてまします歟扨ゐ先刻承ゐりしは出陣ひな、と言ふ端に彼の婦人等ゐ詞急しく何か大佐に耳語たるが其儘傍邊に退たり令嬢ゐ彼れ婦人の側に往かば大佐が紹介を知己にするならんと思ひしに左ゐ無して婦人ゐ自のら此方を避る如くなるまゝ大佐に失望ゐ爲たれども打つけに言ひも出されぞされども隈ゐき月の影に眼を使ひて被衣の隙より密に覗へば其中の一人ゐ取分て艶美ゐり皆ゐ頬ゐ三春の殘んの雪より白くして唇ゐ九秋の野邊の花より紅ゐなり愛嬌盈たる黑目勝の凉しき眼より彼方も何か意ありてや令嬢の顔と見詰め居たるが此の怜悧ゐる眼中にゐ早く此方の形貌より衣服の着こなしをも見取りしならん頓て此婦人ゐ大佐と目を見合



して何事か暗號の話らしきを一言云ひたるが其儘被衣を深くして伴おる婦人の手を搖さへ傍に待せさる男と諸共に橋の方へと進み往けば供の僕も其跡に引添て橋を渡ると見る迄に影も有りしが向ふ河岸へ行くと忽ち何所へか隱れたり令震に其樣子の不審しきに口をも開かぜ息を閉て彼等が振舞を目守り居たるが今此處を去たるを見て「大佐、那の一群に原來何人ふいに其進退の詭秘なる不審しくいと問ば色士禮に笑ながら「左樣、他身に其名前を告る事に容易さが今彼の婦人等より其事の口留をされた旦ば明白にに中難し但し二三日を經ぜして他身も必らず彼の人に面會せらるゝ期有るべし令「何樣左樣の意味もいてん併し彼の婦人達に當府には住むぬ人ゐて旅行中の人なりと見受るが如何に や 色「其事も斷られたる一箇條ゆゑ唯今他話にやされぜ只先づ一つ言ふべき事に那の中の若き婦人が君の事を好男兒なりと譽て居れり。令震に急込て「其の婦人とに他馬の、此所の所に居りし黑瞳勝の美人に や。大佐に莞爾打笑ながら「扨に他身も那の眼と見られしあ 令「如何にも〳〵我等も那程の愛嬌ある可愛ち眼に出會ひし事に未だいにを。大佐に呵〳〵と笑ながら「宜しい、貴所に能く氣を附け玉へ但し氣を附るとに自身で自身の用心をするより外に無し、那サ可愛い眼色が恐しい動作を爲ましたゞ未だ〳〵此上那樣ゐ働きをするゝも知れぬ能く〳〵用心し玉へ、とて又も呵〳〵と



笑ひたり

令廣も同じく笑ながら「大佐今一つ御尋ね申度し今の那の婦人達は姉妹でいや　兎「否」

こは同肥では御坐らぬが……貴公左程に熱く御覽じたら傍に居た男も見られたで御坐ら

ぬナ　令「左樣、慈莫那烏遜かとも存ぜるが、實は我等は女の方のみ見て居れり　兎「ハヽ

ア婦人の方計りとナ……併し能く當りました如何にも那は那烏遜で御坐る那男も親王

に御一味やて拙者は那を士官の一人に取上たが那程の男を味方に附たは拙者身に取り

面目と思ふもの、、否未だ外に一人非凡のが有るドウか其をも連判に加へ度いが……

併し其話は此所では致すまい、扨拙者は今晩弗列西敦まで乘切て明朝蘭加西兒の御陣

まで參る積り、貴公は明日大夫力査と出會せらるゝ約束じやが此は必らず間違玉は

な其節には彼の話の勞苦利令壌とも知己に成られうがイヤ其は中々美しい眼乃覺る程

の的で御坐るテ、シテ其時には貴所の胸中から思ひも附ぬ不思議の動作を牽き出すか

も知れぬが其等の談話は何れ歸府の上承てらう、然らば、とて大佐は供なる騎兵に自

を食せ騎たる馬に一鞭當て、橋向へと走せたるが蹄の音を跡に殘して看る〳〵姿は見

えぞおりぬ令廣は不意の行合ゆ心恍惚として事を分らぬ遥に其方を見送りて佇立む

と十分餘り漸く我と心附て已が家路へたどり行きぬ

第六回　別非貝倫

前回に言る學林の近所にて最と風流に住み欲したる一構の邸あり其家の中なる一間に令朝餐を終りたる親子兄弟打寄て物語りす其人數ハ都合四人にて男女二人宛あり其中なる一人の女ハ餘り若き方にあらぜ他の一人ハ今年漸く廿才を一才も踰たるならん容顔の艶美なる世に比ひ少なき迄なり又男の一人ハ此の若き婦人よりも二才か三才の兄なるべし容貌魁偉にして料見れ沈着せるハ其口許の締りたる所にも見ゆ此二人ハ實の同腹にて前の婦人ハ此兄妹の母親なれば其年齢も推て知らるされども其顔に寄る波の痕も見えぜ顔色も艶にしくて年紀よりも十才程若く見らるれば其妙齢なる頃の標致の好きも想像られぬ扨今一人の男と云ふハ此母なる人の夫、兄妹の父なるが其人ハ別人ならぜ彼の博士貝倫なりされば貝倫ハ夫婦の間に此程の好兒を持たれば世間の人にも幸福者の一人に數まへられ羨まし死ものと云へば貝倫博士の身上と云ふ迄にあれり扨斯く人に羨まるゝ兒子は一人なる妹娘ハ名を以利沙別と云ふ故に親も兄も別非に之を呼り(別非とハ以利沙別の略稱なり猶慧莫士を慧莫と云ふがごとし)茲に此の令孃の美を書顯ハさんも冗くしくれど亦聊か記者の見る所を記さん眼ハパッチリして瞳青く色ハ白きに臉の邊に稍紅を潮したる隆起鼻筋ハ細く素直に徹りて細かき齒ハ

光澤ありて透明れり纔に笑へば頰の下に笑靨の入る此が顔中の滿邊おき愛嬌を幇くるに又細く優しき眉の髮際の方に偏て三日月形に附たるハ更に一段の艶美を添たり着さる衣服ハ霜降の絹にて質素を旨とすればにや別に粧飾へる所ハ無きも上衣の色合と肌の色と好く映合てつきづきし庭訓の嚴格なる世の流行を門の内に入ねば或ハ野暮たしと云ふも有んが猶人柄好く打上りたる氣色ハ著ろく見ゆ勿論教育ハ十分に行屆きて遺る方なく聲美にして謠うたふに巧みなり其上ハ又裁縫ハ凡此の曼府中並おき手利と稱るされば宴會集合の席に出れば婦人社會の花とおり家居平日ハ又脫落なき經濟家の鑑とおる殊に其行狀ハ方正なるに氣象ハ又た活潑なり親切の上に慈愛を兼ね禮敬の中に愛嬌を含めり例ば種々の煩ハしき用事あるも厭ハし死顔をせず氣に入らぬに接ほるも每も莞爾やうあり一回見れば慕しき令孃なるも深く交れば敬ふべき婦人なりが其上にも尚此の物語にて特筆して記もべきハ此孃子も亦た熱心無二なる親王方の一人おりき

此兄なる人ハ名を愛土華德と云ふ其態度ハ能く父に似て進止舉動とも儼然たる紳士なり素より士都華土家に心を寄て親王の御軍御勝利あれかしとハ願ふもの、其爲に身を過ち家に働つくる如き舉動ハせぜ又貝倫夫人ハ其の形裝極めて古風にして顔にハ薄く

白粉をも傳けさるが流行ゐ頓着せぬ心ゴロに其を昔風なりとも知らず又夫の貝倫も流石ゐ學者とてさる事ゐに一向氣も注ぬ体なり。貝「アヲ予に今朝用事あり此より悉德兒の家ゴ往て来ん」別「お父様那の男の父親に熱心の親王方ゴて其爲ゴ命を棄たと承ねり升たが其氣を受繼でか那の悉德兒も親王に無二の御忠節を盡し命を拋つても我君を御世ゴ即々且に父の讐をも復し度いと心掛るに天晴見上た豪傑と存じ升夫故か那男の持て居る截髮鋏（悉德兒に理髮職ゐり）も妾の目ゴに兵器の樣に見え升る　貝「如何にも那男に豪傑ゴ相違に無いが唯如何にも熱心過て已達の目ゴに少しく急り過る樣じゃゼ」ウゐ那男も又親父に樣なる不幸を目ゴ遇んければ好いと思ふが　別「其ゴ就て伺ひ升が親王樣にに彌ゴ爾加西兒まで御進軍ゐ成りましたか　貝「如何ゴも彼府へ御馬を入られてモウ明日か明後日頃にに此府へ御出ゴ成うも知れぬ　別「ソレに喜ばしい事で御座り升其當日に一鼻掛て妾に御入府の体を拜みゐ出ませう。此時兄の愛土華德に心配氣ゐる顏をしく「其許に左も親王殿下が既に御出にも成たる如き噂をして喜ぶが私の考案には決して當地へ御入府に六かしからずと思ふゝ今の所で極安全の策をやせむ殿下ゴに早く北方へ御退陣あれ飽迄も根本を固め兵力を養つて其後進軍し玉ふが第一なりと思ふが」と云へば別非に些と急込て「お兄樣左樣ゐ不吉を事を仰せらるゝ物でに御

座り升ぬ親王樣の御軍に今迄御勝利計りてに御座りませぬ歟　愛「否ゴ今迄に兎も角も既に波里弗爾其外ゴも國王方の義勇兵が多く集まり殊に此等の府ゴ居る舊教徒の者共も親王樣叛逆人と見認め參らせ征討の軍資を出をとの風說なり斯れば北方の御味方多き土地で成された戰爭の積でに餘程工合が違ふならんさ思ふ此より後に御勝利のみとにやされぬ　別「否左樣ゐ仰られても戰爭に正理の有る方に勝利の有ると自然の爭に道理で御座り升左すれば正統の君（親王）と簒位者（國王）との爭ひゐ親王の御勝軍に早未然に定つて居ると存じ升ナンと御父樣左樣でに御座りませぬ歟、と問掛しが父の貝倫に何とも言にず唯煖爐の炭を繼ぎ居れり、暫くして　貝「忤の達智（愛土華德の略稱）に早や料見も定りて迂濶とした舉動を爲まじと思へば安心おるが那惹莫那烏遜にトウ〳〵親王の御味方の一人ゼ成りたるに、と云ぬゴ　愛「扨も〳〵那の勉強家が軍陣に出んと迄決心ゼしゼに、ハヽア（此時妹の顏を見て）扨に御前の如き熱心なる親王方の若い婦人ゐ說勸らまたと見ゆるナ　別「如何樣左樣でも御座り升うシテ其婦人に莫厄加ゝ敎土列兒令孃かと存じ升。貝倫に微笑ながら「如何ゐも其の敎土列兒令孃おり究竟に我黨に加にらば豫て願望の婚姻をせんとの事より勸め込しものと見ゆる。貝倫夫人に傍邊より「那の令孃の母樣に今に孀婦で居られ升が確か大夫力査勞苦利の妹御と

存ト升た　貝「左なり力査の妹ゴて那の令嬢と君子丹令嬢とハ從弟同士ゴり原来彼の家ハ財産ゴ富み且つ有名の舊家なれど平生より門閥自慢で是迄も令嬢との婚姻が六ゥし、かりしが此回ハ我ゲ所望を達せんとの熱心より母親も那烏遜との約束を承知せしものと覺ゆ又彼の力査も其嬢を引連て當地へ来り親王の御爲に味方を募るが其中那の阿熱耳敦令虞をバ第一ゴ目指て居る　別「令虞どのハ承諾しましたの　貝「否未だ承知乃返答をせぬので今日の正午ゴ或る場所にて嬢と同道出會をする約束を昨晩致した　別「然らバ妾も其席へ　貝「出度いと申すゥシテ何か目的も有るのかナ　別「否何も……と言ゴて顔ゴ紅葉を散したり。貝倫ハ此を見ぬ振にて「那の若い美少年が承諾せねば夫迄の事左も無き時ハ惜ゲ彼の盛の花を叛謀人の一人として刑場に引出して散るも知れぬ誠ゴ人の身ハ危難と云ふ惡魔ゲ圍繞て居る危ふし危ふし

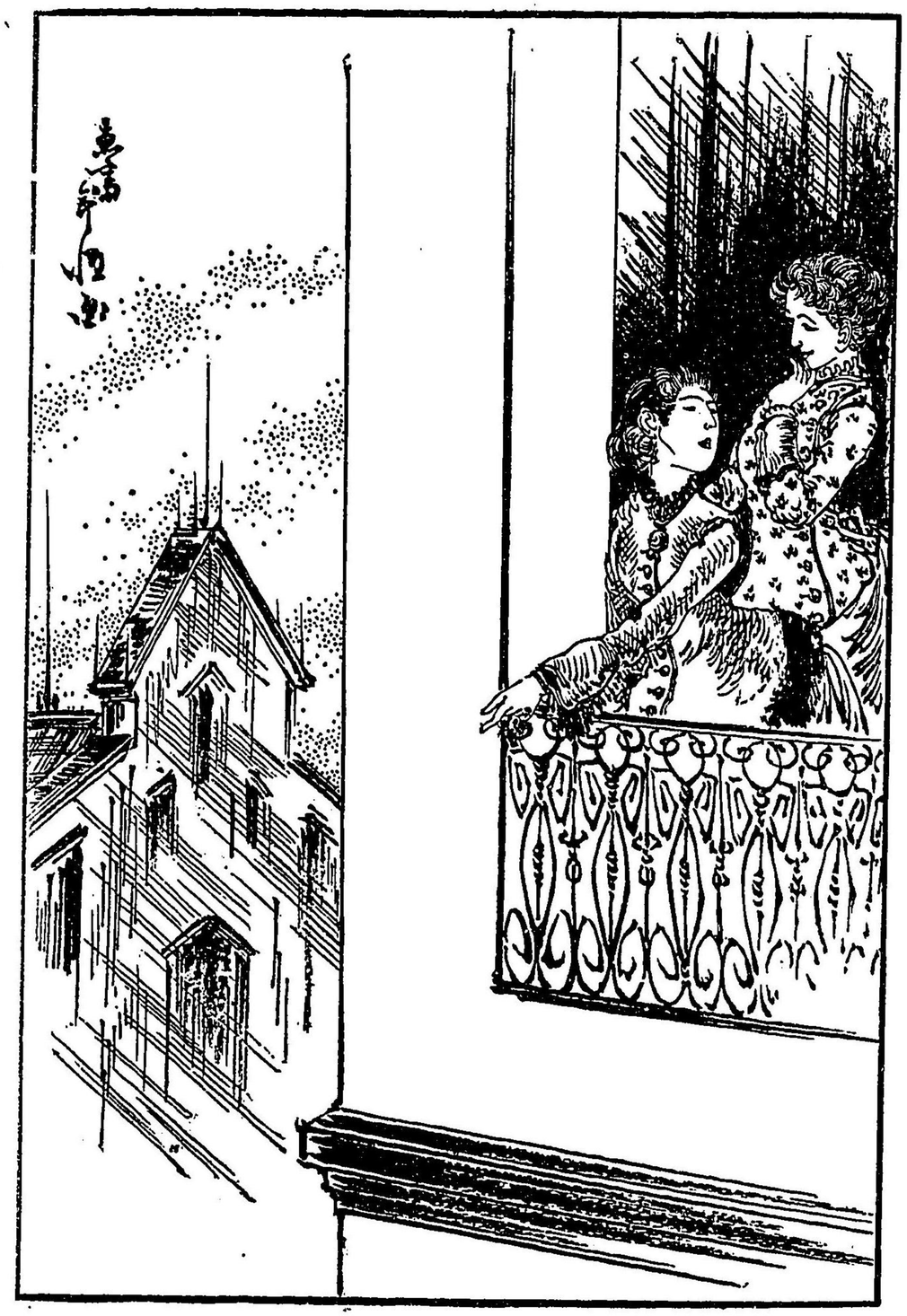
●第七回　聖安寺の兩僧

斯る處に此府なる聖安寺の兩僧當麻士龍舌。便邪氏利馬羅ハ劇たゲしく此家ゴ走せ来れり（此龍舌ハ貝倫の門下ゴて寥〻別非とハ許嫁の約束あり又利馬羅ハ日根の從弟ゴ〻親王黨の一人なり家内の人ゴハ何事にゲと驚きを問バ　龍「先生未だ聞及バせ玉ぬ　ゲ唯今本寺へ蘭加西兒よりの急飛脚到着しく其ゲ報道する所に據れバ彼の爭位者

（查兒斯親王）ハ既ゴ同府へ討入て威德大將も北方へ退軍せられたり殊ゴ其軍勢も最初ハ七千人程なりしが那方此方より走せ集る兵の加えりて早ゲ三万餘の大勢となり其勢ひゴ乘ゲて昨日頃同府を打立ち今兩日の中にハ此地へ向ふべしと聞えいきれバ斯て此地ゴ在さんハ危ふし急ぎ何方へも作立退さあれかしと存ぜる、と云へバ別非ハ每ゴ似氣おく少しく不興氣の顔色して「龍舌殿親王の御事を爭位者とハ聞き惡し矢張御名の查兒斯親王殿下と申されよ、と云ふを、否ゴ、と首を掉て　龍「我等ハ今の國皇戒日陛下丹忠節と盡を身ゴれバ彼の叛賊にさる尊稱を稱ふるとハ能くせぬ　別「其の戒日の陛下の と書僧の仰しゲる國王を世間でハ此の英國の位を竊む簒位者と云ひ升よ。利馬羅ハ之を制して「人各〻信ずる所あり斯る爭論ハ唯今ハ無用なり既に龍舌兄の言れし如く此府内も大方ならぬ騒動ゴ〻砲聲の聞えぬ中ゴと足弱ハ勿論壯年の男子と雖も今曉より追〻落失て今ハ市中の家半分程ハ明家とあれり現ゴ唯今兩人ゴも此家へ參る途にても四五人の人より外ハ遇ひいらえぬ夫のみか當地の奉行亞克氏より命を下して太切の品〻ハ安全の地に送るべしと達せられていハ、と云ふを聞き貝倫ハ笑ながら「されバサ私が家ゴハ幸ひに大切の品と云ふも持合せず良しゲ敵兵に分捕せられたりとても惜しと思ふ物ハ一個ゑ無し然らば遽て、逃るにも及ばぬ、と云ふ落着顔を龍舌ハ諫て「イヤ先

生左様ゴ落着てゐ居られ升ぬ既ゴ蘭加西兒から引揚て參つた警官の話でゐ彼府の人家に賊兵が亂入して家財什具を奪ふ様を當面見さとやまま又今朝倫敦より急報して最早此地ゴ金を送らぬとやす事ヨ成ました……否未だ〳〵現ゴ當府ゴも賊兵ゴ一味せし輩ありて裏應外攻の策略を運すとかにて唯今警官が其者共を捕縛方ゴ向ひました然るに其中の一人なる屯士禮大佐ゐ昨夜中に脱走致して踪跡知れずされども其餘黨の一人或る説ゴゐ兩三日前田舍より當府に參つた紳士と云ゆを取押へん爲め手配を致したとも聞ました(今迄落着たる貝倫ゐ急ゴ氣色を變へ)「ナニ田舍の紳士とナ……ア、今思ひ出したり今朝出會を約束せし人ありしが用ゐ紛れて時刻を延せり諸君御免と急立たる顔色して遽たゞしく立出んとする處へ来りしゐ令虞なり　貝「オヽ令虞君か好い所なり唯今火急の用事出来て力査の旅館まで參らんとする所ありされども老人の足より御身一走り此手紙を確ゴ手渡して賜へるべし其仔細ゐ追てやさん今ゐ其話の時刻ゆ惜むなり、とて貝倫ゐ一間ゴ駈入り忙しく一筆書て封目もそこ〳〵令虞に渡せば令虞ゐ唯肝を潰して呆氣ゐ取られし計りなるが火急の用とあるゴ差心得て書牘を受取り懷中して今日出會を約したる昵哥兒西の家へと走り行く

●第八回　君子丹令嬢



扨も阿蘭耳敦令廣は火急の用事とある貝倫の書牘を受取り其家を走出で途中を急ぎて今日出會を約したる力査の旅館即ち士都華土黨（親王方）の一人なる昵哥兒西の家に赴むき主人に逢て「大夫力査は、と問ば「唯今力査殿は何かの用事で他出せられたり尤も君子丹令孃と其御從弟なる勃土列兒令孃のお二人は此二階にて貴郎の御出をお待成さるゝとの趣なり、サア御案内を、と云ふに令廣は「然らば、とて彼の室に進みたり兩個の婦人は案内を得て室の口に出で迎へ坐に招じて令廣と初對面の挨拶す令廣は先づ兩婦人の面を見るに其艶美古へ希臘の詩人の言ひたる威那西の女神も斯やと思ふ計りなるが不思儀や何とやら見覺えある如き心地せらる……見覺あるも道理なり此は昨夜大路の辻にてジロリと見たる眼の中に未ざ殘り居る現影なれば思はずもハツと面を赧め

ぬ此時二人の中取分たる美人君子丹令孃は令廣に對ひ「令廣君貴郎は妾共兩人を御見覺が御座りませ字……昨夜妾の從弟即ち是なる莫尼加と大路の辻にて色士禮大佐に面會の折り……那折り大佐が貴郎と妾共兩人を知己に爲やうと仰しやい升たが初て御目に掛る御方に往來、然も夜更ての御對面は如何と存じ此方より御斷りをや上げ升た、又貴郎は那の夜更に妾共の若き女子が那邊を徘徊いたさを不審と思召しませうが此は唯久し振にて當地へ參り從弟の莫尼加と一刻も早く面會し度く其故夜を冒して彼家を

訪ひ連立て此ふる旅宿へ誘引致した其譯で御座り升又惹莫那烏遜ハ其途中の談術の爲に親切で送り呉られ升たる迄の事其外の仔細は御座りませぬ、と宛も夏の雲の如ク(昨夜見しと毫も變らぬ)黒瞳勝の眼ヨ十二分の愛嬌を含せつゝ、詞淀ます次第を演る、豫て人傳に聞しハ物うハ今當面親く見てハ容貌と云ひ辯舌と云ふ又と二個世ヨ有まじき才と色と兩おがら全く備れる寶に絶代の佳人かなと令廣ハ只管呆るゝのみ見惚て暫くハ辭も出ぜ稍有て令「實ハ小生も驚死ましたが唯今の御話で悉背疑ひが解ました扨小生も彼節那方かと申す事を大佐ヨ御尋ね申ましたが右ハ令孃方より別段のお斷りが有たとかヨて大佐はお明し下されず大失望致し升た。君子丹ハ笑を含みて「左樣とハ存ぜぬ……併し大佐が妾共の申す事を夫程ヨ御守り下されたとハ此上もおい大慶の義ヨ存ます、扨今日は貴郎を御待受申すセて父も先刻より支度を致し居り升たが唯今餘儀ない用事ヨて……失禮の段ハ妾より幾重にも御詫を申上ます令「否其義ハ小生より御詫を申さねば相成りませぬ御約束の時刻より未だ餘程早う御座ります、が、唯今斯う出ましたるハ貝倫博士より御親父への火急の書牘と申す社を預りまして、と云ながら令廣ハ彼の書牘を取て渡せば君子丹ハ受取りて傍ヨ置て「何卒此の御書牘にハ吉報の有る事を祈ります、時に如何で御座り升父も貴郎をバ非是ヨ御味方にと昨夜も深ヨ申ま

したが妾も貴郎と是迄御心易く致したから是非ふも願つて色士禮大佐の聯隊中ヨ御加入をお勸め申さうものを、と又も花社如ク眼に一層の愛嬌を籠め令廣の顔を熱心ヨ見詰めたる此の熱度にハ如何なる鐵心も鎔けつべし、暫くして又君「貴郎御聞ふ成ましたか那の温厚い分別の有る那烏遜君も御味方ヨ成れました……令「左樣さうで、實ヨ羨ましい義ヨ存ます小生ゑ御味方ふと心ハ彌猛ヨ惴れども唯少ヨ仔細が御坐ツて君「其御仔細も悉しく大佐より承ハり升た併し妾共の考へでハ左乃みの事とも存ぜられませぬ既に右の那烏遜君も御父樣ハ無二の朝廷方ふて悖ヨして親王方に心を寄をバ親子乃對面も是限りとまで御折檻ヨ成ましたが道理の在る處と若い婦人の依頼とふて竟ふ御一味成されました令「ハテ其ハ格段ある決心で御座り升ナ……其若い婦人と申すハ君「其ハ近日御解りヨ相成ませう。此時春の空の如き蒼く優しき眼を持たる一人の美人莫尼加令孃ハ熱心なる口氣ヨて「否其婦人の名ハ唯今是ふて申ませう、其ハ別人でも御座ませぬ、斯く申す妾で御座りまを那の分別ある惹莫が不肖ふ妾の依頼を聞き親王樣の御味方に附たと申すハ此身に取りての上無い面目、少しも恥しい事ハ御座りませぬ。君子丹ハ稍面色ヨ愁を含みく怨むが如く令廣と莫尼加の方を見遣りて「莫尼加、御身ハ惹莫と云ふ立派な御味方をお附申て定めし御自慢で御座り升う、さりとて妾も忠

義の程は貴嬢ふは劣りませぬ今日も妾の思ふ人が「親王殿下の御味方」との一言を申されれば貴嬢と同様百年の身を誓て其御人に委せ升るが残念ながらもと……再び深くと令廣の面を目守たる其可愛き眼中には一滴千金にも價しつべき涙を暗に含みたり令廣は此時心悸亢ぶりて血行激しく常には清冷にして是非の判斷を過たざる腦漿も今や蒸氣と變ずるまで熱度を増して眼前の黒白をば分ち難る程となり白き頰は薄紅ゐより土耳其の緋色とまで深上たるが恰も此時力査は戸外より戻り来れり力「や、令廣君此は大失禮を仕つた、留守の中兩人の者とは御知己に成れたと存ずれば別段に御紹介は致さぬが此は我等の嬢又那おるは慧莫那烏遜と夫妻の契約を致しさ姪で御坐る。君子丹は傍邊より「お父様其事は那方丹は御承知で御座り升又貝倫博士より令廣君に御委托して火急ぶ御書牘を、と差出すを力査は封押切て讀み下せしが忽ち面色蒼ざめて眼中は血走りたり此を見るより其座に在る男女三個は驚きて「父様、伯父様、何事ぞ「如何なる仔細で御座る歟と急しく問は力査は大息吐て「無念やな我が隱謀の露顯して多勢の警官等の今向ふと云ふ夫につき寸時も早く身を隱すか落よと有れや今更ら逃るとて何方へか逃らるべき落るとて何國へか落果つべき最早や進退谷つたり其方共も覺悟せよ君「其覺悟は致し升るも坐して敵を待と云ふも愚の至て遁れぬ迄もお立退おさ

れては力「や、愚か〳〵此程の大事ぶ者を取閑むに彼等にも途筋万端手配せぬ事の有るべきや予は既に思ひ切たり、令廣殿跡ゝの事を御依頼申すと云ふ端に早や戸外の方躁しくて捕吏の人數打向ふたりとお見えにける

第九回　曼府の警官

戸外の方の躁しきに令廣は此と座を起て窓より外面を見出たるが忽ちに聲を放ちて「やア寄たるは〳〵真先丹進みしは警部長の弗爾田其次おるは警部の布兒禮。巴夫堅等其外巡査特務巡査の者共とも稲麻の如く閲みたり此にては早や遁る、路なし力査殿御覺悟あれ力「オオ左も有るべし此期丹至り愁ゐに汚おびれては死後迄の恥辱おり拙者も大夫力査勞苦利の名譽を重んじ決して卑怯なる擧動は致さぬと云ふ所へ轉ぶか如く入来るは此家の主人昵哥兒西なり只見る面上に色も無く体は震へく舌の根も賃微らぞ「旦那モウ往ません餘りに事が不意に起ツて御知せ申す間も有ませんモウ家の前後を取巻ましさ逃ても往ません御嬢様方早く下座敷に御出に成りませ。斯る中にも君子丹は遽てたる氣色も無く「宜しい御主人御心配下さるナ、御父様モウ叶はぬと申すから御大事を御書類ら又は跡ゝに仰しやり置る、事が有るおら力「嬢能く氣が附た言置く事は別に無が只此の書類を、必ずよ人手に渡すナ君「心得ました、と君子丹は父が皮

籠より取出だす書類を受取り手早く隠袋に投むる時段階を上る靴の音高く聞えて室の戸を打叩き「此所明られよ〳〵、と呼ぶるは警察官なり力査て座敷の正面に身構し大音聲に「應と答て主人はソレと知すれば眤哥兒西は恐る〳〵其閉たる戸の戸鎖を開きぬ警官は室の戸の開たるを見て我一と進み入りしが力査の形相を見て容易くは入らぬ戸口の外に扣へたり其時警部長弗爾田は立騒ぐ巡査を制し自ら室内に歩を進めて先づ力査に禮を施し夫より三足程進み寄て「大夫力査、拙者は今日甚だ不愉快なる義を貴下に申傳んが爲に只今推參致して候即ち拙者は當曼府警部長の職掌を以て我が國皇戎日陛下の命を受け貴下を叛逆人の一人として取籠め參らすべき事の爲に罷り向て候、と云へば力査は恐れたる色も無く「ナニ拙者を叛逆人とや耳奇しき仰かな抑も拙者の謀叛人たる證據は如何に、と問返せば弗爾田は打鎮めて「されば候貴下は我王國の法律を破り、我が現在の政府を傾々加之ならぬ畏し我が皇戎日陛下を御位より廢し奉つり我が英皇たる名譽幷に帝室に屬せる尊嚴をも傷つけ參らせ更に當國の皇統を竊まんとて名を其祖業を恢復するに藉る僭亂者に慧莫士第三世の名を與へて當王國の政府の上に居る朝廷と私しせんとの大逆と企つる嫌疑ある故に候」力「嫌疑と云ふは其計りか弗「否猶其上に我國皇に對して忠義を盡さんとする臣民を誘惑して僭亂者に黨せしめ當

日戎第二世陛下に對ひ奉つりて恐多くも叛逆の旗を飜へす賊兵を募る事丹盡力あるとの嫌疑なりと高らに呼ばれば力査は冷笑て「何事のと存じたるに近頃其意を得ぬ嫌疑沙汰や拙者身に取り然る覺えは露候らはぬ弗「拙者に於ても此嫌疑と貴下にて服らるまじと存ずるなり但し貴下も英國の臣民として國皇の命をば必ず背かるまじいなれむ今日は命令の面に依て取籠め參らす御身に過失の無き旨をば明朝審問れ節申解れよ先づ夫迄は假ふ伯利の建物に御留め申す。君子丹は之を聞て覺えず進み出で「扨は父をば囚獄に繫がるゝとや弗「否心配し玉ふな拘留と申すも提のみ決して非道れ御取扱ひは致し申さぬ然も其も僅少なる間で御座らう　力「御心入の段は拙者辱けなく謝し申す然れば御同道を弗「心得たり、とて弗爾田は巡査に下知し力査を拘引て立出る此時までも堪へ忍びて落る涙を呑込み〳〵泣顔見せじと歯を切むる君子丹も莫尼加も外より閉る室の戸と共にバツタリ泣倒れて前後不覺丹泣沈む令嬢は先より此場の樣子問答の始終をも息をも得えず聞居たりしが此時突と起上りて戸外を睨み「令孃方左計りに歎き玉ふな力査殿は後とも言はず只今我等がお救ひ申をさらばと計り言棄く禍を蹴開き段階を馳け下たる其後の物語は如何にぞや次回に於て詳悉くすべし

第十回　力査の救護

日根、貝倫兩博士が蹤て計りしに違はず今迄は親王の御爲め一向人氣の引立ざりし當府の市民も今四五日が程に御馬を入るしべと聞て俄に激昂し尚くも邪古悶の黨與に名籍を掲ぐる者は皆那方此方に寄聚りて、御旗の向ふ火をや放たん切てや出んなど内々に談合すされむ此の昵哥兒西の家は當時は猶ほ市街盡處(現今とは違ひ)ふて市場會所の前面なるが此會所にも今曉より人民群集して頻に喧々と動搖めき騒ぐは決して相場の爲に非らず何事か穏かならぬ相談とは知れたり斯る處に警部長弗爾田を初め數多の巡査等は意氣揚々と囚人の力査を馬車に打乘せ弗爾田自ら合乘とおりて市場の前まで打せたるふ今親王黨の紳士當府の警官に生捕れて此所を通るとの沙汰を聞きさらでも騒立たる群集の者共は、誰が捉はれしぞ生捕れしぞ誰も其人の名は知らぬ歟抔叫び合て市場の表に馳來り其人を見んとしたるが其中の兩三人「那は勞苦利(地名)の大夫力査よ我黨の巨魁よ那を捕へさせては叶はじと呼はる所へ忽ち見る前面の方より旋風の如く慕地に馳來りさる一人の若者力査と乘せたる馬車の軛を確と捉へて「車待て。傍らに打たる警部巡査は驚き呆れて先づ其捉へたる手を除んとする時彼若者は再び舞を勵まして群集に向ひ「大夫力査を救へ早く車より扶け下せよ、と呼びたり此場に居たる者共は斯と見て「ヤ、那の少年は令廣ありソレ令廣と力を戮せよ少年ぐるみ生捕らすな

と罵りて黒山の崩るゝ如く襲ひ掛り支ふる警部巡査等を突退け押退け馬の轡面を捉り車の輪を取留て動かせぬ先刻より事の爲体ぶ怒を發しさる弗爾田は此時馬車の戸を押開て真先に立たる令廣を睨へ「少年扣へよ此方警官たる職掌を以て此叛逆の嫌疑者を拘立るは汝何故に妨ぐるぞ殊に此方、其方の姓名住所をも知り居る上は強て邪魔立せば後日に測るべからざる禍あらん疾く退かずや、と呼はれば令廣は呵々と冷笑て「警官左のみ威張り玉ふふ早や既ふ斯く取籠たる上からは何程に中されたりとも此所は通さぬ此上は手對せぬ素直に大夫力査を引渡さる、が双方の爲と云ふものなり但し押てと有らば此方とても用捨はせず、と決心と面に現はしたる不敵の辭に左しもの弗爾田もソレはとばかり暫くは黙したりさる程に近傍の騒動は益々激しく舊教の與黨等は彼方此方より集り來りて「嫌疑者を救へ、囚人を助けよ、警官を撲殺せ、と叫ぶ中ふ又傍邊より「巴諾伯家拭倒せ、國王弑日を逐拂へ、と罵り合て事の体實に容易あらぬ若し此場に て兎角を爭ふ〻其身が眼前の危難は云ふも及ばず現に彼の北方の大軍城下へ押來るを待たで直樣にも叛旗を翻へすべき擬勢あれば最初は力限りと制壓を試みたる警部巡査も是ふ至て手を束ね其長たる弗爾田すらも車中に躊躇りて唯彼等の爲を樣を見て居たり令廣は十分の勝利なるを見て喜び勇み怒ぎ車中より力査と扶け出せむ力査は泰

然として車を出で帽を脱て群集したる人ゐ向ひ辭徐かに「予ハ茲ニ謹んで我が親愛悃切なる大衆の朋友諸君に謝す當府警官の不法なる濫ニ國王の命を以て無辜の予を捉へ將ニ伯利の獄ニ繫んとせり予之を爭へども得る能ハず遂ニ不測の危難と汚辱とニ遇んとしたるニ我が親愛悃切なる諸君の援助に據りて予が榮譽を全くし且つ身命の危害を免るゝを得たり深く茲ニ其の高誼の辱けなきを謝し且つ上帝が冥冥の裏ニ無辜の良民を救護するの恩を感ず、神よ國王を護れ、と演述せり群集ハ之を聞き大拍手大喝采ゐ四邊も震動する計りなりしが頓て又大笑して「國王とハ何の國王歟、と叫びたり力査ハ再び舞を揚て「其ハ予がやす迄も無し宜しく諸君が胸中に問て見たまへ然して其諸君が尊愛する國王陛下へ對し奉つるの忠節ハ益ゝ勵みて勤め玉へ但し其の忠節を致すの時機ハ今數日の中ニ在らん其迄ハ能く力を養ひて自ら我身を愛し玉へ、と演終りて令廣ふ對ひ謝意の握手を施しつゝ互ニ手を把り大衆の喝采の聲ゐ包れながら群集の中ニ突と入れば巡査ハ見るに堪難けん再び兩人を捉へんとて走出すを見て群民ハドッと笑ひ「入るナ、危おい、命知らぬ奴、撲殺さるゝを知らぬ歟抔嘲りつゝ漸次々々ニ市場の向へと退き去る此前ニ力査令廣の兩人ハ逸早く群集の中を脱出でゝ亞兒伯の川筋を走りつゝ、撥保德の橋詰へと來りしが此時力査ハ立留りて「既ニ此所まで落延たれば追手の奴

原も來るまじ扨令廣殿足下ゞ今日の救助の恩ハ我等生涯忘るべうらゞ夫につき心ニ懸るハ壞君子丹の上なるが彼も亦尋常の女子ならねば擯ゐ臨まば適應の處置を爲して身を安全ニ保つおらん就てハ足下ハ此より何所へか落ち玉ふ我等ハ弗列西敦の御陣まで馳附んと思へども徒歩にてハ六かしし何方ニか馬を得る工夫もがなと語る所へ川向より砂烟を上て駿馬に鞭うち走せ來る一人の壯士あり「那ハ敵か、と近寄る儘ニ熟く視れば那烏遜なり其時那烏遜ハ馬より閃りと飛下りて一禮し「兩君御無事でひしう我等今方彼沙汰を聞き責て令廣氏ニ一臂の力を添ゆさんとて來りしが其ニも及ばゞして誠に目出度し但し此府ニ力査の在さんハ然るべうらゞ早く此馬にて何方へも落ち玉へ力「御親切の程ハ辭に餘れり唯今も駿馬をとゆせしニ此賜物ハ今の身ニて何寄ゐり委細ハ令廣君へ言置されば其より聞玉へと言も敢ず彼の馬ニ乘るよと見えしが忽ち北の空を指して電光の如くニ走せ去りたり　那「扨ハ力査ハ弗列西敦へ行るゝナ扨令廣君御身ハ、と問ば令「我等も暫しハ當莫悉德兒(當莫ハ當麻士の略稱なり)の家に潛むべし就て御身ニ願ひ度きハ我ニの無事なる事を君子丹令壞ニ知らせ玉へ併し彼の旅館に往ても店からハ入り玉ふな定めし今頃跡ニの搜索ゞ嚴重ならんゆ注告をれば那烏遜ハ「其處ニハ熟く心得たり然らば此にてお別れゆを但し火急の用事あらば彼の家へ令「然

り我等は何時までも彼處に居るべしされども足下とは親王の御馬前ならでは　那「宜し
面會の其折には互に戰功を競ふべし

○第十一回　秘書の發見

君子丹と莫尼加の兩壞は奮然たる令廣が扇を蹴開きて戸外の方へ馳出るを見て且は喜び且は危み、彼人の勇氣に富る多分大事と仕遂ぐべしとは思ふものゝ敵手は大勢の警官あり若し仕損じて彼人ぐるみ捕まもせば如何はせん但し如何樣ある手段を以て我父と救ふにや立上る時戸外の方に早や閧の聲發りたりアナヤと驚きて兩壞は窓より首さし出し往來の向ひなる市場を見れば今や令廣は警官を押分く力査の車に手を掛たる所なり　君「莫尼加見玉へ令廣君は馬車に端を押へたり。アレ警官と何事をか論判せり　莫「如何も〳〵、ヤ大勢に群集は伯父樣と令廣君を助け舟よ　君「オヤ巡査は、アレ〳〵味方に押倒さるゝ、ヤお父樣は車から出て、アヽ嬉や〳〵、アレ帽子を脱り、アレ演說をお初め成された……何だか聞たい、速くて聞えぬ　莫「アレ皆なが笑ひ升よ又伯父樣が何か仰しやる　君「ソリヤ令廣君と手を握つて、アヽ嬉しやアレでは伯父樣は御無事でせう　君「何卒令廣君も御無難に……アヽ上帝何卒お二人の無事を護り玉へ、冥助の力を添へ玉へ、と手を合せ兩人は一心に祈る所へ　那「

兩壞此に在を歟、と低聲に案内して入來るは那烏遜なり　君「ヤ那烏遜君令の騒ぎと御存じですか　那「如何にも騒動を聞て駆附ました、が、其途中で父御と令廣君とお逢ひやた　君「扨は彌々危難をお遁れに成りましたら嬉しや〳〵　莫「シテ伯父樣は何方の方へ　那「我等の馬にて弗列西敦なる親王の御陣へ參られた　君「シテ又令廣氏は　那「多分當莫悉德兒の家で御座らう兎に角御兩人とも御無事なれば御喜びあれ。此吉報を聞得たる兩壞は茲に初て安心の胸を下せしが夫に附ても今一つ君子丹の心に懸るは阿熱耳敦令廣の身上なり　君「實に今日の令廣君の御親切は死でも忘れは致しませぬが一体那方の御身分は何樣な方で御坐りますか　那「されば御坐つにも算へる位で當人からして其生れたる家も知らず親も知らぬ又其姓名の阿熱耳敦令廣と云ふも正眞の名で有るか否やをも知らぬ程なり唯其名も人も知らぬ後見人より月々の金を送られ夫にて生活を爲すと云ふ一種不思議の物語が彼男の身上あり、と告る辭を君子丹は目瞬もせず聞居たりしが　君「成る程伺へば伺ふ程不思議なお身上で御座り升併し那方の御容子の氣高い所又お背の高い立派な所才氣の有り勇氣の有る所抔を見升ると何やら高貴の落胤とも思はれて一入與床しう御座り升。莫尼加は之を聞て心に面白からぬとや思ひけん傍邊より「御身は左樣の玉へども那人は今銀行の手代で

は御坐り升ぬか、銀行は手代ゴ高貴の落胤も何とやら、と打笑へば　君「否其ハ違う當地でハ巨万の豪富と呼る、家でも壮年の子を持てば皆商家へ遣り實地の商業を見習ハす る然れば銀行の手代ゴりとて賤惡むハ當らぬ事なり又今の貴人の落胤とハ嘗て貞倫先生も左様ヤされた。莫尼加ハ猶信服ぬ面色して「否々其ハ先生の贔負目なり殊に寄ると那家の娘の別非と配偶をる積で左様吉れた歟も知れ升ぬ。　之を聞たる君丹子ハ些ゼ急込て　君「那烏遜君伺ひ升ゲ其別非嬢ハ何な嬢で御座り升か、と云ふ頻ゴも紅色を潮したり那「別非嬢で御座り升かソレハ〳〵餘程の美人で當曼府中の娘の花とも賞らるゝ程の好い標致で御座り升　君「令廣君ハ那通りの立派な方又其娘御が其通りの美い御標致なら無好い一對の御夫婦が出来ませう……シテ此方(令廣)にハ其ナお氣が有るのですか。那烏遜ハ首を掉て「否々令廣ハ御覧の通りの潜泊した氣象ゆゑ他の家の娘抔ゴ目を掛る様な事ハ爲ませぬ其處の御心配ハ大丈夫と、何氣なく言ふ詞ゑ思有る身にハギツクリと胸ゴ應へて君子丹ハ思ハゼ面を赧めたるが臉の紅色を帯たる様ハ更ゴ一層の美を添さるが如し此ゴて暫く說話も途切れ流石の才女も頗見らるゝ如き心地するに其場に居るも羞かしゝれば那烏遜と莫尼加が物語する隙を窺ひ悄と座を外し我室ゴ戻り来りて机に倚り熟々と考ふるに眼に上るものハ令廣の面影胸ゴ浮ぶものハ令廣の身上、

世間の男子多しと雖も此の如く容貌態度の打揃ひたる一點の瑕なき人ハ有らゼ世間の男子多しと雖も此の如く才ゼ富み義ゴ勇ゼて精神の確乎たる人ハ有らゼ抑も造物主ハ何故に斯る人を世ゴ出して我身を思ゴ苦まするや我身ハ又何故に彼の人と同じ時ゴ生れて甚なき思ゴ心を惱むるや情なしとハ中々恨めしの浮世や抔壁ゴ向ひて吐く息の外に詮術も無りしが漸くゴして心附き「アヽ、勿体なし父上ハ一時乃虎口を遁れ玉ひしとハ云もの、御途中の安危も如何あらん然る危急の場合であるを餘所にして此等の事ゴ思ひ屈するとハ頼ましや、オヽそれ〳〵何ハ扨置き先刻預り參らせたる大事の書類、那を散さぬ様狀く何處ゴゐ隱し置ん、と忙ハしく下着の隱袋より取出し帯紙の弛みたるを机の上ゴて取調へんとする際ゴ手を漏てハラリと落たる一通の手紙あり其落る時封筒の口綻びて中なる書面の牀上ゴ半ば出たるをアハヤと取んとして風と見れば令廣と云ふ文字皆と見えたり君子丹ハ胸先づ騷ぎて再び見ればこハ如何ふ曼府私立銀行の題取馬利乙氏より父に宛たる書狀ゴて其文面ゴハ「此程書面を以て仰越されたる一義正ゴ令廣へヤ通じたり又た同人へ相渡す月々の金子も確に本行より同人へ届けたり其節別封の御書狀も同じく當人へ手渡し致しヤハ」云々と認めたれば君子丹ハ與驚して、扨ハ令那烏遜殿の仰しやツた那方の人知れぬ後見人とハ現在我父にて在せしう扨も

〈思ひ掛なや今迄大方の事と云ふゝ何事まれ父の妾と咄し玉ゝぬも無りしと此の事と限つてゝ……能々深い理由ある事ゝ……父上ゝ先年（千七百十五年）の戰爭以來無二の親王方で在すれば若や彼方ゝ那折り討死を爲されたる御味方の然るべき人の遺孤、其を父上が引取て世話せらるゝ歟……併し其でゝ妾に憚りて咄し玉ゝぬ事有るまじきに……其とも父上の隱子として妾とゝ異腹の兄妹か若し左も有らむ婚姻も……否々平生より品行正しき父上とゝ然る事の有るべき樣なし、今少し此手紙を明て見ば彼お方の御身上も……否々此丈を見るすらも不幸なるとゝ猶手を下して秘書を窺ふ然る罪深き無禮の事の成るべきや……アヽ然りとてゝ、妾兎つ逐つ今迄の情想の上に又一層の心配を增せし才女も此境とゝ臨みてゝ通常の處女とゝ異ならず煩惱の風とゝよれつ綻るゝ情の緒の糸柳繰返しても分く由も無く思ひ亂れて起つ居つ果ゝ迫りてワツと計りに泣んとしたる其所へ「君子丹孃〈、と音づれて那烏遜と莫尼加ゝ入り來れり

◉第十二回　聖安の辻

那烏遜、莫尼加の二人ゝ室の内とゝ入來りて其樣子を見るに君子丹ゝ眼に涙を浮めたり思の種を其ぞとも知らぬ心ふゝ扨ゝ父親の事を心配して思ひ屈したる物ふや有らん幸む天氣ゝ好し其處を散歩して憂さを慰め遣らばやとて二人して強て勸め君子丹を伴ひ

て遊歩とく出立ちぬ斯て市場の前を過ぎ川端を歩みながら聖安の辻とゝ到るむ前面より法師二人に孃一人此方とゝ向ひて進み來れり莫尼加ゝ此を見て「令孃何方へ、とて挨拶すれば彼方の孃も亦打笑つゝ傍邊へ寄りく手を握る其孃の標致物腰尋常とゝ立越て美くしければ君子丹ゝ扨ゝ例の咄の人かと心に疾く覺りたれども然る色もせず控へ居たるとゝ莫尼加て此方へ來りて「君子丹孃那の方とお知人にあり玉てぞや　君「誠に人品好た方おるが誰方ぞ。莫尼加て笑ながら「當て見玉へ　君「貝倫令孃てゝ御座りませぬ歟。那烏遜て笑つゝ首領て「如何とも其通り〈、先刻我等がやせし如くナンと好標致でて御座らぬ歟　君「其御方なら是非とゝ彼方御紹介を、と云ふとゝ莫尼加て心得て此より別非、君子丹の兩孃を引合せたり此にて別非て知已とおりし喜びを述べ夫より今朝力査の危難其も令廣の働きふて無事とゝ其場を免れたる事又其前我が父れ貝倫より令廣を以て危急の報知を豫告せしが其が間に合で殘念に思ふ事又旅行中唯獨身となり玉ひて心細くも亦不自由ふも在をおらん苦しらぎて妾が宿に來り玉へ妾が父も御父樣とて御知合の中なれば貴孃のお出をゞ定めて喜び侍るべし抔心隈なく打解て愛々しく物語る辯舌と云ひ容貌と云ひ世とも可愛き處女なりさる程ふ別非と伴立たる二人の法師即ち前回に現れたる龍舌、利固羅の兩人は此方れ詰の果たるを見て同じく傍に進み來り一同

に挨拶を此ゐて一行六人連とゐりたれば談話は潑みて面白く其處とも定めぞ那方此方と逍遙する時忽ち耳元に轟々との早鐘の音いとも烈く聞ゆさり一同ゐスハ火事かと驚きて四方を見るに其かと覺し紀烟も見えぬが唯人は足を空ゐして阿兒伯の川の方へと走行くめり「扨は出火は川岸の方のと一同ゐ其方を見る時龍舌は眉打顰めて「返す〳〵も不幸ゐり此街かゐ今や數日の中ゐ鮮血を流すの災禍を見んとする為其ゐも足らで又斯る出火あるとゐ現ゐ彼邊は水造の古風ゐる家のみ多々れば一旦火出ば其燒留る所を知るべからぞ噫是も此町ゐ住む者の心術正しらぞ種々ゐ罪惡を造るゐ因て天より此炎殃を降すもの歟而して其惡を作せし者ゐ蓋し親王黨一味の者ゐるやも測られぞ、と賢氣に獨語て歎息す此の辭を聞く中より那烏邀ゐ不快なる顔色にて龍舌の面を睨みたるが「オイ龍舌子餘眛言も些と氣を注て言ひ玉へナンの面白くも無き人の心術ゲ正からぬノ天が禍ひと降すノ放火者は親王黨だノと君の如き迂濶人でも世間ゐて差合の有ると云ふとを些と知り王へと達り附れど龍舌て一向無感の顔色ゐて猶何事か口の裏ゐてブツ〳〵言ふ折り早鐘は益々激しく「早く往け〳〵「遲いと間ゐ合ぬゾ、と云つゝ走り行く往來の者を那烏邀て急てしく呼留て「火事て何地ですナ往來の人「火事では御座ゐぬ味方を集める早鐘です　那「ナニ味方とは　龍「然らば謀叛か　往「左樣サ謀叛と云ば

謀叛だが親王樣の軍隊がモウ間近く攻寄るので防禦の爲ゐ今警官等ゲ撤保德の橋ゐ火藥を裝置て燒落すと云ふ其を聞て此地の者が其では味方の軍勢（親王の軍）の押寄た時此府を乘取るゐ都合が苛く惡いとて皆其を支へ樣とて集るのサ　龍「シテ見れば官吏の職務執行を遮んとする亂民の所業ゲやナ　往「ナニ此坊主が何とでも言へ橋の石一個でも持去るものゥ　龍「扨ゐ其方も亂民の餘黨ゲやナ能く考へ見よ警官は身分は卑くとも國王の命令を行ふ者ゲや其に背くは手も無く王命ゐ背き奉つるゼ同罪ゲや謀叛は神の怒に觸て其咎忽ち身ゐ報ふと知ぬのか罪人めが。那烏邀は之を聞て、モウ堪忍ゲ、と言ふ如き決心を面に現てし鐵拳を握り固めて後の方よりアハヤ龍舌の腦骨上ゐ一擊を試みんとする体を見て莫尼加は驚き漸くに抱き止しが那烏邀は其怒り中々納まらぞ那「斯ナ坊主には勝手ゐ說教をさせく置けサア皆采玉へ其橋の所へ行て味方の勇氣ある体を見物しませう　龍「緣無き衆生はアヽ度し難い哉

◎第十三回　撤保德橋

斯て早鐘の音ゐ止しが四方より集り來る市民の數ゐ彌增て橋の前後ゐ恰も人もて黑山を築たる如し警官も斯るべしとゐ遂て推し々ん同じく橋の南北の詰にゐ警部巡査多人數を以て取固め一人も橋の近傍へ寄せ附ぬ抑も此の撤保德橋ゐ此府の中央を流るゝ阿

兒伯の川に架りたる石橋にて其造方は昔風の幅狹く大形の馬車は相並ては馳をべからゞ又其形は勾配高く三四個の大なる眼鏡形を水上より穿ちて船の往來の便としたるが當時よりてこそ有れ今より見れば甚だ不便利の建築なり然れども此川は當府より於て北方より來る敵軍を支ふる爲の第一の要害にして又此橋は此要害より咽喉に當りたれば此日に在ては最も要衝の場所と稱せらるされむ前回にも記せし如く當府の警官等は親王の大軍既に兩三日が程に押寄ると聞にされば今は此府を取固て十分の防戰を試むるより外は有るべからゞ而して其用意の第一は此橋を燒落して敵軍の進路を斷つに在りとて扨こそ今朝より橋臺なる石壁の第二と第三の間なる眼鏡形の下に火藥を沈め水雷火を以て此橋を破壞せんと企たり市民の中にも親王黨又は此黨に心を寄る者共は斯ては味方の不利謂ふべからゞ威力を以ても此企てを差止むべしとて早鐘の音を聞や否言合さねども數百人此橋の前後に押寄來りて斯る騷動とは成りたるなり。群集の人民は吶喊云ふ關の聲の間より「警部巡査の罰當り奴此橋に手でも附ると撲殺すぞ」「崩せナ〳〵此橋を崩しても親王樣が御出に成れば十分時間に又架けるぞ」「此橋を崩した奴等は親王樣へ降參する時已遲ら一々中上て皆お首は刻させるゾ」「命は入らぬ歟」「首を斬れるゲ御く無い歟」と、下等人民の癖として有る限りの惡口を吐き散し樣々の恐嚇を施せども

長官の命令嚴重なる警官は寂として之に應ぜず肅として傍目も觸らず各々其持場を守りたれは此に恐れてや我進みて手を下さんと爲る者あし其中に布を以て面を包みたる二人の男先刻より群集を煽動して惡口を吐せたるが警官が取合ずして、何でも爲るから爲て見よと云ふ如き有樣にて川中に小舟を泛べ技手兩人して頻に水雷に點火すべき裝置を取急ぎ居る体を見て是では敵は逃ぬと思ひたるか甲の一人は乙の一人に何事をか耳語たる儘足を廻らして何地へか走去たり（甲の一人と見ロたるは惡德兒にて乙の一人は裁判所の呼込を勤むる愛薩古苦列具と云ふ者あり此苦列具も熱心の親王方にて既に先刻一揆の人數を集むる爲め惡德兒の發意に同じて聖安寺は學林の鐘を撞たるも此男あり）殘る一人は猶も那方此方を走り廻りて衆人を教唆し煽動し只管警官を激動させて水雷の點火を一刻も延させんと巧みたる謀略は稍其圖に當りて警部長弗爾田は憤然たる面色を以て橋の上に突起上り川の兩岸に響き渡る程乃大音聲して「鎮まれ人民汝等先刻より此方の職務執行を妨げんとて樣々の手段を運らし罵詈雑言と遲しくも能く考へ見よ汝等何程に騒ぎ立とも彼の技手が裝置と終り予が一聲點火の號令を下すが最期此石橋は碎粉となりて半空に噴散されんは眼前なり然るを今斯る無益なる且不恭順なる擧動をして後日の咎を受んとは餘り勘辨お紀處爲ならずや其よりも汝等が生

来の面目なる朝廷に忠誠厚き英國民の本分ヨ歸り早く家に戻りて職業に從事せよ蓋し汝等が此擧動ハ汝等が本心に非ゞ或る無頼の煽動者ありて其教唆ヨ乘たるならん然る曲者ハ此方追々捕縛の手順を附たれば遁ちて連累の名を取るナ早く解散して家ヨ歸れ、と說諭の辭を盡したれども群民ハ中々承服の色を見せゞ「煽動者ハ無し、教唆者ハ無し、銘々が本心より出たる抵抗なり、何程に云とも此破壞ハ妨ぐるゾ、と呼び立ゝ弗爾田の說諭を打消さんとするを彼方ハ屈せず　弗「汝等妨ぐるゞハ如何為して妨ぐるや最早既に二函の火藥を橋の臺石ヲ沈めたれば汝等其を打破る器械ハ持つまゞきに、と冷笑ふ時何處よりか来りけん一艘の小舟上流の枯葦の陰より突と現れたるが船端ヨ立たる覆面せし兩人の者ハ眺限の曳聲揚て櫂を操り慕地ヨ駛せ下る當下退潮の流ハ迅し船の足ハ箭よりも疾く既ゞ橋下へ近づき来れば兩岸の警官ハ手伏揚て「其船留めよ、危なし危なし、留よ〳〵、と叫び合ひ又一挨の者共ハ敵か味方か何者ぞ、と息を詰て万目一齊其方を注目たり斯る所に群集の裏ヨ立交りたる一群の婦女是れ即ち別人なりゝ君子丹、別非、莫尼加の一組なるが同じく彼の覆面の船頭に目を注ぐ中ヨ君子丹ハ那烏遯の袖を悄と牽て耳に口寄せ「見玉へ那の一人ハ令廣君なり　那「何様令廣、ヤ、今一人ハ悉德兒、何程襤褸切て藏しても那の高い鼻計りハ隠されぬ……シテ何する歟、と一心

ヨ目守り詰る彼方ヨハ船ハ流の波を切て早や彼の技手の乘る小舟の二三間此方へ乘附るヨ乞導火の準備せし技手ハ驚きて急ク櫂を操り打當られじと此方の橋間へ避けんとする隙も有らせゞ先の船ハ電光の激するが如くサツと来りて我が舳先を敵船の横腹へ衝當れば爭で溜るべき此方の船ハ忽ち横さまヨ覆へりて技手兩人ハ水ヲ陷り急瀨の波に巻込れて見る〳〵一二町流れ行くを彼船ハ見顧もせず流と押排け何方とも無く駛せ去たり群集の一挨ハ之を見て「爲たりゝ船頭爲たり〳〵、と噪来する聲山を崩すが如くみて此が爲めヨ狼藉の手を下をべき端緒の開けたる一挨共ハ「スハヤ撲てと犇めき立て早警官の備の中ヲ打掛らんをる有様あれむ不意の襲擊にて氣を失なひたる警部巡査ハ長官の命令も何の其の辛らく群集ヨ紛れ入りて亂擊の危難を遁れたり

第十四回　當廣悉德兒

撥保德の橋下ヨ於て技手の船を覆へし其儘急瀨の波を排さて漕去りし怪しの小船ハ猶櫂の力を極めて川下遥ヨ遁れ去つゝ今ハ彼の場所を距ること殆ど一里ヨも餘りしのゞ乘たる二人の曲者ハ船を川隈の葦の茂みに繫ぎ留め被りし覆面の襤褸切を掻なぐり棄つゝ互に顔を見合せて莞爾笑しが其人ハ彼の君子丹壤と那烏遯が目利に違ハゞ一人ハ阿熱耳敎令廣、又今一人ハ當廣悉德兒なり原来此の悉德兒の容貌ハ頗る異体ヨて尖りし

鼻は鳥の嘴の如くに高くして下顎は突張し顔は睹爽に用ふる寒子の如くに方なり然れども其雄小き軀と三角なる眼の中に自然の愛嬌ありて人の親愛を受ると大方あらぬ殊に其の身材の雄壮に似ぬ膂力大にして舉動また活潑なり又一點の義氣滿腔裏の血を熱にをと云ふが如く凡不義不正弱を虐げ小を壓をるの所爲を見る時は憤懣の念堪さるが如くして難を救ひ急に趨くと飢たるが如しされば或は途を行くに酗漢に遇て夫が輕侮を受ると有るも笑て應へぬ唯彼の千七百十五年（彼が父の死刑に處せらるし初度の爭位の亂を云ふ）の文字を聞く時は怒髮帽を衝き熱涙眦に溢れて齒を切と腕を扼ると狂をるに似たり故に知ざる人は或は此男の才幹を賞て軍人ふおれ、と勸むるも本人は、予は名譽を好まぬ、との簡短なる言語を以て謝絶をるが其意中には、今こも有れ親王の此國旗御旗を向らるゝ事あらんこは一番に馳參じて敵軍を打破り僥倖こして其の機會あらば國王戎日を一太刀恨み參らせて父が泉下の妄執を晴させん、と思ふより他事なしさる程こ此回も日根、貝倫、屯士禮等の一味に返早く加はりて北方の大軍一日も疾く來よかしと願ひたるが其軍勢の進路に當る撒保德の橋を今日燒落すと聞て怒りに堪ぬ豫て我が無二れ方人と頼みたる愛薩古苦列具（裁判所の呼込人にて前回こ出たり）を語らひ聖安寺の洪鐘を撞鳴し更に又家に歸りて令廣を伴ひ小舟こ乘て前の舉動

曼府の叛亂　押繪第五

に及びしおり、悉德兒は身中の汗を拭ひながら「令麒君實に甘く往ました此も全く親王へ御奉公の一つにてモウ那が十分時遲くて見玉へ那橋は粉々にあツて味方の軍勢の當府を取るに何程の障碍に成たか知れぬ　令「何如にも那は全く足下の思ひ立て事十分に甘く參つて我等も重疊此上なし　悉「イヤ向不見に違は違るが全体の趣向あら其場の進退は皆君の方寸から湧出したので我等の功績は毫も無し思ふに君が軍師ゐ成て僕ゲ仕手方で働いたら凡如何ある危險至極の事業とも言へ爲て出來ぬと云ふ事は無いと思ふ實ゐ君の今日膽力の沈着た舉動には僕も敬服の外は無い　令「酷く譽る子……先づ夫は其として此處はモウ靜穩らしい、上陸してい　悉「否中々未だ危險い彼奴等の方でも十分手を配して居るに相違おしモ少し漕で例の波戸場から上ると爲やう……時に君先刻橋の右手に大分婦人連が居さ樣だが見玉ふたか　令「見たとも〳〵ソレ先刻家で話した彼の令孃子那孃もあの中に交つて居た那云ふ見物が大勢あれば未だ〳〵今日の二倍三倍の事業も出來る　悉「アハ、、、左樣じやらう〳〵。斯て兩人は再び舟の繫纜を解き櫂を手にして此川筋を下ると二里餘り頓て一所の波戸場に着しが此府も其後年々に家居の增く目今ころ繁昌の都會あれ尚當時は全府の人家昨今の百分が一にも充ぎ殊ゐ此波戸場邊は如法の田舍にて打續きたる畑の那方に二三の人家散落と見ゆるのみ又此方の

川縁には粗造なる穀物藏七八棟立列て川中には當時の川運に用ひたる底淺き荷舟の五六艘棄も散乱たる枝垂柳の根本の方に艫を並べ管もて編たる笘を葺て古杭に繫ひ居れるが其中には人ありとも見えぜ悉德兒は首を四方に廻らして追手らしき者の居るや居らぬやを見定むると四五分時竟に安全の地と見極めけん傍邊の棧橋に舟を寄せて令虞君先づ好さゝうなり卒上り玉へと櫂を棄く麻繩を以く假繫を附んとする時には如何に今迄空舟と見えたる荷舟の笘と下より刻上げ〳〵現れ出たる三人の警官小銃の巢口を此方に差附け「謀叛人共神妙ゐせよ唯今撒保德の橋に於て狼藉を働きたる兩人の者此邊より上陸するやも測られぜ其と見ば搦め捕れとの警察本署より命令に依り我々三人先刻より此所に埋伏せり最早遁れぬ天の網若し強て遁き出んとせば容捨なく火蓋を切るぞ命惜くば神妙にせよ。左しもの令虞、悉德兒も鐵砲と云ふ剛者の爲に挫しがれて之と抗敵ふべ術を得ぜ汚目汚目と舟底に蹲踞れば警官等は左もこそと一人は猶銃器を構へ二人は繩を取て此方の舟に乘移り睥むべし彼の兩個の英雄と高手小手に縛り上たり

㊀第十六回　囚獄

令虞、悉德兒は縛繩に就たるを見く又一人舟は中より現き出たるは豫て見知越の波戸

場役人馬通舍祿なり悉德兒は之を見て「一体貴公等は已達を何する積りか　舍「何するとて其方共は罪狀は唯今中聞せた通り依て捕縛した旨を警察本署に上申して警部長の命令あるまで此所に置くのじや但し其とも其方共にて然る惡事は犯した覺は無いと云のか　悉「イヤ言はぬ、此方から云へば忠義じやが其方のら云へば惡事じやらう如何にも我々は撒保德は橋を燒落す事を妨げた其大功に依て敵に捕はれ殺されば本望じや死だ跡で我々の功績が御耳に入り天晴れうい奴じやとの親王樣の御詞が掛れば十分じや我々は決して命は惜まぬ又刑に就くを恐れはせぬ　舍「秘刑者の小唄も好加減に唄つて置け、サア其方共は那の藏の二階に入牢をるのじや能く神妙にしろ　悉「フン入牢……足休に成ソレも宜らう、併し已達の顏も知らぬ朋友(一揆)が大勢揃つて迎に來るかも知れぬから其手當をしろ　舍「誰が貴樣如き貧乏人は迎に來る奴が有る者か　悉「ヤ、失敬極まる、其方已を知てるか　舍「フン知ぬでも無い、理髮の悉德兒じやらう　悉「如何にも悉德兒じや即ち千七百十五年の亂に士都華土家の御味方して無二の忠臣と呼れ今の巴諾伯の王家の爲に憎まれて神聖の血と此曼丟多の市に流したる當麻士悉德兒の息子で有るい　舍「シー其親父の首を切れた時は已も見て居た貴樣も那樣な死狀をせぬ樣用心しろフヽン好い態じやは口は叩くるが手足は動けぜ宛で酒瓶の樣な物じやいと嘲り笑ふ斯る處

に一人の小使走り歸りて警察本署よりの命を傳へ二人の叛逆人と假に其地に拘留をべしとの事なりなれば舍祿及び三人の警官は令虞悉德兒の兩人が繩を取詰め引立て川岸端に並びたる穀物藏の二階に引上て取籠めさり此等の藏は素より政府の建物おきば其戸前口には巴諾伯家の徽章ある大旗風に飜へりて見えたるを悉德兒は又此と見て「見よ見よ此の二三日が中に味方の大軍此府を乘取て巴諾伯家の奴原を逐拂ふ時我等は第一に此所より飛で出て此大旗と寸斷々々に引切るべしぞ、と罵りたるが此時は喧嘩相手の舍祿も返辭をせず唯フヽンと鼻の尖で嗤ひしのみ。令虞は此前より唯箝黙りて口を開かぜ悉德兒と二人伴立て藏の二階の狹き房内に閉籠られしが其房の入口を見れば一人の番兵裝彈せる銃を肩にして見張り居れり又房の中には一臺の卓兒と二脚の椅子を据たるが其卓兒の上には誰が持て來たりけん一瓶の葡萄酒に二個の硝盃をさへ添たれば令虞は先づ有難しと一杯喫むゐ先刻より喉の渴たる折なれば其甘きと得も言はれぜ悉德兒も同じく酒の顏を見て令迄憤激に堪ざりし如き顏色も急に莞爾々々と笑ひ出し　悉「囚獄も亦甚ぞ野暮からぜ何せ仕方が無い酒でも相手に二三日骨休を爲て遣らう、と引受け〳〵喫む程ゐ稍半醺の地位に至りて精神自から旺盛し早く其身の囚人たる事を忘れたり　悉「時に酒には先づ有附たが烟草の御馳走が未だ出ない好し〳〵一

つ番衆を語ひく見んとて悉德兒は戸口に往き何の暫く談ぜしが此の番兵如法の好人物なりと見え最後に至りて「左樣云れゝむ仕方が無い併し規則が嚴しいのゝ此は極内にして呉れ玉へ左も無いと私が首じやと手真似して烟草に烟管摺附水をさへ與へたれば悉德兒は辱々おしと禮と云ひて再び元の椅子に戻り令虞に向ひて又もや今日の動作の事又味方の大軍が進軍ぜ模樣の事屯士禮、力査等が身上の事より續紀く君子丹壤の事に及びて令虞も話の頗る笑壺に入る頃俄然として戸外の方に夥多しき鯨波大に起りて門を破り戸を毀ち塀を乘り墻を踰る聲此の閉籠たる二階まで手に取る如くに聞えたれば番兵は先づ驚きて遽たゞしく階段を駈下りたるが忽ち又上り來りて「ヤア兩君喜び玉へ一揆々々、と呼はりたり

第十七回　一揆の勝利

斯る處に又一人遽さゞしく二階に駈上る者を誰かと見れば役人の舍祿なり、見れば顏色は蒼ざめて唇は少しく震へたるが此方に澄して烟草を喫を悉德兒に對ひ　舍「兩君大變な事が始まつた、と云つゝ眼を圓くせり。悉德兒は故と素知らぬ顏にて　悉「ハテ子大變とは僕等を警察本署の檻倉へでも送れと云ふ命令でも御座つたか　舍「イヤ其處でも御座らぬ先刻貴公の御しやつた君等の朋友(一揆)が二三百人押寄て令亂暴を始掛たり

到底君等を此處ゐ置てゝ我共が助からぬ仍て速かゴ放免する早く何所へでも行て下され。悉德兒ゝ先づ徐かに葡萄酒を一盃與み瑣盞を又丁寧に下ゴ置て右の手ゴて顧より例の高き鼻へ懸け唇の傍をグルリと撫て目をパチリと明き　悉「イヤ放免され升まい僕ゝ此所が宜しい、此所に居たい（此時又もや突と云ふ吶の聲して潑々刺々と門塀を破る音手に取る如く聞えたり）舍　祿ゝ益々遽て、舍「イヤ君此場合ゴ戯言を言てゝ好ん、アレア那通り危難ゝ既ゴ迫ツて来た、實に後生だ、何卒此場を立退て下されコレ拜む〳〵。令虞ゝ舍　祿の苦しむ樣を快げゴ見て笑ひを含み　令「併し我々ゝ警察本署の命令で拘引されさ軀だから其放免も同ドく本署の命令を待ねば成り升まい。悉德兒も真面目顔にて　悉「如何にも左樣舍「イヤ其邊の御懸念ゝ平ゴ御無用警察署の方ゝ私ゞ何でもを る唯一刻も早く此場所を出て下さい、と無理ゴ手を取り悉德兒令虞の兩人を藏乃戸口より外に出せば今迄舍　祿の味方と見えし巡査も番兵もいつか一揆の同類とありて兩人を見るが否や帽を掉り手を擧く庭ゴ列たる同勢と共に「大勝利々々々フーラー〳〵（祝聲）其中ゴゝ「朝廷の役人顔する舍　祿ゝ恐怖を爲して鼠の如く逃失せたり其時悉德兒ゝ役場の前なる小高き所ゴ突立て　悉「予等兩人諸君の厚誼ゴ依て再び天日を見るを得たり謹んで茲に其恩を謝し且つ當日の勝

利を祝しやさん、とて大音揚げ「我皇惹莫士第三世陛下萬歲、と呼ばりたれば一揆の群集ゝ異口同音ゴ齊く「惹莫士第三世陛下萬歲、と呼びたり斯る處に此同勢の中に在し小賢し紀者一人進み出て「此地既に我皇の御領地の一つとなれり然らば忌ゝしき僭位者（國王戎日を云ふ）の徽章ある旗を建て置べ紀ゴ非ず、と云も終らぜ彼の大旗を引下して寸斷々々に引裂たり之を見て一揆共ゝ益々勇み立ち「然らば此藏ゴある貨物ゝ皆敵方の物なれば我々分捕をべし、と皆一同ゴ立掛るを見て小蔭ゴ潛みたる舍　祿ゝ驚さて走り出て悉德兒の前に来りて　舍「悉德兒君助々玉へ此藏を亂暴されてゝ實み我等の職掌が立ち難し何卒我等を救ひ玉へ、と泣ぬ計りの顔色して頼み入を悉兒德ゝ冷笑て　悉「否々貴公の其依頼ゝ領承ぬ、我等ゝ今貴公と必死の仇敵と相成りたり貴公ゝ今方我等の親父を惡口せり我等自身の上ならば兎も角も死だる人に傷つけられてゝ勘辨ならず仍て其依頼ゝ承引ぬ……但し貴樣心實恐れ入たと謝るか　舍「謝るとも〳〵拙者心實恐れ入た。悉德兒ゝ笑ひながら「然らば、とて頓く藏より運び出したる貨物の上ゐ飛上れり、群集ゝ之を見て「スハ悉德兒が演說をるぞ、とて靜まりぬ時ゐ悉德兒ゝ威儀を繕ひ聲高やかゐ悉「我親愛する朋友諸君願くゝ暫時高聽を我ゴ貸せ、諸君ゝ既に其味方たる我等兩人を囚獄より助け出したる大功を有せり願くゝ此の功績を終始全くして

聊のも傷つくる事有る勿れ彼の僞朝(巴諾伯家)の保護者たる新教徒ハ常に我等を目して粗野の舉動を爲すと云ふ又我が親王も蘇格蘭北方の御味方が敵地の分捕を擅まゝにするを御覽じて竊に御心を惱め王ふや承ハる然らむ諸君にして今此の貨物を分捕し新教の者共ゑ粗暴の口實を與へさせ親王の御勘氣を蒙ると抔有もせば如何に無念なる次第ならずや願くハ義氣高邁ゑして廉潔以て自ら重んぜる英國男兒の面目を全くし粗忽の振舞を爲玉ふな、と演終れば一同ハ吶と喝采して、道理々々、と同じたり然らば此所を引揚ぐべし誰か有る椅子を持來れ〳〵と呼ハる下より早くも大なる長椅子を其處ゑ押据ゑば頓て悉德兒を此上に乘せ「目出度し〳〵我が悉德兒、と雖し立て舁ぎ連つゝ白旗を真先に押立て押出す悉德兒ハ椅子の上にて意氣揚々と帽を振り往來の禮を爲を者に會釋して已が住居へ舁ぎ込れしが其途中にて行遇ふ警官も此光景に呆れ果て手と下すことを得ゑ汚目々々として見送るのみ其中に令廣ハ深く考ふる所ありてゑ其途中より一揆の群ゑ立別れて畑の小徑を横ぎるつゝ、撤保德の街の方に一人竊に立去りぬ

第十八回　花園の會合

阿熱耳敦令廣ハ一揆の群に立離れて唯一人小徑を走り撤保德の街に入るに右に篤忍智の大寺あり此寺の對面側に往昔ハ由緒ある人の住居と覺しく門高く塀厚く庭園を廣く

取ていと風流に構へさる邸あるゞ今ハ主人の有ゑ無ゑ入口にハ霜に朽たる小草生ひ墻壁にハ蔦蘿の痕茂くして世に荒果たる景色あり、此傍にハ彼の莫厄加の母御丹して君子丹の叔母に當る勃土列兒夫人の別莊ありと聞つるが若くハ其に ゑ、と氣の迫く折に も亦懷しさの情ゑ堪へで悄と墻の隙より覗へべこハ如何に今波戸場の藏の中に取籠られし其折にもら片時も心ゑ忘れ得ぬ彼人(君子丹孃)の唯一人緣の端に据置たる椅子に倚り何かハ知らゑ物思ハし氣に冬枯の庭に咲殘りたる千草の花を眺めて居り令廣ハ餘りの嬉しさに我と忘れて門の鎖をハタと開て進み入て　令「令孃此に在しますか令廣に ていハ、と近く寄れば彼方ハ世にも思ひ掛ざる面色ゑ　アナゑと言て起んとす此方ハ猶近く進ミく　令「令孃何故に驚ゑ玉ふぞ……但し紫内も無く推參したるを無禮の者と咎め玉ふ歟……此ハ近頃恐れ入たり然らば早速退るべし容し玉へ、と云掛て去んとするを君子丹ハ遽にしく走り寄て袂を捉へ　君「令廣君其ハ何事とゑ玉ふぞ餘りの思ひ掛ゑ袂に驚きたるを無禮咎とて強ね玉ふハ曲も無ゑ妾こそ御身を尋ねて今朝程の御禮(父の力査を救ひし事)もゑ度く又先刻の御功績の程をも承ハらんと思ひしものを先ゑ此方へ、とて伴ふに素より其心なる若人ハ「先づ待ち玉へ、と令入來りし門の鎖を固くして再び庭に入り君子丹と差對ひて一脚の椅子に坐を占ゑり　君「令廣君能くマア貴

郎は妾の此所に居るを存じて尋ねて来て下さい升た子　令「否實は今通り掛り、波戸場の藏から放免に成さ其歸途、貴壞の此家にお出になるのを垣間見てからの出来心、不意お驚かせやたる失禮の段は御免下さい　君「アレ又失禮の何のと仰しゃる……妾は實お(此時少し驗を報めく)貴郎お此所でお目に懸ると此上も無いお嬉い事と存じ升、併し貴郎は今の体で此邊を迂可々々とお行き成さるは餘りの不用心、大膳お御舉動では御座り升ぬ、夫は左樣と先刻のお功績實に感心致し升は御坐り升ぬ　令「ナニ那は全く貴壞の御助力で、私の力計りではあり升ぬ　君「エ、ナニ妾の力とは、妾は唯傍で見物致して居り升たを　令「サ、其の御見物のみで澤山です、私は實に那時に貴壞のお目が私の上に落掛つて、私は貴壞の御助勢を得て、令虞シツカリ遣れ、と御聲お掛た樣に思ひ升た。君丹子は此時又もや驗をサツと報めしが暫くして　君「左樣仰しゃれば妾も那時貴郎の首尾好くマンマと御仕遂なさる樣お一心に祈り升たが……タが令虞君貴郎も隨分向不見の事を成され升、若し那時水雷に火でも點られたらソレこそモウ貴郎のお体は　令「其は粉碎に賓上られ升、併し左樣成ても厭ひませぬ、若し左樣して死ましさら貴壞から、令虞は可哀想な奴だと云ふお情のお詞が掛りませうから。君子丹は笑を含て　君「其は勿論の事ですが、トやて貴郎がお沒り成れた後妾が何程お悔をやせばとて貴郎の

お利益には成り升まい。令虞は真地目の顔色にて　令「否は其は苦しからぬ其お悔みさへ預まれば歸依僧が百千遍の祈禱よりも私の身は有難く……(少しく怒の聲音にて)快よく天國へ浮まれ升。君子丹は之を聞て面を傾向け暫く思案お体おりしが徐然とせし辭にて　君「令虞君其では貴郎は功名を世に顯さうと云ふ思召が御座り升ら斯樣お墓ないお妾でも悅ばせて遣り度いとの御心が御座り升か、と問掛たり令虞は熱心に力を籠て　令「身不肖の我等人に優れたる材能とては御座らぬも心計りは功名を青史お殘さんと存ずるなり又凡此の地球上億萬の人は有ども其中第一に抽出て貴壞をお悅ばせや度しとは我等實心に願望する所おり實に貴壞は仰と有らば如何おる危險の難事にもあれ必ず力の出来得る丈は十分に仕遂ぐべし　君「然らば貴郎、親王に御加擔は下さるまい歟……否に此は強て御勸はやされぬ兎角は貴郎は真實の御心の上に在る事なり、と又俯向く　令虞は其手と確と執く　令「ナニ御加擔とや其等の義おらば容易し我等は今日唯今迄り當曼丟多義勇兵お一人と思召され。よ君子丹は莞爾笑て君「令虞君其御辭によも偽りは有り升まい、然らば妾は貴郎の御肩に徽章を着け劒を佩せ參らすべし。令虞は此詞を聞て喜悅に堪ざりけん彼の執たる君子丹の手掌に接吻し　令「噫君子丹壞阿熱月敦令虞は御身れ爲に百年の生命を擲つべし此言決して偽りおらぬ上帝も照覽あり急々如律令

と誓言せり、斯る處ゝ莫尼加ハ那烏遜と連立て此所ゑ出来りしが令乃二人の樣子を見て序惡しとや思ひなん悄と立去らんとをる体あるを君子丹ハ忙しく呼留て　君「莫尼加待玉へ妾ハ今阿熱耳敎令虞と云ふ一騎當千の御味方と得て侍り、と云へば那烏遜ハ返早く走り来りて　那「扨ハ彌々確と決心せられしナ此上ハ諸共ゝ親王の御爲ゑ忠義を盡し戰場に臨みてハ勝も負くるも生るも死ぬも一所ゑせんアラ喜ばしや、と天を拜し且つ莫尼加を見顧れば　令「應、尤もなり、さるゝても君ハ既に斯の伉儷を得られたり獨り我等ハ、と歎息するを君子丹ハ引取て　君「否左迄ゝ歎ち玉ふな此大事にして成たる上ハ、と慰むると令虞ハ否みゝ「假令大事の成りたりとも我が素性ゑして明白とならぬ限ハ、迚も御身の手を執るを得ぜ、と吐息す其中に莫尼加ハいろ〳〵と「ナウ那烏遜殿令虞君の御味方と成れし事を母上にも「何樣お話し申上ゝ御喜ばせやさんせ那烏遜ハ先ゑ立てハ君子丹ハ令虞の手を携へて打連れ奥へゑ入りゝける

第十九回　敦土列兒夫人

令虞ハ人ゝゝ伴ハれて奥座敷に入て見るゝ室内ハと廣くして裝飾も尋常ならぜ見るものゝ何とゑう打濕りて慘怛う衰れなるハ衰へ行く家の樣ゝや有らん其座敷の上手の方ゝ厚衾重ね懸て枕に倚たる夫人あり黑き法衣を身ゝ着て肩まで垂る帽子眉深く被きた

るが色蒼く面痩て眼ハ凹み手足ハ深山ゝ樵る柴の骨計りとハおりされども面のかゝり鬲たけて口元ゑ引締り物凄き中ゝ愛嬌あるさま其昔の若盛ゝハ傾國の美人とも謂れやしつらん年ハ未だ四十路の上を多くハ越えじと見えたるも顔ゑ宴き甚だしきハ幾層の辛苦を爲しものと知らる前にハ一脚の机を据て一卷の祈禱書を載たるが表紙の手摺たる所を見れば如法ゑ信心者と知られたり抑も此の夫人ハ誰おるぞ此ハ是れ前回より其名のみハ屢ゝ讀者ゝ知ま為る莫尼加壞の母敦土列兒夫人にて年頃身の病痾に苦められしが此の二日三日ハ稍惱みの怠り方ゑて今朝しも壞の莫尼加ゝ扶られ二階の病間を下座敷に移して人ゝゝ何くれの物語させ其心を慰むる折なりし又此の夫人と煖爐を隔て相對ひ緇き法衣の袖掻合せて徐かなる辭ゝ經典の文を誦し安心の要を說聞をる六十ゑ近き法師あり這ハ大夫力査勞苦利の歸依僧なる慧羅莫と云へる舊教僧おりさる程ゝ此兩人ハ令人ゝゝの此座敷に入来るを見て法師ハ誦戒の口を停め夫人ハ又令虞の面を見詰て何かハ知ぜ太く心に感じたる体おりしが頓て莫尼加を傍に招ぎ細き聲して　夫「那ゑ見えたるハ誰人にて在すぞ、と問ふ。莫尼加ハ笑し氣なる顔色しく　莫「母上御身にも君子丹壞の話ゝて御名をば聞せ玉ひけん那ころ令朝伯父樣の危難を救ひ又先の程撤保德の橋にて拔群の功績と顯し玉ひし阿熱耳敎令虞君ゝておををり令見玉ひて左とを

ゐ悦び思すならめ、と答れば夫人ゐ扨ゐと云ふ面色せしが笑を含み　夫「左で在すう、如何ゑ令虞君汚くとも此方へ近く進み玉へ今朝程の御恩ゐいと辱けなく思ふに附て又先程の御働きゐ世に勇ましく聞侍り又妾が今御身の顔と打守りやせし事を無な怪しと思されんが此ゐ御身の面指の妾が近き親族の者に能う似て居玉ひしに依てなり無禮の段ゐ宥し玉へ、と言掛て法師を見顧り　夫「惹羅莫殿如何ゑ左ゐ思さぬや、と云へば惹羅莫も令虞の面を熟ゑ視て惹「何様怪しき迄能く似玉ひたり貧道も不審ゑ堪ぬい、と云ふ君子丹ゐ傍面より　君「今似たりとの玉ゐするゐ妾の伯父様大夫阿西華徳の御事に侍らぬや、と云つゝ同く令虞を見る。夫人ゐ徐に首肯て　夫「左ゐ我兄阿西華徳ゑ似られしと云ふ事ゐ令虞君ゐ其名を知れしと覺ゆれば故と彼名を言ゐざりしが扨も其人が生前の面影ゑ其儘なり、とて猶も深く其心に感動せしが如くなり。君子丹ゐ先程の父が秘書と云ひ又令虞が身上と云ひ其容貌の似たると云ひ其か有ぬか若し万一と疾く心ゑゐ浮みしゐ素より怜悧の女性なれば色ゑも出さぬ叔母ゑ對ひて　君「叔母上御身ゐ伯父様の肖像を有ち玉ふか　夫「一枚ありしと覺えたるが今ゐ如何ありしやらん左いふ你の勞苦刹ゑゐ定めて保護して有るべきゑ　君「否妾が家ゐとてゐ伯父御ゐ素より其より後れて失せ玉ひし美人の名ある伯母御前の肖像すら一枚も侍らぬ、と云へば惹羅莫ゐ苦笑ひ

して　惹「否ゑ御二人の肖像ゐ確に有り貧道も現ゑ先年見たりなれども去る仔細ありて今ゐ藏の長櫃ゑ入れ鍵を卸して有る歟とゑ思ふゐり。君子丹ゐ眉を顰めて　君「其仔細とゐ……シテ又何故ゐ父上ゐ其像を妾にも見せ玉ゐぬゑや。夫人ゐ暗に大息して　夫「否何も仔細をてゐ無し唯你の父ある人ゲ其肖像を常ゑ見度く無き故あるべし、とて最と冷淡ある口氣を用ひ談話を傍ゑ紛らす如き氣てゐあるゑ君子丹も重ねて問ぜ聞き居る令虞ゐ今一言二言にて面白き話の端緒の開けなんとするに臨みて中止となり心ゑ飽足ずゐ思ひたるも他の上あれば尋ねも成らず唯押黙りて扣へたり、談話の途切て一座の何となく白けしを見て那烏遜ゐ其處に進み　那「夫人御悦び下さるべし君子丹孃のお勸誘て此ある令虞氏も我我の一味ゑ加へられてひゐ、と云へば。夫人ゐ之を聞き身を少し起し掛て　夫「左様で侍るゥ、那方の如き勇氣ある若人の御味方ゑ參らるゝとゐ御軍を取り誠ゑ悦ばしき事なるが……されど何卒御二人とも武運目出度く勝軍して功名を顧ゐされんこそ望ましけれ、と云も終らぬ何事を思ひ出してや夫人ゐハラ〳〵と兩眼より涙を落して殆ど堪へ難く見られたり餘りの事の氣の毒さゑ莫尼加ゐ傍へ居寄り　莫「此の目出度き席にて何故ゑ左ゐ歎ぬ玉ふや最早や御出陣も程近きゑ不吉ゑゐ侍らぬや、と云へば母夫人ゐ涙を拂ひ　夫「你ゐ何事も知らで在せば妾の泣くを怪むも無理ならぬ

されども此の涙の中にゐ世ゝ恐しく悲しき理由を含みたり　莫「ナニ恐しき次第とや母様其ゐ如何おる仔細ぞ聞せて給べ、と縋り寄ば君子丹も同じく叔母の顔を見て間近く膝を進むるにぞ夫人ゐ傍に目を眠りたる惹羅莫に打對ひて「上人此ゐ如何にすべき語て善き歟惡き歟を教へ玉へ、と問掛れば惹羅莫ゐ「何事も御心の隨意ゝなり語りて胸を晴し玉ふも好らん、と辭寡に答たり勃土列兒夫人ゐ、然らば、とて一座を見廻し夫「人ゝ熟く聞き玉へ此ゐ妾が身の懺悔と一つゐ娘や姪への爲ゝ心得置する事なり、と云ふ中より早や兩眼に玉散る涙ゐ雨霰餘所の時雨も一つに來て此所に社み降るかと思ゐれぬ

◉第二十回　莫尼加壞

勃土列兒夫人ゐ落る涙ゐ搔拂ひて「人々熟く聽れ玉へ妾の年未だ廿才丹足で莫尼加、你より一才二才若き頃なりし或る貴族の公達と相昵びて互ゝ末ゐ夫婦との約束せしが此公達の一門ゐ熱心なる士都華德黨ゝして千七百十五年の春初度の親王（杳兒斯親王の御父惹莫士親王おり）の御討入ゝも一番ゝ御味方ゝ馳加ゐり粉骨の忠戰を勵みしかども御運拙なく親王の御軍敗れしかば戰場に骨と曝して勇名を屍の上ゝ留めたるも多ゐりきさる程ゝ此公達も夜晝刃を齒み腕を摩りて亡き親族ゐ復讐の機も來よかしと願ゐ

れたるに同じ年の冬ゝ至りて親王が再度の御討入あり時こそ來つれと彼人ゐ戰場ゐ打向ゐれしが士都華德の御家ゐ軍神ゝや見棄られ玉ひなん左しも此回ゐと頼ゝ切たる味方の謀略一々に相違しく南北ゐ軍勢合期せぞ無念や味方ゐ巴諾伯黨の大軍の爲ゐ散々ゝ駈破られ遂ゝ勢ひ盡死力窮まりて彼人も自ら敵の俘囚とゐ成り玉ひぬ、と言止て苦し氣おる息を吻と吐き「其時彼人ゐ妾を呼て、我等斯く運盡て敵方ゝ出る上ゐ此身の果の如何なるべき歟ゐ遼じめ測り難き事ゝおゐん但し此折ゐ及びても心に懸るゐ御身の上おり就て我が無二の友ゝ云々の男あり昨日御身の往末れ事を詳く頼み聞えされば此後ゐ彼人を我と思ひ其に便りて身の安穩を計り玉へ、と泣入る妾を樣々ゐ誘し拵へ敵陣ゝ赴き玉ひしが其頼まれたる友と云ふゐ莫尼加、御身の父御に侍り、と告らるゝ話說を聞く中より眼ゝ涙を一杯溜たる莫尼加ゐ「扨ゐ然る事の侍りしかシテ其今社公達ゐ夫」オゝ其公達ゐ……と再び語り出んとをる時夫人ゐ急ゝ眼を睜ゝ厚襖がバと刎除て虛空を睨み「アゝアレ〳〵彼方の今來玉ひしぞ、那處ゝ見ゆるゐ斬首臺か、悲やな那臺にて我夫を首刎んとや、ナニ〳〵國王に仇する叛逆人とて此他牙の丘ゝ於て死刑ゝ處するとや、ナウ我夫妾が此所ゝ……ア、嬉しや妾を見附玉ひしかアレ〳〵那の美し兒笑顔して……踏む足も確ふて……惡怯ぬ……此程健氣なる我夫を殺をとゐ何事ぞ……オゝ

人々の喝采るゐ〳〵、我夫御身ゐ此の喝采を聞玉ふか……　首領玉ゐ聞ゆるよ……
ア、法師が……會釋して……懺悔を勸むる經文か……悲しや斬手が、斬首臺ゆ、アレお
首を押附て、ハ、ー、ー、と一聲泣伏せしが夫人ゐ其儘眼を見詰め齒を切ばりて悶絶を「ノ
ー母様、叔母上と取縋る二人ゐ壞「夫人氣を確ゐして、と抱き起す二人の少年、惹莫士ゐ
手早く有合ふ水を注ぎ「勃土列兒夫人〳〵、と呼立る聲の通じてか夫人ゐ暫くして眼を
開き苦しき太息を長く吐ま不審氣に四邊を見廻し　夫「オ、今彼の公達の最期の場を有
り〳〵見たるゐ夢なりし歟夢ゐも有ま現ゐも有ま去し昔を呼戻して今一度逢ひ參らせ
たやアラ戀しや、と叫びながら那烏遜と令虞を左右ゐ見て「御身等も武運目出度く斯る
不幸ゐ陷らぬ樣願ゐしけれ、と歎息すれむ莫尼加ゐワツと泣出して那烏遜の傍ゐ走り
寄り縋り附て「惹莫殿、御身に萬一の事ありてゐ妾如何ゐして生存ふべき確ゐ御勝利と
の見据も附ぬ軍ゐ出て今の樣なる悲しい目に若し遇わせば何とせん妾可愛と思ひ玉ゐ
む此軍ゐゐ必ず共に出で玉ふお、と引搖かせ、那烏遜ゐ此とな り〳〵「男兒一旦御味方ぞ
と口外せしを何程命の惜ければとま今更ら思ひ止らるべきさる恥知ぞの擧動は我等ゐ
能くせず、と突刻るを猶絆ゐりて莫「否々御身の御味方とおりしも妾故なりさらむ又妾
故爲ゐゐ此企てを思止まるも怪うゐ有らず、良し何との玉ふとも此軍にゐ出ずと〳〵

と泣いされば　那「莫尼加其ゐ何たる事ぞ母御が昔の軍物語ゐ聞怯するとて此ゐ亦餘
りおり御身が平生の辭ゐも些ゐ恥ぢ玉へ、と窘むれば君子丹も傍らより「見苦しや莫尼
加左程討死の悲くゐ何ど最初より惹莫殿を勸め玉ひし凡武士の意地ある者ゐ假ひ何程
ゐ言たれべとて生死の爲ゐ此誓を反古にゐ爲まじ、と後目に此と令虞の面を見顧れる
令虞ゐ騷ぎたる色も無く儼然として座したる儘口を閉たり君子丹ゐ再び那烏遜の方に
對ひて「如何に惹莫君女の差出口と思すか知らねど此處ゐて一歩を誤り玉ゐ生涯
男兒と言るまゝ心得玉へ、と注意れば莫尼加ゐ怨し氣ふハタと睨て「君子丹其ゐ入ざ
る世話おり妾が夫と思ふ人ゐ傍らの注意も出來過たり、サア惹莫殿發揮と返辭をし
玉ずや妾も今迄此程戀しとゐ思ゐざりしをモウ今よりゐ片時も放しいせぬ、と縋り
絆る哀歎悲痛を母夫人と惹羅莫ゐ君子丹に任せる方爲好るべしと思ひてか最初より
何とも言はぬ君子丹ゐ若し那烏遜の歎きゐ引れて變心する事もやと思へば心も心おら
ぬ又もや令虞に目を注すれば此方ゐ心得「惹莫君足下ゐ談ずべき用事あり此方へ、と言
ふを機ゐして起んとするを猶放さぬ　莫「エ、令虞君も情が無し言ふ事あらば其方へ往
ぬ此處ゐて何おりとも云ひ玉へ、と引留るを君子丹ゐ立隔て、兎角して那烏遜を令虞
と共に座を立すれば莫尼加ゐ溜らず其處ゐ泣倒ゐて「母様御身が爲せし歎きを妾にも

爲せ玉ふな何卒我夫を救ふて給べ死して謀叛人の名は取れぬ樣惹莫にも異見して給べ、と云ふ時母夫人は嚴めし充聲音して「ナニ謀叛人とや妾の歎く其人は謀叛人でい非ざるぞ、と激く言ば惹羅莫も辭徐かゴ「凡正統の天子の爲ゴ身を棄て民の倒懸の苦を解く者は天下の義士なり決して謀叛人ゴはいえず、と說くを聞て莫尼加はハツと頭を下げ稍暫くは辭も無くて面を赧めつ考へたるが漸くゴ首と揚て「母樣も上人も君子丹壤も容し玉へ妾は今能く會得して待り再び惹莫ゴ兎角ろ事はやすまじ噫今迄は迷の雲に掩れて不思議の夢を見て待り噫親王妾が身の罪を宥し玉へ

●第二十回

惹德兒の與座敷

撒保德の橋ゴ近く須士美と云ふ堤あり此所に閒口と廣く構へていと大充なる理髮店あり此店の主人は彼の俠客當廣惹德兒ゴて此府の貴紳も彼が手工に巧みあると其話の面白さとゴて遠方よりも足を運び又年若き婦人達は此家の二階ゴ設々し化粧室ゴて時樣の化粧を習ひもし又自ら考へ出せし粧飾の巧拙をも問ひ談ぎるを以て店は前あは常に數輛の馬車立列べりされども若し其人ゴして現朝の官吏か新教派の人と見れば例の三角なる眼を四角ゐして睨み附け、汝等が如き汚穢しき者の面襞をば得こそ剃るまじい、と云ふ色を示し其ゴても其客の猶悟らねば大聲もて怒鳴附々店より逐出すを常とすれ

ば益ゴ舊教徒取分き士都華德黨の愛顧を得て任俠の理髮と云ふ評判此一府ゴ高くあれりさる程に惹德兒は此日一揆の援助を得て波戸場の藏より昇ぎ出され我家ゴ送り込れし後此風聞を聞たる一味の面々彼の日根、具倫の兩博士、日根の子息三人、當麻士骨弗苦、當麻士査土尾苦、戎伯威古、戎日弗列丟兒、沙美麻兒德屈西等の人々何れも其家ゴ尋ね來りて與座敷に入り今日の功績、危難、又倚子に昇がれも大道を練りたる狀の與がる事共を物語り各々笑壺ゴ入たる頃貝倫は坐中を見渡して聲を潛め　貝「拙僧唯今一大事の報道と得たり其は親王には御旗下なる第一大隊の精兵を率て早や弗列士敎ゴ渡御ありたれば明早朝ゴは畢利豪卿は先鋒承むり一隊の騎兵を從へて當曼丟多に討入らるゝよし幕下より特使の早打を以て報じ越されたり尤も此義は秘中の秘事なれば當府警官等の耳ゴも未だ入りはて斯くやすす拙僧より外は知る者絶てはまじ夫ゴ附ても當家の主人と阿熱耳敎令虞氏が今日撒保德橋に於て殊働きは此上なき功績ゴして若し彼の警官等が計畫の如く那橋をやみ〳〵と燒落されなば縱ひ味方の大軍當府の下ゴ攻寄るせえ討入るべき路なくして川一筋の爲に日數を送り其中ゴ敵方の防禦の手當も十分に調ひなば容易は落去ゴ及ぶべからぎ然るに今日は唯彼橋あると以て明朝の不意の襲擊ゴも物一つの障碍なく軍略も事十二分ゐ合期して當府全体の作手ゴ入ると明日の午

後をば過さじと思へば誠ふ喜びしくひたり、と云へば人々も異口同音に是に左にてこそひへ、と賞賛を悉德兒ハ人々に賞られて彼の異樣なる尖き鼻を蠢かしおから肩幅廣く坐を構へて莞爾と笑み且つ唇を舐りつ、「既に斯く佐討入の近しと有るに奉迎の支度の第一として兵糧の準備せでハ叶ふまじ夫にハ昨今當地の者共が貨物取片附れ命令を得て日々近在へ運び出す食料の物品を差押へ今晩よりも其運送の路を斷つと肝要ましべし、と言出れば　一人「實ふ此事こそ急務ふれ但し人々をして此運送を爲さしめざる事頗る至難の事ならずや　悉「イヤ其ハ誠ふ容易の事なり我等那の打鉦者（急報あれば警鉦を叩て其事件を全府の市民に通ずる者）の便、婆智と懇意なるに那奴を甘く說着く今夜市中を闊廻らせ明朝よりハ菜の一葉肉の一片麁包の一缺も此府門より外へ出させぬ樣致すべし　貝「何樣此ハ妙計ふりされども彼の便、婆智が貴下ふ同意せぬ時ハ

悉「ナニ那奴も矢張我黨の一人なれば然る心配ふし若し万一不の字を云ば我等彼鉦を引奪て自ら叩きて闊廻らんに何か有るべ如なれども其配慮ハ佐無用なり我等必らず好程ふ鼻藥を飼ひ彼奴に同意を表せしむべし　貝「成る程其等ふ手段も有らん併し早や夜も更方なるに何處にて彼を見出すべきや　悉「否彼の所在なれば熟く知れり彼ハ毎も寢床に入る前板銀具日知（街名）の半月亭にて酒を喫むなり今頃彼亭に至らば必らず麥酒

樽の如き其氣ある便、婆智を見出すふらん「然らば足下佐苦勞でも彼の亭まで佐出張を願ひ度し　悉「其ハ素より其覺悟なりさらば暫く各々ハ此にて待玉へ、とて身を起さんとしたる折柄忽ち表の戸をほと〳〵と叩て竊に「悉德兒〳〵、と呼聲を脇に疵持つ一座の者ハ「スハ警官か、と驚として思ひを顏を見合せたり

第廿一回　便、婆智

思掛なく此夜更ふ人の音るふ聲するに人々ハスハヤと驚くを悉德兒ハ制し禁め「縱ひ少々の警官ゞ打對ひされむとて何程の事か有らん騷ぎ玉ふな諸事我等に任せ玉へ、と言掛て唯一人二階に上り硝子窓より外面を覗ふ此夜ハ月皎々と冴渡りて空ふハ雲も無く大路ハ蟻の這ふさへも見得つべき程なれば、來るハ誰ぞと熟く視れば思ひきや其人ハ唯今此より訪んとする彼の打鉦者の便、婆智なり、扨も〳〵と打笑ま下ふ降り先づ表の戸を開きて　悉「便、婆智か何用ありて來れるぞ便「斯る深夜に御身を驚かしやせし段ハ宥し玉へ扨我等が參りしハ餘の義にあらぞ世にハ痴漢も有ば有るものにて今夜御身の父御の骨を竊み出し箱を打破り往來に引散し棄さる者あり我等之を見るに忍びず急ぎ收拾て持て來れり受取り玉へと言終りて小布に包みたる骸骨を差出せば此方ハ見るより兩眼に涙を流し其骨を受藏さて　悉「婆智どの佐身の厚情ハ忘れハ置ぞ我此の父

の骨に清き函の裏に納めて大切に藏め置たるを何者が盜み出して辱しめけん想ふに此れ新教派の奴輩が所爲ならん我等其者を見つけ出さば寸斷々々に切さいなみて此恨を報ふべきに御身此の上の懇情に本人の誰なる歟を探り玉へ但し足下が今夜の労志に世を換るも恐きにせよ、と且つ怒り且つ謝すれば便、婆智に氣の毒げに「我等も其本人に知ねども多分新教徒の惡業なるべしおれども遺骨に恙なければ切るの殺すのと云ふ暇立に緩め玉へさらば我等に御暇せん然らばと言つゝ去んとするを悉德兒に忙しく呼留て「婆智どの先づ待玉へ御身に至急語らふべき緊要の事件あり願くば暫く其處に、と言掛て與に走せ往き集りし人々に打對ひて　悉「今の者を誰らと思ひしに那の便、婆智の聊かの所用ありて訪ひ來れるなり就ては先の要件と幸ひ此にて談じ込んと思ふが其に我等一人にて說き試むべきや若くは此座敷に入れ諸君の御聲掛りをも請ふべきや如何に、と云へば人々も打笑ひ「可惜肝を冷せし事よ其に兎も有れ那男をば此座敷に伴ひ玉へと齊く云ふぞ悉德兒に、承えるゝ、さて頓て婆智を引連て入來れば人々に進み向ひて挨拶は時に是れ夜半なり家に是れ理髮店あり其人も有るべきに何れも此府に聞にたる博士學士の立者が打揃ての集會おれば婆智に事情を測り無ね唯呆れ果て迂路々々するのみ其時骨弗苦に儼然として婆智に對ひ「和殿其職掌として既に知れし事

おらん當府の食料昨今次第に乏くありて貧民は難澁大方おらぬ就ては足下今夜直ちに鑼と鳴して市街を廻り爾後如何なる事情あるとも食料品を府外に出すべからぬとの旨を觸れ玉へ然らば莫大の功德にして救濟の恩無限なるべしと云へば婆智に迷惑氣に頭を搖き「其に早や宣ふ迄も無く昨今食料の缺乏に各々方より我等如きの貧乏人が逸早く胸に感て心配一方おらね共唯此事に警察署より命令おき限に、と半分言せぬ骨弗苦にザグリと云ふ音をさせて何圓うを紙に包み竊に彼に握らすれば婆智に忽ち莞爾として辭と直し「命令なき限に原來行ふを得ざれども外ならぬ貴僧のお依頼殊ふ如法の善根なれば……宜し今曉此より直に市中を觸れて府外への食物運送を留むべし最早御心配あられな、と云終るが否隱袋と押へて外の方へ走せ出しさる程も有らせぬ早銅鑼の音高く聞えて市中にワヤ〳〵と騷動も此座に居さる人々に既に計略事十二分に行えれたりと喜びて互に顏を見合つつ何とも片頰に笑を含めり

第廿二回　三人の親王軍

去程ふ曼府の人々に昨夜の銅鑼の爲に夢を破られ殊に今日より凡此府の食料品たる物に一切府外へ出さべからぬとの旨に就て叛に當府に日おらぬ親王軍の爲に攻圍るべき歟夫に就ても府内にに全く防禦の備なく折角集し民兵も此程解隊し平生に復腕を張

し勤王黨及び新教徒の者共も此日とおりてい尻込して抄々しく彈の一個も擊出すべき者を見ぎ叛ね如何にして籠城すべきと府民ね皆胸を痛め其等の事に奔走する者あれば親王黨一味の者ね此虚に乘じて又様々の造言を言觸し益々人心を騒立せんと搆へたり警官ね早く其と推して切る浮説鎮壓の事に盡力したるが此日の午後一時頃撤保德の街（曼府ね其中央に伊兒成の大河流れて其西岸を撤保德東岸を曼丟多の街とす）より急報ありて唯今親王軍の先鋒當街へ押寄たり疾く防戰の用意せよと觸廻れりスハヤと人々ね騒ぎ立て警官ね又例の親王黨の造説にと怪みつゝ在る所に忽ち見る高地風（蘇格蘭）の裝束したる男女三騎大川の岸を上り母撤保德の橋近く進みたりされども續く勢も無し白晝にのさ〳〵と敵兵ね此土地を踏荒さする事やある早く討取れと犇くも有れど又一方ね否く斯う恐氣も無く入來る体を見れば後陣の大軍間近く跡に續きしに相違なし愁ねに手指して苛き目に遇ふなと留るも有りさる程に此男女三騎の者ね早や橋の上に來りて馬を立しが其中にも真先に進みたる大尉の軍裝燗やかに着下したる一人の若武者手に拔持たる劒を揮ひて號令すれば後に立たる鼓手ね撥を腰より拔出して揑々と打鳴せり人々ね此音を聞て彼等何事を爲んとやと走り集ひ先づ其大尉の服裝せし若武者を見てあれば此人年ね廿才前後身体の恰好最も其宜きに適して眉秀で唇朱

く真茜に一個の美少年あり其次なるね嬢にて年齡ね十八九にや成るべからん顔色は艶態度の美高地の軍中にも蓋し評判の尤物なるべく殊に髮毛ね黄金色ぬ艶きて蒼き眼の爽かに照りたる抔ね一見人をして惱殺せしむべし最後なる鼓手此も年猶壯にして顔色骨格の勇壯なる天晴一騎當千の勇者と見られたり人々ね此光景を見く先早や蜀采の聲を擧たるが茲に此三人の上を云へば彼の大尉ね其名を愛律古日固遯と云ひ夥て此孃碧蓮葛念昵と相昵みて家に在る日ね片時も傍らを離れざりしに此回の軍起りて日固遯ね士官に擧られ互に訣別の涙を注ぎて相別れしが斯る生死の衢に在ても日固遯ね葛念昵の事を忘れぎ天暴にさやぐ霜の爲に想寐の夢を破らるてね墓なき契を悲み居たるに親王の兵勢ね益々鋭く弗列士敦の勝軍の後ね早や近傍に敵將ふべき勤王黨の勢も無く此よりね長く驅て倫敦に迄も攻入るべしと上下皆喜び合るぬぞ日固遯も然らば彼女を軍中に迎へて戰場の勞苦を昔語の種にも爲すべしとて將軍に乞ひ壹丁堡に人を遣て此程迎へ取さるなりされば又此葛念昵ね姿容ね此の如く艶美にね有つれども其心術にね倒て大に識すべきもの有り其一條の例を擧れむ人有て此女の陰言を云ふ時ね忽ち日固遯の怨を惹て復讐せらるゝ事も有りと云ふされども此二人とも心に固有の勇氣あり已等遂早く曼丟多に入り魁首の功名を收めんとて其隊の將軍戎日馬都利が危險をて止む

るをも聞ず我隊の敵手ゝて勇氣ある散日魯朗を相語ひて惣軍ゝ先んじて今此處へ來りしなり斯て日固遜ハ人々が蜀采を聞て暫くと鼓聲を止め先づ帽を脱て群集の者ゝ一禮せし後鞍蓋に突起上りて　日「神よ我皇惹莫士三世を祐け玉へと大音聲ゝ呼はれば此を聞て再び蜀采をるも有り又急ゝ聲を立て叛徒を打倒せと叫ぶも有り既や早雄の勤王黨ハ群々と走り懸りて得物を揮ひて打掛れば日固遜ハ大に怒りて鞍ゝ附さる短銃を掻ぐり取り碧蓮ふ渡して自已ハ劒を振翳し近寄る者を二三人切伏たり碧蓮も亦情郎を助けて左右ゝ當り魯朗ハ二人の馬の先ゝ立ち乘廻り駈破りて「此群集の中に味方ハ無き歟親王黨の人ハ有ぬ歟と呼はれば日固遜も亦「我等三人當府の味方を募らん爲に罷り向ふたり正統の天子を守護し參らせて僭位者を此國より逐拂ハんと思ふ義士ハ早く出て力を協せよと叫ぶを聞て群集の中より「誰か謀叛人たる汝等に與すべき疾く降參せよ命丈ハ助けて遣んと云ひつゝ突と打笑ふ日固遜ハ益々怒り「軍人に對ひて降參呼はり奇怪なり此劍が我命よ汝等下手に敵對して二つと無き首を失ふな然るみても先ゝ蜀采せし我が味方ハ何れゝ在すぞ早く出で玉へと云ふ下より「御味方ハと聞を揚て二三十人群集の後より切く出づ敵方ハ此ゝ驚きしが「高の知たる方人めら先づ彼奴等より打取れと兩手ゝ分れ或ハ防ぎ或ハ三人を取籠て討んとを日固遜等三人も心ハ彌猛ゝ

曼府の叛亂　第六圖

怒れども大勢に取圍まアハヤ囚虜とも成らん歟と見ゆる時忽ち群集の後陣れ方より砂烟を擧て「勤王黨の奴原を一人も遁すおとロミに呼はり〳〵五六十人我先にと走せ來る其眞先に立たるハ又那の例の悉德兒なり勤王黨の者共ハ之を見て「スハ悉德兒よ彼に遇てハ敵はぬぞ逃よ〳〵と言も敢ず皆散ミに逃走れば日固遜等三人新入の親王黨又悉德兒の一隊ハ此處彼處に追詰くハ打倒し生捕て勝鬨を突と揚しが　悉「イザ此勢ひゐて押出す此を聞て八方より集り來る味方の人數ハ幾百と云ふ數を知らぬ早や曼府ハ此一揆の手裏の物とぞ見えたりける

❽第廿三回　美人と金

斯て大尉ハ大勢の味方を引具して碧蓮と共に馬を並べ撒保德の橋より大路の四辻ゐ進み來るに此形勢の盛おるを見て我先にと此群に加はる者恰も雲霞の如くおり具倫ハ此風說を聞つけて娘の別非と此街の或る家に到り二階に上りて窓より其体を望み居たるが日固遜が勇氣ある容貌と碧蓮が艷美おる顏色とを痛く賞て天晴一對の好男女なりと言ふを聞て別非ハ笑し氣ゐ父に對ひ「父樣御覽ぜよ那女の黃金色の髮毛ハ如何に美しく侍らぬや又其齒の皓き眼の凉やかなる誠に愛らしく侍らぬや凡我が英吉蘭に斯る容

貌の好く揃ひたる嬢に有るべしとも覺へず、と云へば貝倫も首領て「然り絶世の美人なり然も其態度の老ずして自ら處女めたる所あるが更に一層の美を増すが如し」別「其に那の活潑なる所を見れば心も定めし方正からんと思はる、と言ふを打消し貝「否其心術の正か不正かは予は今聞くを好まず、と傍へ外すを別非は信ぬ顔して「父上、妾は現相學より之を見るも那壞の心術の正しきは確と知らるゝが若し左も無くば妾以來は此學を信じやすまじ。貝倫は壞が熱心ある此論を聞くと雖も如何なる心ゐや拶ふしく も若ず猶彼人ゝが爲る樣と群集の者の体を見るゝ大勢の親王黨新加入者は切母碧蓮の美に見惚つゝ我近く其傍ゝ寄りて此美人ゝ辱けあき一瞥を賜はるか左なくば此方より其顔を飽まで見んと各ゝ其馬の左右に立集ひ隙間も無く圍繞めり時ゝ日固邏は大衆ゝ對ひ「嗚呼我が一味の義士よ子等我爲に我皇惹莫士三世と叫べ然らば其恩賞として銘ゝ金貨五圓宛を親王より賜はるべきぞと揚言すれば碧蓮も亦金鈴の如き聲小さく可愛き唇より發して「我黨の義士早く大尉の勸告ゝ隨ひて我皇を祝し當座の御恩賞ゝ預り玉へと言ふが否大衆一度ゝ「我皇惹莫士第三世陛下万歳、と大波の打寄る如くゝ空際を響して吶と三聲叫びたり日固邏は其勸揚めきの靜まるを待て「いしくも祝し奉つらまたり然らば其恩賞は將軍馬都利の到着を待て拙者より相渡すべし仍て一ゝ其姓名を

告られよと云へは一同は又我先ふと進み出て日固邏ゝ其姓名宿所を告げ彼が手帳への登記を待て引退く入交る人數も夥多しなれは左こそは眺も疲れつらんが此方は心に大望あり彼等は五圓と云ふ金の目的あれば其を取外らじとて氣の毒とも思はず又弱りたる色も見せず書もし告もするふ間斷なし親王黨熱心の別非は此有樣に歡喜ゝ堪ず窓より碧蓮母目禮し手巾を打振て祝意を示せば碧蓮は高雅ゝして美麗なる壞子ゝ祝はれて急はしく答禮し傾て已が冠りたる帽を取りて其母着たる白色の紐を指し　碧「如何母壞子、妾此を進らせんに御身、那ゝ着け玉ふべきや、と問べ別非は打笑て「其は有難き賜物あり悅びて身につけ待るべし　碧「然ば、、とて馬を窓の下に寄せ飾紐を取て別非に渡しつゝ碧蓮は馬を退せながら「御身既ゝ妾の賤しき贈物を受け玉ふ然らば御身より貴き勇士一人を親王に參らさせ玉へ、と云ふ此詞の面白きに人ゝはヤ、ヤ、と噪來る聲鳴も止ず。斯て暫くして此群集は此所を過ぎ行ば別非は彼の碧蓮を見送るながら「父樣那壞は標致も好く心術の正しき而已ならず才智も亦非凡ゝは侍らぎや　貝「御身は頻に彼壞を賞め玉ふが心術の正しきとは何を證據ゝの玉ふぞや　別「別に證據とても侍らぬが假ゝ其一例として見るべきは彼が思ふ郎を扶ゝて此敵地へ恐れ氣も無く踏込ゝて其親實の程も健氣さも知れ侍り、妾何卒那人と落合て語し度く思ふあり　貝「左程に望まば悉德兒

ゴ頼みて見んゑらば彼が店ゴ行くべし、とて貝倫父子ハ此家を出で悉德兒の方ゴ至るゴ彼も今日固邀を助けて募兵を終り大汗ゴおりて歸り来りし折なれば父子ハ先づ其功勞を賞め扨云ゴとの事を言ふに悉德兒ハ大受込にて「委細我等承知せり明日にも故事（募兵の事）の隙を見て御宅へ同人を進らをべし、扨其ハ措て先生今日の我等の手際ハ如何様なもので御坐る、と彼の勤王黨を打破りたる事を言出で例の鷲鼻を一層高くして自慢話ゴ移りける

●第廿四回　生木の斧

大夫力査勞苦利が曼丟多を去たる後ハ如何なりしか絶て其消息を得ざれども結句其の評判おさハ一身の安穩なる故なるべしとて君子丹ハ心配中ゴも聊か心易き思したるが唯其心に懸るものハ彼の阿熱耳教令虞ゴ係る秘密の書牘を見たる事の一條なり此儘黙々ゴ附し去る時ハ斷て露顯の懼無きも良心ハ其罪を絶ぢ咎めて自ら地獄に墮る其業因を造るものおりされゞとて此事明々地ゴ父ゴ聞えおゞ那の如き頑固ゴ腹立ぼき質おれば如何ある怒を惹起さんも知るべらぢ如何にせばやと案じ詫て彼日（教王列兒邸にて集會せし日）の翌日竊ふ父の歸依僧ある惹羅莫上人に此事を告げ其裁判を求めたり惹羅莫ハ此話を聞て打案ぢる事半時餘り漸く口を開きて「令嬢能も告られたり凡教

曼府の叛亂　第七圖

法の上に於て其身の罪科を識悔すると最も安心の要あれども亦其識悔に因て人に痛苦を感ぜしめ及び其怒を起さしむる事の如きは少しく斟酌を用ふるも方便の一つなり現に和壤が今の秘書を竊み見たる事の如き其有の儘を以て父に告なば父は其偶然の事たると故意の所爲たるとを問ぬ必らず御身が罪を責め且は非常の心痛を感ぜし此れ御身が親に盡すの孝道為非をされば和壤は此事を以て終身父に語るべからず又人にも告ぐべからず其罪の償ひは貧道好に計ひて得さをべし扨其の罪根たる父の秘書は今も猶手許に有りや、有ば我に渡をべし、とて惹羅莫は彼の書類共を君子丹より受取つゝ確と其懐中に納めて「此は貧道より力査殿に渡すべければ此後御身の心配は無用なり就て和壤ふ忠告したき一義あり昨日此館にて遇たる阿熱耳敦令虞は中々の好男子にて女子、には好るゝ風なるが御身に限りてはよも彼を慕ふが如き不所存は有るまじきな、と釘を刺さて、ソレは、と計りハツと答も口籠りて顔赧めつゝ差俯向ば惹「フー、發揮とせし答の無きは扨は彼をば愛し玉ふの其は苦々しき限なり、和壤其慾念は宜しく唯今押へ玉へ若し其慾火熾盛とおりて知慧の水を涸し盡す日に至らば是身の破滅を來すの時なり穴賢穴賢むべし〳〵、扨斯う御身に聞ゆるを木乃端か竹の切と云ふ棄恩入無爲の棄世人が膠なき忠告と思されんが左ふ非を御身の父力査は決して彼令虞の如き素性知れ

ざる冒險者流を御身の聟と爲べきゝ非ずさらば何程に彼を愛をるも灰白髮の八千代を契る妻夫の緣を結び難きゝ目今より知れて有り其折の墓おき愁歎を御身ゝさせじと思へばこゝろ貧道傳道師の職掌として且ゝ御身が父ゝ舊友の身分として和壤を我婿と思ひ取て斯ゝ規諫を加ふるなり必らず此戀を ペフツ、リ唯今普ひて思ひ切り玉へ、と諫れども君子丹ゝ首を掉るれを一言だも應をせず惹羅莫ゝ熟々と君子丹の面を見つ、歎息して「嗟御身の片意地ある左程ゝ思ひ迷ゝまし歟、御身ゝ已が身を忘れし歟、大夫勞苦利の後嗣と云ふを忘れし歟、御身の父既ゝ彼を聟とせゞ御身又た家を棄て他ゝ嫁をゞ、ゝらゞ然らば如何にして彼と婚姻の情願を果さんとゝする、予ゝ今你が父に代りて你ゝ命ゞ決して彼者と夫妻となるべからゞ若し此命に違ふとならば是れ即ち父に背くなり父ゝ背く不孝の子ゝ救世主の大慈も之を救ふと得べからゞ、ゞ稍言を緩くして警戒むる時專とすれば指を影の折も折とて阿熱耳敦令廣ゝ莫尼加壤と打連て此室に來りたり惹羅莫ゝ斯と見て眼を睜り「噫彼者ゝ予が宣告を受んとて來りしゝ、と起んとするを君子丹ゝ先程より眼に溜たる一杯の涙を此時振飜して惹羅莫の長き裾を急ゝしく引溜め「上人マア待て給べ妾一言云ふ事あり御異見の段ゝ承知せり令廣君への御話ゝ今暫く、皇夫へ止るを耳ゝも懸々す　惹「莫尼加壤御身に至急語るべき要件あり此方へ、と伴

ゝて奥へ入る跡ゝ殘りし君子丹壤「ナウ悲しやとハツと計りゝ卓兒の上ゝ泣倒れて正体なし斯とゝ知らぬ令廣ゝ急ぎ走り寄りて「令壤何し玉ひしゝ氣狂深て見苦しやと起き起せゝ此方ゝ涙の顏を揚げ其手を握り恨し氣ゝ男の面を目守り詰て「氣も狂ゝいて何とせん悲しや妾ゝ御身と偶ふゝ扨置て顏見る事も限りとおれり　令「其ゝ又何故ゝ、と仰天すれば、君「情々無いゝアの惹羅莫どの令我父の命ゝ代りて御身との中を截き侍り。令廣ゝ眼を圓くして「ナニ惹羅莫……が那の坊主が御身ゝ然る命令をる權ゝ有るまじきゝ又御身も何て彼如れの命令を拒まで受々玉ふ　君「否那法師ゝ我父の歸依僧にて一切の事彼が忠告のまに〳〵爲玉へば彼ゝ否と言れてゝ其迄なり　令「ア、御身も……御身も亦餘りゝ無情おらゞや些ゝ何とか考へて小生ゝも望を有せ玉へ然らば我等此より直ゝ力査殿の跡追掛て父御の口より結婚の約束を取て來ん　君「否其ゝ益し無益ならん我父も御身と婚姻を否むと云ふゝ、と言ふを聞て　令「扨ゝ御身も我等を嫌ひ玉ふかゞ、御身が嫌と玉ふ以上ゝ是非もなしさりとてゝ御身れ心も餘り變り方の早からずゞ斯らば最初より生強おる約束をし玉ゝぬが好らんものを……ア何と申をも愚痴の至り緣の切れたる人の目よりゝ左こそゝ女ゝしとゞ笑ゝれなん、さらばモウ逢む參らせぬゞ、然らば、とて去んとするを　君「アレマア少し待ち玉へ御身の腹立い無理おらぬ

が其には種様の縁由が……令「イヤ、其は承はる迄も無し畢竟那の法陣が斯る慘酷なる命令を下せしも我等の素性の分らぬより此身を卑めての故おらん又御身の父も矢張素性を……。君子丹は身の悲しさと苦しさに先の警戒も打忘れて　君「否御身の素性に就ては我父が……。令虞は聲を暴げて「ナニ父御が我素性を……其は何を以て左は言はるゝぞ、と一歩跡へ踏み戻る時惹羅莫は吹一吹して此は座に入れば君子丹はハツと思ひて口閉る、令虞は惹羅莫を疝と睨つゝ「惹羅莫どの我等が此席を去るとは遅きを怪まれお勞苦利令壌は其許の勘告お隨はれたり此が我等が訣別なりと言も敢ず君子丹に悄と目禮して靴音荒く出て行く

●第廿五回　戎、麻土奈德將軍

此日（日固遯が此府お入り、令虞が君子丹と縁を切し日）の夕方畢利豪卿部下の騎兵百五十騎を戎麻土奈德將軍引卒へて曼丟多に入来れり蓋し畢利豪卿は此時齡傾き身体又た羸きたれば自ら先鋒お進まを馬車にて親王の御後を押へ打立つ事とおれるなり斯て麻土奈德將軍は貌刺古伯兒街なる大旅館を陣營と定め速かに打纏者を出して明朝一千人の兵士當府に參着すべし就ては食料品一切を府外に輸出すを許さずと厳示さる抑も此騎兵の一隊は高地の軍中お有名の軍隊にまた其兵士は皆土豪紳士より成立たれば

服裝も美麗にて馬も亦た駿逞おり斯る精兵の入府おれば市民は皆我先にと見物に出て且は其陣に馳加はる物も多のらんと思ひしお左は無くて極て淋しき入府なりしは想ふに先刻日固遯碧蓮等が先鞭を着て金〻美人の威力お以て衆望を總攬せしに因るものおらん定お世の中は司命と云ふは財色の二個に在ると驚くお餘ある事と云ふべしされば又阿熱耳敦令虞は此日彼の法教師惹羅莫の爲に君子丹との中を割き早や世の中乃願望も絶て身一つに降る時雨乃雨隱騎さりし如き氣を慰めんと市中を漫歩きしたるが今親王の先鋒此府に入れり其軍隊の爽美なると誠に近頃の觀物なりと言騒ぐお如何おる光景お外おがら見んと其方へ足を向け二三の見物に紛れて陣營の近くまで来るに端おく具倫、別菲の父子に遇へり互に別後の挨拶して共に歩を進めたるが令虞が毎の勇氣おくて顔色も何となく暗愁を帶たる如きに目敏き別菲は遠廻しに其心配の縁由を探るになん令虞も今更ら秘しも成らを君子丹と云々の理にて本意なき別れを爲たりとの始末と告聞ゆれば別菲は何とか思ひ々んいと笑し氣に「世の中の女子は君子丹嬢のまに限るべうらを然る水臭き女子は先方よりも御身の方にて棄て玉ふが好らずや其式の事お思ひ屈をるとはさりとは御身も心弱し力め玉へ、と勵ましつゝ猶様々に氣を叶ふ愉快な談話を仕向らるゝに令虞も聊か此お心の慰められて足取も進む程に既にして陣

營の前に來りたり兎見れば大夫力査は今や後馳に乘附しと見えて尚白泡を噛む馬の轡面を自ら取り自己も額の汗を拭つゝ一個の服裝儼然たる將軍と物語して有りけゞ具倫は早く進み寄り「力査殿唯今御參着ありて候ゝ、と辭と懸れゞ力査は其と見て急ぎ會釋し又彼の將軍に對ひて云々と云ひ博士父子と將軍とを引合す是ふて此方の二個の者は此人は此隊の大將戎麻土奈德將軍なる事を初て知れり力査は斯く具倫父子とは懇篤の待遇を施せども令虞をゞ唯尻目とて見ていと横柄に目禮せしのみなるを別菲は見て不興氣とて「令虞君那の力査は一昨日御身に救はれたる身の恩を早や忘れし歟心得ぬ振舞をする人かな、と耳語ゞ令虞も「然り那男は健忘の病を得たるとや有らん斯る所に居るも益なしと獨語つゝ疾くも身を離して去んとするを將軍は見て「力査殿那壯者を御身は知らぬか扨も花やかなる少年にこそと賞贊すれば力査は溢々ふ「那は阿熱耳敦令虞と申す若者に候と云ふ麻「扨は御身を危難より中に救ひ取たる彼人ゝ然らば我等も知己となるべきにと云ひつゝ進み寄て手を握り又た力査を顧みて「御身も救護れ恩ある人なるに何とて餘所餘所しくは待遇し玉ふ力「老生は既ふ彼とは其恩を謝したり彼も老生をば忘恩者とは存ぜまじ麻「其は不審し唯今の目禮が謝恩の印に候ゝと難ぜれゞ令虞は益々快よからぬ突と前ふ進み出て「力査殿小生は足下に恩を受たる事ふし又此以來とも

足下の恩に預り度しとは思はぬなり唯先日の事は那切の事と思へゞ其にて好しと言放てゞ力査は唯澁面を作るのみ答をせゞ將軍は事の体の苦々しきに力査を勸めて更と仲裁を試むれども力査は首を掉て「否とよ彼には我等より言ふべき苦情あり其は今我妹（敦土列兒夫人）の家に立寄て妹と惹羅莫と云ふ法師より聞得たり但し一家の私事なれゞ將軍とは其理由を申すまじ。貝倫は傍らより「予は令虞の辨護するとは有れども此少年の品行正しきは我熟く知れり想ふと一時の事にして其が紳士たる面目を傷つくる迄とは非ゞ力「勿論然る破廉恥の廉には非ぜ麻「然らむ拙官とても滿足なり譬とも云ふ大事の前の小事なるに斯る事とて双方の氣を屑よくせざらんは然るべからず其は兎も角も別菲壞が御味方と見へて其胸廻を懸々玉ふは善むし抑も誰人より得玉ひしや別「先程碧蓮葛念昵壞より得て侍り麻「其は愈々好し拙官は彼壞の身上を悉く知れるが見給ふ如く容貌の麗し玉と浮男どもの何に角と云寄るも少なからぬが彼は一意と其情郎たる日固遜に守りて他念を出さず定と婦女たるの節操とは於ては非難をべき處なし別「左も侍らん妾も其操正しきは先刻一目見て之を知りぬ其事は既と此なる父なる者とも告け侍りと云ふ時忽ち市場れ方と當りて大鼓の音高く聞えて一隊の人馬現れ來れり人々は敵か味方かと見れば其隊の真先と馬を進めしは那の日固遜とて此と並びしは碧

蓮おり頻て此陣營ゐ前ゐ来りて一列ゐ兵を立て日固遯ゐ忙ゐしく馬を下りて將軍ゐ對ひて一禮す將軍ゐ喜ばし氣に「大尉天晴なり是なる兵ゐ皆足下の盡力ゐて集め得たるものなる歟、と云ながら笑を含て「但し力の多少を論せば足下よりも碧蓮の方多からん凡勇士の一蜀より美人の一瞥が人心ゐ感動を與ふると深きものなり、と打笑ふ其時碧蓮ゐ優かふ進み出て「將軍の御辭ゐ妾身ゐ取り恐入る外ゐ無しされども妾他人ゐ知らず此なる別菲壤を御味方の一人とせしゐ聊か誘るに足るべき歟就て令壤に願ひあり妾御身に一人の勇士を舉げ玉へと申せしが猶其外ゐ青白の色絲一丈餘を給び玉へ然らば妾帽子ゐ飾とすべ如なり 別「其ゐ勇士よりもいと易し此より我家ゐ来り玉へ。將軍ゐ益々喜び早々罷るべしと促せば碧蓮ゐ傍らなる日固遯ゐ悄と許容を乞ひ「然らば御同道申さんとて貝倫父子ゐ伴ゐれつゝ其が家へと赴きさり

第廿六回　思ふ同士

斯て碧蓮ゐ貝倫父子に伴ゐれて其家ゐ赴如即て案内ゐつれて別菲乃部屋ゐ打通れむ卓子の上ゐゐ籠ゐ青白の糸を入てあり兩個の娘子ゐ椅子ゐ倚り互に面白く打語ひつゝ糸を編て飾紐と製る中ゐも碧蓮ゐ殊ゐ心限なく已が身上の事を語り聞え其身が幼稚くして母ゐ訣れ父ゐ手一つゐて此十八年の春秋を妻西隧(蘇格蘭)の山中ゐ送りしが今年の

夏大尉が兵を率て巴西ゐ来りし時風とせし垣間見より言寄られ遂に此戰ひ果たる後ゐ妹背の語ひを爲べしとまでの契約を結びたり斯て又虞拉德西麻の勝軍の後壹丁堡ゐ移り住みしに大尉ゐ此の國(英吉蘭)へ来よとの使を越したれば妾も相見たさの其折なり戰爭の怖さも忘れて一所になり遂に當府へ迄も連立て来りしも此上親王ゐ御運目出度倫敦ゐ御馬を入れ玉ふ日にゐ妾も愉快く彼都の見物をせんと思へべなり此事都府ゐ育ち玉へる御身の目ゐゐ女子ゐ似氣なき大膽者と思されんが其ゐ幼少より山中ゐ人と爲りたる身の德にて馴ぬ旅路も思ひしよりゐ疲勞もあらぜ結句思ふ人と打晴て連立ち歩くが何寄の快樂に侍り抔物語りて又た言ふやう「妾が情郎日固遯ゐ御身も先ゐ見給ふ如く容貌も憎うらぜ又其心ゐいと親切ゐ侍るゐし勿論妾も亦氣を注て力の及ぶ限り其公務を手傳ふが此等の事互の親實れ試驗となりて今ゐ二人の愛情ゐ石ゐも金にも較へ難しされば御身も世に麗しき御粧ひゐて在まを母何人と往末の契を結ばれ々ん其殿の御姓名又た御樣子の床しさよ概略ゐても苦しゐらず悄と妾母聞せ玉へ 承ゐり度くこそ、と云ふゐ別菲ゐ打笑ひて「令壤異ゐ問を起し玉ひて妾を答に苦しませ玉ふゐ御身が の王ふ如き人の世に在らば左こゐゐ嬉くも樂くも侍らんが不束なる妾が身ゐ引殘されし夏霞薄き緣と唯つべき人だゐ無し 碧「否々其ゐ物を隱み玉ふにこそ先程那の陣屋の

前みて御身と立並びて居玉ひし若き殿の容貌の氣高き擧動の男らしき妾の日固遯も立優りて見え玉ひしに、斯る殿と何事ぅの約束し玉いぬ事の有るべ丸や、妾一目見て疾く推したり、包み玉ふに罪いと深し早々打明て語玉へと急立られて別菲いサと面を赧め「其い那の阿熱耳敦令虞殿の事なるべきぅ……　碧「如何ぉも其名ゐり將軍乃爾呼び玉ひしにて妾も知れり……サア那方とい何時より何と約束とし玉ひしぞ、早く其事を打明て妾が情郎ぱ日固遯とも……。　別菲い令虞の話頭を他ェ轉ぜんと思ふ最中碧蓮の辭尾を幸ひと透さぉ狙込て　別「其の日固遯殿ェ品行の短所い侍らぬ歟。碧蓮い風破と此ェ来て「ナニ短所とや決して〳〵日固遯にい一個の短所だも有らぬぉり　別「吝氣深くい在さぬ歟　碧「吝氣……然り吝氣い深ゐらぬふ有ねども其い全く妾を愛をる親切の一端と見做すも好ぅらん歟、其い妾が或る少年と物語り抔する時い直ェ吝氣と起し侍り　別「然らば御身い他の若人と話說おど爲玉いぬ歟　碧「否彼人の吝氣が怖けれと て出會ふ人と談話せぬと云ふ譯ェも往ぬが……扨其に就て妾度彼人の機を損をるい大佐の林駝青と云ふ人なり、御身も先刻見られしぉらん妾が馬より下し時より御身に伴いれて来りしまで眼も放きずェ妾を見詰し那背の高き士官の男……　別「然らば顔の薄桃色ぉる美少年にや　碧「然り其美少年ぉり彼其容貌の美しき丹似ぉ心術醜しくて妾

が情郎あるを知りぉがら何角と言寄り或い指鐶、飾花と様々の物と贈り越せども妾一度も此を貰ひし事侍らぬなり　別「さる恥知ずの男ならば刻て〳〵刻附て遣り玉へ然らば後にい眼立て御身を慕ふ念無くおるべし　碧「妾とても左様せんとい度々思へど彼い我が畢利豪卿の部下の士官ェて然も幅利ぉる大佐ぉれば彼奴の氣を蒲く損ぜば妾が情郎の身上にもやと怯みの出て嬲さを耐へて不機嬲なる顔も見せぬぉり誠に此世い苦の婆婆にころと覺えず涙を押拭ふ噫斯る美人に此の心配させ又此の瞎涙を拭いする日固遯も亦さ好男子の稱ェ恥ずと云ふべし

●第廿七回　林駝青

扨も碧蓮い貝倫の家に在て別非と差對ひに紐を編つゝ稍樣ゝの事を語ふ隙に日い暮たり燎てい迎ェ来つべしと約したる日固遯い何故ェや未だ来らぎ兎角する中夜い早や九時にも近くぉれば眼乞して已が旅宿へと立歸る其途筋の川沿の家乃軒下ふ佇立る一人の男あり隈ぉさ月影ェ透し見れど顔い見えねど確ェ軍服を着したり扨い日固遯が迎にとて此所ェ待受たるェやと思へむ心嬉しくて足を早て近づき寄り熟視れば思掛なき彼の横戀慕の大佐なるェぞ碧蓮にアナヤト驚きて駝拔んとをるを林駝青い「先づ待ち玉へと確かと抱留め「碧蓮壞驚さ玉ふぉ予なり大佐なり林駝青なり今日御身が貝倫の家

み行くと云ふを先刻見留め歸りに確ふ此途と戀にはなまじ供をも連ず寒い川風に吹曝されて一時餘も待たる甲斐ふ此所で出會しに重疊なり、コレ情ないぞや〳〵今迄盡す我が信實を御身も定めて知り玉はんに那日固遜奴に情を立て風に柳の那邊つかぞおる樣でならぬ樣な底拔太鼓の待遇に餘ふ人を痴呆にしたる撥の當た所爲とい思さぬ歟然ども夫にも腹を立ぞ今宵に奴めに用と言つけ他所へ遣ての拔懸に我等が兵法の奥の手なる鍔詰合の有無の一戰此方が爲にに昆伯爾の大軍よりも強敵なる御身が貞操の堅城を陷いれて奇功を奏したさの計略なりサア斯う帷幕を明をからに否と言ふても容捨いせず早く奴めを思ひ切て我等ふ歸降の歎狀を送り玉へサア此手を握り玉へ、と權柄づけの無理難題を憎さも憎しと碧蓮に眼眦を吊と釣上げ「仇厭らしい其口說を妾聞く耳に持ち侍らぞ日固遜と云ふ契約した情郎の有るを知おがらの横戀慕妾を左樣な浮氣女と思ひ玉ふかサア疾く此所を放し玉へ、と其手を搔退け遁んとするを林「ドツコイ遁してなる物の左樣片意地の一遍計りが女の道と云ふでも有るまゝコレ碧蓮壞心を沈着て無く聽さ玉へ御身が思ふ那の日固遜も我等の白眼で睨まれたら一生大尉で朽果るに愚な事當時將軍(畢利豪)の御覺目出度き此林駝青、一言の羅織方で活をも殺をも此方の手に有ると云ふを知れぬ歟情郎可愛と思ひ玉に〻サア其否と云ふ同じ吉で、オー

林駝青可愛し、と唯タ一言云ひ玉へ……ヤ是程に理を分ても首のみ捧るに扨に何でも否なのか、否でも有れ應でも有れモウ斯う成ては腕力でもと双の腕に力を入て矢庭に其場に押屈めんとする体を見て此方も今に一生懸命其手を捩放し突退て又立掛るを搔潛りさま欲が腰なる洋劍を腕操り取り拔放して切附れば林「ヤ此女郎小癪な腕立覺悟せよと勢ひ猛く落たる鞘を拾ひ取て二打三打纖弱き女子の爭で敵にん忽ち刀を打落さるゝを此方に得たりと踏込て頸筋取て地に押附け足もて刀を搔寄ながら林「可愛さ餘つて憎さが百倍其程淫太き根性骨を輪切にせんか竪に割んか汝が慕ふ日固遜奴も追つけ此如く手料理して跡から冥途へ立せて遣る其を樂みに往生せよと罵りつゝ刀を擧て雪より白き女の胸元柄も徹れと刺んとす。此時傍の小路より走り出たる一個の壯佼今林駝青が刺んとする刃持つ手を取留るよと見えたるが引搦ざて三間餘拔飛せり不意を喫ひし林駝青にワツと驚き起上りしが此方に立たる勇士を見て立敵にんとする擬勢も無く其儘橋を横手に取て何方とも無く逃失ぬ碧蓮に思にざる援助を得て夢かと計りに喜びつゝ起上る時月光に夫と見てヤ「御身に日固遜どの　日「左樣いふ御身に碧蓮なるかシテ又彼奴に　碧「林駝青　日「扨に日頃の戀の意趣歟ソレと知おば今此所で一刀に切も棄べきものを遠くに往ゞと逐んとするを碧蓮に遽て引留て「其腹立に道理なれども

幸ひ此方に怪我も無し殊に今彼を討果し玉ふとも證據おくてゝ喧嘩させられて御身も命を失なはれん那程ゐ懲し遣り玉へば此後手指も爲まじきにいざ夜の更ぬうち連立てと云るゝも無理ならず胸に餘れる怒を抑へし日固遜ゝ碧蓮の手を引き其前後の模樣おど豆に問もし問れもしつゝ己が旅宿へと立歸る蓋し此時日固遜の詰ゐ據ば先に林駝青の口中より出せし如く此夜本營よりの使として或る所へ遣れ其事を果して後の歸り途に測らず此場に出會て我が情人の危難を救ひ得たりしなり然るにても世に怖しきは權柄ある小人と戀の仇なり今此兩者と合併たる林駝青と日固遜ゝ關係如何おるべれ歟自ら後回に至りて知る由あるべし

●第廿八回　親王の入府

其翌日の旦未明に一隊の騎兵の護衛せる四頭立の馬車此府に到着せり此車中まるゝ親王の軍中にて孰是も名望威權ある高貴の人々にして第一ゐ畢利豪卿第二に戎馬都禮第三に大夫當麻士談利男第四に愛快愈侯等おりき其中畢利豪卿ゝ名譽尊敬とも北軍第一の人にして此回の討入にも親王の御先を承てり昨日第一先鋒の上將軍として此府へ來着ある筈なりしが病後にて身体自由を得ず仍て馬車に援られて今日此所に來られしなり又馬都禮ゝ事務を總理するの材ありて親王の爲に書記出納の事を掌どり大軍の被

服食糧をして能く缺乏の患無らしむ又談利男ゝ博文廣才の譽ありて親王の顧問に備り愛快愈侯ゝ佛王路易十四世より巨額の軍資と三千の軍勢とを賜し來れる貴客なりきれば其服裝ゝ何れも善盡し美盡して胸に懸たる勲牌の傍目炫く輝くにも其當世の人傑たり國家の柱石たりとゝ見られける斯て此馬車伯爾西貌剌屈の旅館に著すれば當麻士奈德將軍屯禮大佐を初め日根、貝倫の兩博士も來りて其無事の着を祝しぬ時に畢利豪卿ゝ人々に對ひ、我が愚軍ゝ前後二軍に立分れ其後軍をば親王親ら率ゐ玉ひて後刻入府あるべければ急ぎ御營を點ずべしと有るゝ當麻士奈德將軍等ゝ心得て頓て市場街おる晩健孫氏の邸宅を御營と定め其他諸將校等の陣營をも夫れ〳〵に割當たりさる程に北軍入府の風聞全市中ゐ隱れ無れば市民ゝ其打入の儀容を見んとて悉西に奔走す勃土列兒夫人の方にても此專を聞て歡喜に堪ず、多年病苦に惱めらるて折節ゝ情おき玉の緒よと嘶しも又命あればこそ今日の目出度き御打入をも見奉ることを得るおれとて夫人ゝ先づ涙を拭ふめり頓て其椅子を門の中央に昇据させ惹羅莫上人を初に那烏遜、莫尼加、君子丹、又た大夫力查勞苦利も其前後に立添て御軍遲しと待掛る程も有らせを陣押の太鼓地を響しく北軍の前軍列を整へ銃槍を日光に輝かして現れ來る此隊の大將ゝ數度の北地の戰場に勇名を顯ゝしたる俊多羅撤亂。戎日麻士利の兩將軍にて威風凜然四邊を拂

ひ馬上優に乘をしく吶と擧ある見物が蜀采の聲の中に靜々と打もく行く前軍の大將が威貌既丹斯の如し後軍の親王の風采は如何あるべきと人々は益々動搖き堅唾を嚥て待間程なく再び喇叭の聲太鼓の響人の耳根を動して早や親王は數千の大軍を前後に率へ白き馬の太く逞しきに鞍置せ高貴の官人五六騎を左右に立せて打ち玉ふ御年齡は二十五六にや成り玉ふらん面の色飽迄白く光潤にして眼冷しく威有て猛からざる御骨柄一見人をして敬愛の念を生ぜしむ人々は之と見て天晴いみじき君王かな此こそ我皇よ大英國の天子よと感歎の聲を放ちて大衆一齊萬歲を唱へ參らすれば親王ゐも御氣色殊に麗はしく頻て勃土列兒邸の前に掛らせ玉ふ丹力査は御前に進みて恭々しく拜禮す親王は之を顧みて答禮ありしが何物か御目に留りけん御側なる達巴陣侯の耳に附て耳語き玉へば侯は心得て全軍に止レと號令を其時親王は徐に馬より下り玉ひ力査に對ひて「此の人々が昨日汝より聞え上たる勃土列兒夫人其娘莫尼加、慧莫士那烏遜、慧羅莫上人、又汝が娘君子丹ゐ你等子が士都華土の家の爲に無二の忠義を盡すと近頃神妙の至りなり猶此後とも頼み思食を旨を宣せて再び御馬丹召し市街の方へと進み玉ひ彼理髮師の悉德兒が家の前を過ぎ玉ふ時斯と見たる悉德兒は躍て用意おし置たる樂隊を指揮し家の内にて一齊に王家恢復の曲を奏せしめ急ぎ店頭に走り出て拜禮す親王は愈々御

機嫌斜ならぜ夫より畢利豪卿等の先導にて設けの陣營へ着せらる此時市民は陣門の前より群れ來りて、慧莫士三世万歲、查兒斯親王万歲と三度祝聲をぞ擧げける斯りければ此曼丟多一府中に今は御敵一人も無く言甲斐なき巴諾伯廷の官吏どもは皆御營ゐ馳參じて歸降の旨を陳述すれば親王は一々其等に御辭を下され頓て此營中にて勝利の祝宴を開らせらる此時日根貝倫の博士達は言に及ばず遼て御味方に心を寄たる人々は皆此席に列ありたるが中にも別て阿熱耳敦令廣は親王の御心に協ひて自後御營に停りて左右に仕へ奉つるべしと宣せ玉ふ猶此折日固遜等が先陣の功を褒め兎士禮大佐が部下に良尉官を得たる事を賞し玉ふなど種々ありて御出發は明朝との号令をも下させらる斯る上下十二分の滿足を以て充盈たる其中に令廣の不平は如何ぞや今迄は百年の末迄もと思ひたる君子丹も父に連られて此席に入り我と親しく出會ども彼は如何にも餘所々々しく唯後目に見て目禮せしのみ情緣の斷つ處面目變ず昨日の青眼は今の白眼と定ゐ是非も無況世態あり

●第二十九回　食堂の口諍

此日の祝宴終りし後夜に入て又會食の事あり其事の初るに先ちて親王は竊に令廣を召され「既に汝等の忠勤に依て一兵に血ぬらずして此府を御領と爲すを得たれども猶

市民の思寄の上まつさて心許なき所なさに非ず仍て予ね今宵會食の終るを待ち汝一人を隨へて府内を微行し人心の歸嚮如何を見んと思ふなり汝宜く其用意せよ但し此事努人にお語りゝと思すれば令虞ね其寵遇の辱けおきを謝して此君の爲と有らば身を粉まに粹きても惜まじとぞ思ひける斯て會食も初りぬ從軍の士官綺羅星の如く兩側まに居並びて引受け〳〵口をも休めず大盞酒を喫し大塊肉を啖ふ素より禮讓の末節に拘らねぬ軍人の會合おれむ醉て號ぶも有り飽て寢くも有り兵略を論じては食卓を撲き戰功を爭ひてね器皿を飛す傍若無人の振舞も中まゝふ頼みある中の酒宴とて親王の御悦氣大方ふらず此時屯禮大佐ね大夫力査と恰も對面ふ坐したるが大佐ね今しも後れて入來りる令虞を見て此方へと傍に招き「御身の功績ね軍中相傳へて一人も知ざる者なし未だ御軍まに隨ねれずして既まに此功名あり此よりね更まに一層の忠誠を抽出て目覺しき手柄を顯されんこそ望ましけれ且つ我君まも健氣しき壯佼を得たりとて御悦びも斜ならねね、と賞讃すれば令虞ね恭まゝしく其褒辭を謝し又遥ふ力査まに對ひて禮を施すに彼方ね微然として唯頤もて答禮するのみ斯て益まゝ酒盞の數も重なるまに力査ね折々令虞を睨み附る眼の唯ならず彼が此席に立交ねるを不平に堪ざるが如くおれむ大佐も自らも心中ふ快よからず密まに令虞の袖を引きて「大夫力査ね此席まにて御身を見ることを好まざるもの、如

し勿論昨日の口論の樣も竊ふ他の人より聞得しが此ね抑も如何なる原因の有る事ふや令虞ね先刻より力査が已まに仕向る擧動を堪難く思ひし折おれば いと匆卒に「何の故まや小生も知らぬ但し既と心附たる事の候思ふに彼ね小生の素性まに就て何か秘密の事情を知り其が爲に此不快を來したるものおるべしと答るを耳敏き力査ね早くも聞咎め「屯禮大佐まに申をべし唯いま貴所ぞ傍邊なる少年が其身の素性まつき何ゝ老生の存ず知たる事ある如くまに申せしが老生ね斯る者の素性抔をば未だ曾て聞し事だも無く候其旨貴所より能く申し通じ玉へと苦々し氣まに返答す令虞ね之を聞て今ね堪らず突と進み出て「大夫勞苦刹、我等の素性を知ぬおらば知ぬで好し然らば何故小生に先より無禮を仕向らるゝぞサア其仔細を承ねらん、と詰寄るを力査ね驚ともせず鼻の尖まにてフゝンと嗤ひナンの小癪おる小童奴と言ぬ計りの顔色して取合ぬ大佐ね令虞の決心せし面色と見て事もや起ると遽たゞしく押隔て手を以て制して「靜まれ〳〵其ま此席にて言ふ事ならず機あり〳〵と目を注すれば令虞も大佐の心中を推して是非おく口を箝みたりさる程まに人まゝ既まに醉ひ且つ屢て十二分の歡喜を盡したればいざやとて罷り立つ時大佐ね力査を暫しと呼止めて一室まに誘ひ故らまに辯を低めて「大夫力査、唯今御身が公衆の前まに於て小官が部下の士官阿熱耳敦令虞を辱しめ玉ひしね何事かの意趣ありて歟、但し

ゐ又當座の酒興歟、酒興の上との玉ゝ深くゐ咎めじ唯彼に一言の謝罪の旨をやされ度しと言ふ辭を半分聞き力査ゐ大口開て呵々と打笑ひ「何事かと存ぜしに那の猴子奴コ謝罪せよとや近頃腹が捻れやまぞ老生ゐ彼等如きコ謝罪すべき過錯ゐ未だ致しやきぬ　屯「謝罪の廉無しとやさるれば是非も無しされど彼ゐ貴下コ遇て作存應の樣を承むらんと望み居れり成べくゐ明朝作面會下されよ　力「否其義も出來やさぬ氣の毒ながら謝絶りやす　屯「其ゐ又何故か　力「何故とゐ何故、屯禮どの拙者貴殿コ其理由をやし釋くべ充義務ゐ持ぬ、嫌とやせば嫌で作座る。飽まで輕蔑む無禮の語氣コ屯禮ゐ赫と急立ち「コレ力査どの屯禮も男兒で作座るゾ、謝罪もせぬ面會も出來ぬ其理由もやさぬと言れた儘で引込てゐ拙者今日より武士が立たぬ、部下の恥辱ゐ此方の恥辱、いざ此上ゐ尋常に決闘致さう　力「ナニ決闘とや、ウァハ、、、、否出られさりやされたり如何にも〳〵決闘御所望とあれば拙者決して辭退やさぬ然らば拙者戎士敦君を證人と致すで御座らう御邊も一人立合人をお頼み召され　屯「言ふまでもや及ぶ、斯く契約れ極し上ゐ明朝此府にて力「如何にも明朝心得た、シテ其得器ゐ　屯「勿論真劍　力「近頃興がる事で御座らう、さらば其折り　屯「間違へ召さるな。豆コ武士の意地と意地睨へ合てぞ別れ往

●第三十回　必死の危難

斯て會食も果たれば親王ゐ先コ令廣コ宣えせし事の如く怪しの姿コ身を變し肩掛を頭より被ぎ玉ひて御營と忍び出で令廣の來るを待玉ふコ未だ來らぬ行とゐ無しに其邊を徘徊し玉へむ街々コゐ球燈を點じ烟火を打揚げ親王萬歲の聲ゐ家毎に起りて只管士都華土家再興を歡喜もる体なれば親王ゐ御心嬉しく覺えず五六町も來り玉ひしと思ふ頃茲コ往來の群集に紛れさる三人の曲者あり親王の御姿を熟々と見て居たりしが其中の首領らしく見えさる者二人の手下コ何事をか耳語き示し矢庭に腰より拳銃を拔出して親王の御脊に差附々アハヤ切て放さんとする折も好し横手の方より兩人の者遽たゞしく走せ來るに驚きて彼典者ゐ又群集に紛れ早くも其影を隱しさり其時走せ來りし二人の中一人の士官ゐ何心なき親王の御肩ゐ手を掛て引止め「汝ゐ何者ぞ怪しき風体で徘徊もるゐ、察する所昨今當府に入り込たりとの風聞ある巴諾例方の間諜あらん先づ其面を掩したる衣を取れ、と搔繰コ取んと手を懸るを見て親王ゐ驚き玉ひ「コレ粗忽あせそ予ゐ然る怪しき者ならぜ面を隱すゐ仔細あり其手を放せ聊尓すお、と爭ひ玉ふを又一人ゐ女の聲して「其仔細と云ふ仔細こそ怪しゝれ言葉と云ひ風俗と云ひ我が北軍の人コあらず濟り玉ふお早く此奴を引立まゝ親王の御陣に拘充玉へ「應合點るりサア曲者キリキリ歩べと左右より腕を取り詫るも聞ぜ拘立んとす此騒動を聞附たる近邊

の市民は一同に集り来りて「巡邏の士官が倫敦の間諜を捕へしとや用捨をするな早く親王の御陣へ連れ往け若し手敵せぬ我らが打寄て撲倒すべし、然り軍の血祭に撲殺せ〳〵、と競ひ掛りて唯呆れ果て立ち玉ふ親王の前後を取巻たアハヤ拳を下さんとする其處へ群集を押分け駈附たる令廣は其と見て仰天し「人に早まるな此は間諜に非らぬ〳〵と制し禁え傍に立たる男女を見て令「其なるは日固遯に碧蓮孃か、扨は御身等が取止めやせしか、此は決して間諜には非ぬ、と云ひつゝ其耳に附て云〻と耳語は兩人は吃驚し身の過失に辭も無し見物は此体を見て「扨は間諜に非ぬ人違なりと呼たりて又散〻に立去れば日固遯碧蓮は親王の御前に跪づきて「御微行とは聊うも存ぜぬ全く敵方の間諜と見誤り奉つりしとはやせども苟にも玉體を苦めたる身の大罪には陳辯の辭もひらずはいざ令廣どの我ら兩人に繩打て大不敬の罪を正し玉へと腕を廻せば親王は笑し氣に「否〻決して苦しうらぬ其方等が内外に意を用ひて非常を警る心入こそ賞するにも餘りあれ但し此事努人には語るべからず秘すべし〳〵と宣せて立んとし玉ふを日固遯碧蓮は暫しと留め「身の罪を容し玉ふのみならぬ御賞賛の御辭は近頃恐れ入て承はりは但し只今もやすく昨今南方よりの間諜夥多しく當府に入込て尊体を謀り奉つるの由其間も隱れなし斯る中にて御一人は御微行は最も其恐れ少からず疾く還

御もあるべくや然らば其等路次の警衛し奉つるべしと奏上するを親王は打笑せ玉ひ「汝等の遠慮其道理無しとせざれども予が斯る樣にて行くを人〻は或は間諜とこそ怪めよも此國の皇位を爭ふ親王とは見咎むまじさらば中〻に心易し心配は無用なりと宣ひて令廣を携へ足早に行過ぎ玉ふを然りとも餘所ながらの警衛せんとて日固遯碧蓮は御跡と慕ひたるが如何に紛れしの御後影を見失ひぬさる程に親王は日固遯等の附隨ひ奉つる事もやと思へば早く令廣を率き小路へ避て夫より市中を殘る隈なく徘徊し玉ひ其夜の夜半頃御營の背面なる廣き原へ出て玉へり忍びての還御には裏手の塀を乘るこそ宜々れとて其方へ進み玉ふ時何時の程にか埋伏しけん先刻現はれたる三人の曲者草原より躍〻と起立て二人は矢庭に親王に飛懸り其場に引倒しを呼ばんとし玉ふ口を押へ肩掛を取て口に食せ用意の繩を引しごきてぐる〳〵巻に搦まし奉つれり令廣は斯と見てアナヤと驚き走り寄んとするを今一人の曲者が大刀と閃かし真二つと切附るアハヤ、令廣は見る隙に此方は目敏く身を開かし空を撃せて腰刀を拔手も見せぬ唯一打に切伏たり前の二人は之を見て同じく刀を拔そめ分挾みて撃んと進むを令廣は必死の勇を奮ひ右に當り左に支へて爰を先途と爭へども彼方も覺えある者なりけん打込む太刀に隙間を有せぬ心のみ急る令廣の腕は此時次第に衰へ行きていと危くぞ見えにける

第三十回　南軍の間諜

茲に又日固遜碧蓮ハ親王の御後影を見失ひ其處か此處ニと市中限なく尋ね廻るに尋る親王にハ得遇ひ奉つらで例の俠客當麼悉德兒ニ行會たり日固遜ハ急ニ聲掛け「悉德兒どの御身ハ今夜忍び姿の官人兩個を往来にて見受ずやと忙しく問ハ悉「如何にも小生見受たり其ハ直ぐ此先なる曲角の邊なりしテ彼等ハ何者ニや　日「何者とて彼方ハ親王と令虞氏なり御身も知る如く南方の間諜此地へ多く入込たる昨今の事万金にも換難き御身を以て御微行ハ勿体なしと諫め奉つれども聞入れ玉ゑず仍て餘所ながらの警衛をと心掛しニ先程御影を見失ひたり然るニ御所在の知れたるハ勿怪の幸福此より御跡を急ぐべし御身も来玉へとて走り出れバ悉德兒も碧蓮も後れじと急ぎつゝ彼野原に来る時忽ち太刀打の響人の掛聲手ゑ取る如くニ聞えたりスハ事ありと日固遜ハ十歩を一歩と宙を飛て其場ニ近づき誰かと見れバ令虞ゑり「扨ころと腰刀をスラリと拔き令虞どの日固遜ゑり助太刀をるぞと聲を掛て一人の敵を大袈裟ニ切倒せバ今一人の曲者ハ驚き怖れ大刀を引て逃走るを令駈附たる悉德兒ハ「汝逃ぐとも遁さじと呼りつゝ何方迄もを逐て行く令虞ハ急ぎ親王を扶け起し縄引解バ碧蓮ハ傍らに寄て介抱し參らする其時親王ハ日固遜等と見玉ひて大息吐き「宵ゑ汝等の諫を用ひず斯る必死の厄難に陷

りしハ自業自得然ながら予此所にして討れなバ誰か先考の遺志を繼て土都華土家恢復の軍を起すべき思へバ此身の不孝の罪ハ海岳も啻ならぬゑ其を助けたる令虞日固遜等の功ハ亦萬古卓絶と稱をべし嗚呼先考身の罪を赦し玉へ上帝また我家に猶も冥護を垂れ玉へと祈念あれバ人々ゑ斯る時ニも先王の御事をつゆ忘れ玉ゑさる親王の御至孝を感じける斯る所に市場の方より松明餘多振照しまゑ屯禮、戈士敦、加瑚等の諸將校手勢多く引具しつゝ御迎として參向す盗し親王の御陣ニ在しまさゞるを知て諸方を尋ね此所ゑて行會ひ奉つりしものなるべし其中ニも屯禮ハ我が部下の士官阿熱耳敦令虞が此場ニての手柄を聞知りて喜ぶと大方ならず我身自ら此の榮譽を負たる如くいと幅廣く振舞けり斯て人々ハ「夜陰とやし斯る所に御座あるハ恐れ多し疾々還御をと勸めやすその折柄再び多くの松明の影此所を指て向ひ来るに人々ハアハヤ敵の間諜等が黨與を集めて逆寄をるのと驚く中に親王ハ騒ぎたる氣色も在さゞ「那ハ悉德兒なるべしと宣ふ端ニ早や近づき寄る群を見れバ果して當麼悉德兒にて其右手ニハ唯今逃さる曲者の一人を高手小手に縛めたる縄の端を取詰たり其時悉德兒ハ御前の此方ゑ跪づきて「小臣此なる曲者を逐て聖安寺の前まで至りしに忽ち其影を見失ひぬ依て其近邊なる手下の者を呼集め所限なく捜索してひしニ此奴那寺の鐘楼の陰に身を潜ましく小臣等の近

づくを見るより又もや逃んとしてゐひしを矢庭に召捕て斯く引立て參りてゐと言上す親王い彼の曲者を御座近く召据させ松明の影に兎見角見玉ひて「あゐれ遲しき面魂かな這者尋常の細圷にては有べからず屯禮疾く其實を吐せよと宣ふを曲者い、暫くと止めて忽り呵々と冷笑ひ「屯禮、足下の鞫問を待ず予自ら親王に申べし既に斯うなりたる上い隱さもせず隱しもせぬ予い實に討手の大將昆伯蘭親王の麾下の大尉にて威亞と呼るゝ者なり此程我が親王（昆伯蘭）重賞を懸て死士と募り殿下の御首を得ん事を望まるゝに依り予い部下の兵士ゐて武勇最も勝れたる兩人の者を語ゐ先日より當府に入込て殿下の着陣を待受け申し猶八方に耳を飛して其動靜を窺ひたるに今宵測らずも市中を微行し給ふ由を傳へ聞き天の與と途中に埋伏して既に本意の得遂たるに殿下に御運目出度して不意き援助に得給ひ危き御身い恙なくして却て我等い此態に成り果たりされば殺すとも活すとも御身次第此方決して怨む所無しトハ云へ若し殿下我を容して元の陣に歸し給はゞ御味方に莫大の益あらんと憚る所ゐく言出る狂人々い、憎き奴めの廣言うな物ゐ言せそ引出して首と刎よと立掛るを親王い暫しと制し「其方の必を味方の利益とい何事ゐ其仔細を云へ道理あらば容すまじきものにも非ずと宣へば威「されば候今御敵なる我等を容して歸し給はゞ誰か殿下の仁德を稱揚し奉つらざらんや然

らば唯さへ年來の暴政に倦果さる全英國の人民い忽ち巴諾伯ろ朝廷に背き招のざるに御味方に馳加はりて殿下の御頭に再び士都華士の御家の大冠を被らせ奉つらんと何の疑ひか候べき是一つ、又我等が命を棄て身狂挺して此敵地へ踏込たれば今も猶我將軍昆伯蘭い十分の信用を我身に措ゐ候べし然らば此儘我陣ゑ歸り其進軍の方略を聞出して竊に之を告參らせなば誠に目前ゐ御利益ならずや是二つ、此外にも猶種々れ御利益いいべゐが右二個ろ利益のみにても小臣を此にて討果し一時の御怒を晴し給ふにい万々増して候はずやと恐れ氣も無く論ずるを親王い熟々と聞給ひ「兩條ともに其道理無きに非ず但し汝が實心歸降して偽りを言ずと云ふ証據い如何に威「コハ可惜しき仰や候凡活とし活る物が命を惜まぬ者やい其惜むべき命を助られ再生の恩を受たる者が何しに仇をもて酬ひ參らずべき御疑ひも事に依るものなりと冷笑ふ其顏色を猶篤と見つゝ在せしが頻に首肯て　親「然らば汝の言ふ旨ゐ任せて汝の命を助くべし疾く罷立てと仰するを屯禮、戎士敦、令廣、日固遜、悉德兒も如何なるものにやと危みしが疾くとある令旨を黙すべきに非ず頻て其繩を切解けば威亞い腕の痛みを那方此方と撫摩りて疾くも去ず暫くして親王に一禮し南の方へと悠々として立去りぬ

●第三十二回　勇士の決鬪

屯禮と力査の二人は互の意地より遂に決闘と約を決し屯禮大佐は加瑠大尉、大夫力査は戎士敦大尉を證人と定めて其翌朝早天より本府の市外なる西特波土の廣原に出向ひたり是より先き加瑠、戎士敦の兩人は懇ろに調停の義を試みたれども彼の二個は互に其所存を主張して變ぜず兩大尉も此上は是非なし然らば撿分の役に當るべしとて此朝此所へ出張せしなりさる程に屯禮、力査、の兩人は各〻十分に身支度して圏子の中に進み入り互に帽を取り一禮して證人の掛たる暗號と共に刀を交へて切結ぶ屯禮は其齢壯く身材高く腕の力また強くして北軍中に聞えさる剛者あり力査も年こそ稍老され身材も膂力も屯禮に左計りは劣らず殊には平生負じ魂を以て全身を固めたる豪氣無双の武人なれば双方の精神は相匹敵して受つ流しつ撃懸る太刀に隙間も無く半時餘りも闘ひたるが此時屯禮が氣力は愈々旺て踏込み踏込み撃つ切先を左しもの力査も接應ひ難てアハや大佐が烈風の如き劒の下に冬の木の葉と散果ん歟と見る處へ忽ち馬蹄の音近く聞えて「兩人の者暫く待て屯禮刀を留めよ、と呼はる者あり誰かと見るに親王なれば立合の兩大尉は驚きて出で迎ふるを親王は戎士敦に襷と取せて馬より閃りと飛下り給ひ矢庭に兩人が切結ぶ太刀の中に身を容て押隔て「屯禮、力査、こは何事ぞや予は汝等を以て駿足とも股肱とも頼思ひ今回の軍の勝敗も汝等が忠の淺深に因て判るべし

と思ふ處に大事を控し躰を以て私しの意趣の爲に討果さんとは何事ぞやさる王事を蔑如にする不忠の者とは今迄は思寄ざりしに、と恨み給へば兩人もハツと恐れ入て刀を棄て平服す其時親王は辭徐に「此決闘の事の故は予熟く聞知れり片方を落すには有ね共力査此は汝が曲なり就ては其方改めて屯禮並に令虞の兩人に謝罪せよ此は予が汝に頼むなり、と宣はするを力査は信ぬ顔して「既ふ事故状知せ給ふとあれば今更改めて申上るも及ばぬ如何ぞも唯今の嚴命に依て屯禮には一言も謝罪を申べ紀が令虞には小臣より兎角の罪を謝べ紀廉を思ひ當らず此義のみは言をも待ぞ屯禮は此とおりて「否力査どの此事の發端は令虞よりおり斯れば足下が一昨日采欲に對しての無禮の旨趣又今朝彼に對面を拒まれたる其理由を承はらねば得こそは其場を立せじと再び詰寄るを親王は先づ待つべしと禁め給ひ「力査、予其方に問ぬべき事あり此方へ来れと片陰へ召寄つゝ、親「力査、汝は令虞の素性を熟く知り居ると覺えたり委細包まず予が爲ふ物語るべしとの不意の仰に力査はハタと行詰り當惑面に顯はして答へ兼れば親王と打笑ひ「汝は何ぞて物を慝むぞ然らば予倒つて汝に語らん、汝は欲が後見人ふは非らずやと、星を指て力査の面は忽ち赤くなり青くなり思はずも聲を震はして「殿下……殿下には抑も何人より小臣が心中の秘事を聞得給ひしぞ其人は何人に候ぞ。

親王は益〻笑て「其は何人にても宜し但し其事は真實か、と問給へば力査は稍暫く手と支へ首を低れ押黙りて考へ居たるが看る〳〵額より流る、汗は膏油の如し漸くして頭を擧げ先づ真實にて候……と答へ終り又暫くして　力「唯今其理由を申上べきには候へども事頗る他聞を憚る義に候へば此は後日好機を以て内聞し奉つるべし此義を許させ給へと云ふを親王は頭を掉て「否〻其説明は決して猶豫すべからず但し他聞を憚かるとの義なれば予は他人丹漏すまじきぞ後刻謁見の節竊に予に言上せよ又た其節汝が孃の君子丹をも伴ふべし　力「仰と否むは恐れあれども此義ぞ關して小臣が孃は何事も知り候はず　親「否其は別に要用あり尤も心配の筋ならぞ令廣に改めて引合さんと思へばなり、と宣ひて又辭と改め「今日の調停は汝ぞ於て聊か不滿足なるべきが此は予に盡を奉公と思ひて勘辨せよ何事も大事の前の小事ぞうし好く其意を得よと和め給へば力査は涙を流して「何しに不滿を存ぜべき既に一命をら君に捧たる小臣なるを我が私しの恥辱等は聊も顧みる所に候らはず　親「ホヽ神妙なり其辭にて予も安堵せり然らば此所にて免禮と和睦の握手せよ　力「畏まり候とて力査は此方へ來れば親王も御口を添へ給ひて互に宿怨は殘ぜとぞ握手の禮を施しぬ親王は欣然として御馬ぞ召し「兩人の和睦調ふ上は此より進軍の議に取掛るべし然らば兩人、別て力査は唯今の令旨を心

曼府の叛亂第八圖

得よを示し給ひて手綱搖線り御陣の方へと還御ある

●第三十三回　勢力ある媒介

此朝は曼丟多義勇隊の點檢あるべき旨昨夜を以て仰出され有しゃば親王には御馬を急せて陣營へと歸らせ給ふ其途にて惹羅莫上人は君子丹と莫尼加を引連れ此方へ來るに遇ひ給へり此人ゝは親王と見奉りて忙はしく路傍ゝ避々敬禮を施せゞ親王は馬より下て君子丹に打向せ「折節汝に對面しゐく思ひつるゝ好き所ゝて出會ひぬ我竊ゝ汝に告べき子細ありと仰はるゐ惹羅莫と莫尼加は傍ゝ避しが惹羅莫は又用事ありとて其場を去きり其時親王は聲を低めて「斯う云はゞ其方定めて驚くあらんが汝が父は唯今決闘致したり、サ、其驚死は道理ながら幸ひに父は無難ゝて追つけ宿に歸るべゝれば安心せよ。安心せよとは宣へども若ゃ彼人らと心ゝ思へば君子丹の身は中ゝ治らゞ」シテ其敵手は誰人にや若ゃ那の……。親王は早くも其と察し給ひて「否汝は心配する令廣ゝは非ず敵手は兎禮大佐なるが其は予が唯今調停せり但し其事の起因は汝が父の力査が令廣大尉（令廣は此時大尉ゝ登庸せられしと知るべし）は恥辱を與へ其を兎禮が兎に角と云るより事起りしと承知をべし勿論力査より令廣は對して十分說明すべ死趣意ありと覺ゆれば後刻謁見の節予親しく推究すべきが其折ゝは是非ゝ汝も同道せよ令廣ゝ遇して

自づから後事を處する旨ありと宣ふゝぞ君子丹ハ扨ハ早や彼事の疾くも御耳ニ入たるか夫に附ても御前ニて彼人ニ遇て何とか言ん慙ゐニ面會して其時情おくも接遇れなば世ニ恥辱かしき爲なるべし是ハ此所にて辭し奉つるに若くべからぞと思惟したれむ「仰を戻くハ恐なれども妾令虞ニハ些と會ひ難き仔細侍り若し強て會せ給ひて萬一御前にて不敬の事おゝ有んニハ彼人の爲ニも侍らず此義ハ平ニ御容捨をと辭むをば否と宣ひく「予ハ其事情をも熟知れり但し令虞ハ予ニ對して大功勞あり仍て予ハ彼が後來の幸福を得せしめんと欲す此義予が情願なれば汝も否と云ふべからぞを仰する折柄一人の士官馬上にて駈つゝ來り頓てヒラリと飛で下り親王の御前ニ踞づくを誰かと見れば令虞おり其時令虞ハ恭ふしく懷中より一書を出して「唯今將軍馬都禮より奏聞の旨ある由ニて此書面を渡さまてひと云ふ親王ハ封押披き讀終りて「宜し其意を得たり就て予ハ直樣陣營ニ歸るべし但し汝ハ予が供奉を爲すニ及ばず此おる勞苦刹壞を誕術して其家ニ送還せよ心得たるかと宣ハせつゝ再び馬ニ打跨りて御營ゟ方へと還御おる跡に二人ハ唯モジ〳〵底ハ解ても表面ハ解けず春の氷のいと冷さき令虞ハ面色を疏ぬ正して「君子丹孃作身ハ既に辭さへ替し給はぬ我等如き者ニ送られてハ大方ならぬ迷惑なるべし君命ハ畏きも此義ハ我等より謝絶るべしさらべと云て去んとをるを「先づ待

ち給へと君丹子ハ引留めて「御身が孃で在せばこそ其罪を妾ニ托けて難義を遁れんとし給ふならん好し〳〵御身が真實ニ孃なりとの給ハゞ妾後刻親王ニ拜謁の折此事を明白に申上て御身を叱らせ參らをぞや其でも否との給ふか、と押留られて、何が扨信實何で否なるべき今言たるハ浮世の義理且ハ御身が心底愛想を盡されたるか又片心ゐ毫ハ愛憐の情の殘り居るか其を測量する重鉛にこそと云ふ顔を半ハ現ハし半ハ隱し猶暗く無言なる令虞の有樣を見るに可笑く莫尼加ハクス〳〵と打笑ふにぞ君子丹も何となく極りの惡く令虞ニ花を持せんと思へば「令虞君御身の才氣と云ひ勇氣と云ひ天晴軍人たる資格と持て居給ふもの、往成ニ大尉との御昇進ハ誠に類なき御手柄なり殊に親王の御覺も一方おらず見え給へば此よりハ立身思ひの儘おるべしと譽立るを令虞ハ一切夢中にて「否小生ハ大尉の職も親王の御寵遇も嬉しからぞ唯或人の一瞥の愛顧を得ば夫ニて足れりと思ふおるも誠ニ儘ならぬハ浮世の中ゐてひと歎息すれハ君子丹ハ之を聞き覺えず目蓋をしばたゝきぬ斯る所丹莫尼加ハ遽たゞしく聲を掛け「アレ那處ニ又意地惡の坊樣が來りしゆや早く令虞君と逃し給へと氣を注るにぞ誰にぞと見れば彼の上人の惹羅莫おるニ令虞ハ實ニもと心附き惜き別を跡に遺して馬丹鞭うち走り去り

●第三十四回　密談　觀兵

力査ね覺悟の決闘を親王ゟ留められて倒て不用意ゟる令虞との不快の仔細を糺問せられ已を得ず後刻謁見の節言上まべしとね中したるも心中惑亂して是非の判斷を爲す能ねぞ漸くにして我が識慨僧なる惹羅莫ゟ此事を談じ其が助言を借らばやと思ひ附たれば急ぎ敦土列兒の邸に馳歸りて惹羅莫を一室ゟ招き「老生今日云ゝ次第よりして御身も知り給ふ那の令虞との一條を親王に問れ參らせさり勿論退引ゟらぬ場合殊ゟ親王ゟね既ゟ我等の彼が後見者たる事をも知し召たれば我等一言の陳辯をも施すを得ぬ餘義ゟく後刻拜謁の折其事の委細を内奏し奉つるべしとやたるが此ね如何ゟして宜き者ならん歟一旦武士がやさんを約したる事と變ずるも卑怯なりやせば我身の破滅ゟり事茲ゟ至りて老生實ゟ是非の境に惑ひたり願くね貴僧我爲ゟ善しき謀策を示し給へと大息吐て語るを聞て惹羅莫も思案の首を打傾げ「其ね早や由ゟしたる大事とゟれり實ゟ此事の有の儘を聞え上ゟべ親王の思食ねやすも更なり若し此事を令虞が聞ば其ころ大事變の出來すべし……但し親王も唯御身の彼が後見人たる事をのみ知り給ひて其餘の事を御存知あるべくも非ざれば何とゟ宜く口の先ゟて言黒て一時の難義を遁れ給へ然る事の成ぬ御身ゟも有まじきに左樣し給へと勸むるを力査ね頭を掉て「否左樣ゟ容易く

行く事ゟ非ず察するゟ何人ゟ此の秘事の委細き事まで親王に讒奏したりし歟と思しく て彼方にてね與の與まで知し召たるが如くゟりさまば一通りの吟味のみでね事濟むまじ殊ゟ其節壞を同道まべしとの仰も有り此秘事を又我壞ゟ聞せなば益ゟ破綻を大きにせん夫ゟ附ても我が此書類を君子丹に預々たるが一生の過失ゟこそと後悔すれば惹「否其ね御身の過失とね云ふものゝ令壞とても意ありて披見せられしものに非ず殊ゟ其秘事を他人ゟ告らるゝ等の事の有るべくも有ねば今日の事を其結果なりと思ふね惡し其よりも御身ね何て益も無き無禮を令虞に加へて決闘などをば引起し遂にね此大事の露顯の緒口を開き給へる誠に童しき事ゟらぞや、と云ば力査ね眼を圓くして「御身ゟ似合ざる事をの給ふものかゟ老生の彼ゟ無禮を加へしね我壞と故ありぬべき事を慮り左でね後遂ゟ如何なる難義の起らん歟と懼れて彼を怒らせ其仲を斷截らんとての爲なりしが此も力査が運れ極り惡逆の報ひと思へむ誰を怨むべき樣も無し但し御身は世故に熟して臨機の才在まをを豫て知れり何卒予が爲に一臂の力を添へ差迫る此難義を救ゟ給へと再び乞れて惹羅莫ね稍暫く沈思したるが忽地に叫びて「力査どの予妙計を得たり其ね唯此期を延まに若ゞとて耳ゟ口寄せ何事をか囁きしが力査ね頻ゟ首肯き莞爾と笑て「此策略極めて妙なり親王も決して之を謀計ゟりとね思ひ給ふべうらぞ我早速ゟ

此を行ふべしとて如何ゝ人ゝを欺きけん君子丹ゝも好き程ゝ事を言做し馬引出させ打乘て何國とも無く走去りぬ話頭轉りて彼の屯禮大佐日固遜大尉等が力に依て此の曼丟多府に於て三百人の精兵と得たれば此軍の歡喜ゝ大方おらず斯れば今日の勢ゝ乘じ一日も早く當府を打發て倫敦ゝ攻入るべしとて更ゝ明朝を以て出軍と定め此日郊外の曠野に於て觀兵式を擧行せらる斯て親王も其場所ゝ臨み給ひて軍隊の樣を御覽ぜるゝ整くたる隊列凜々たる勇氣誠ゝ惣軍中ゝ握でたる精兵にて中ゝも大尉令虞と旗持悉德兒の形裝ゝ類ひ少なき迄にして彼の背低き理髮師も此日ゝ二三寸身材延さるかと疑ゲはれ其の隊旗を持ちへの守口して行列の眞先ゝ立たるゝ天晴の武者振のなと譽ぬ者なん無りゝる其時親王ゝも此勇氣ある旗持を御覽じて「悉德兒汝が旗持とせられたるゝ予が最も喜ぶ所なりと仰すれば悉德兒ゝ此大衆の目前ゝて此榮譽ある御辭を被りたれば面目身に餘りて涙を流し「殿下……微臣一命を以て此御旗を守り奉つるべしと答ふるに人々ゝ其の奉答のいみじきを譽て關を突とぞ作りゝる

●第三十五回　謀計の齟齬

親王ゝ目出度く觀兵の式を終りて御歸營あり力査の伺候を待ち給ふに暫くして執奏の者參營の由を申せば親王ゝ彼等を一室なる所ゝ待せ頃て令虞を御伴ゝて其室へ入り給

ふ丹力査ゝ見えぞ惹羅莫法師が君子丹を伴ひて控へ居たり親王ゝいと不興氣ゝ「力査に參るべき由申つる丹何故に來らぬか又和僧ゝ何用ありて此所へゝ來りしや、と宣へば君子丹ゝ忙ゝしく「此にゝ少しく仔細侍りゝ傍らを見顧る時惹羅莫も進み出て「其理由ゝ貧道より申上ぐべし力査ゝ御約束の事ゝ附て巨細の義を申述んゝゝ躊て尾輪教なる私邸ゝ藏めたる緊要の文書あり其を持來らんとて先の程馳參りしが最早や歸府すべき時刻なり尤も貧道ゝ右の理由を聞え上げ且又た伺候の刻限も迫りたれば躊て御召の君子丹を伴ひて登營仕つりぬ今暫くの程ゝ御猶豫を願はしくこそと云ふを親王ゝ、否々と首を掉給ひて「和僧の申を所ゝ陳辯の辭たるゝ過ぎ力査若し彼所に參らんとおらば何とて予ゝ其允許を乞ざりしや察をる處彼說明ゝ苦めばこそ箇樣ゝ事を左右ゝ寄て推問の時刻を延するらん良し〳〵其儀あらば予ゝ今急使を馳せ彼を心許へ召寄べきに、と仰せつゝ又「さるゝても其間君子丹を待せんも氣の毒なり仍て唯今ゝ退出して重ねて父と共ゝ伺候せよと宣へば是非なくハツと答へ申て惹莫羅と同じく御前を退る上人が案外なる顏色令嬢が殘り惜し氣なる有樣大尉が失望せる面色等種樣なるも別て令虞と君子丹が心の中ゝ如何に本意ふくや思ひなん想像にも餘り有るべし暫くして令虞ゝ形を改め「唯今那の法師が申條こそ甚だ疑はしく覺え候へ此ゝ力査が御推問の時刻

を延ず耳に止まらぜ或ゐ其身を晦して逐電すべき爲なる歟も測れぜ此儀如何御思食に
やと申せば　親「汝が遠慮も故なきに非ぜ然ゐ汝、日固遜と共に彼が尾輪敦の私邸に赴
き彼者と召連来れ　令「畏まり候とて令虞ゐ御前を突と立ち日固遜と共に馬ゐ跨り轡を
駢べ鞭を併せて尾輪敦さして馳行ぬ去る程に兩大尉ゐ早や市街を距る五六里なる尾輪
敦の勞苦利が館に着て先づ其館の体を見るゐ四周にゐ壕を繞らして樹木又た多く生茂
り内なる家居もいと手廣く見えたるが其建築の年經りてや軒ゐ破れ庭ゐ荒て物靜なる
よりも寧ろ物凄き有様なり斯て令虞ゐ日固遜と打伴て門内に進み玄關に至ツて案内
するに此の家の執事と覺し死一人ゐ老人来りて「誰ぞと問ふ　令「予ゐ阿熱耳敦令虞
と云ふ者なり大夫力査に至急面談すべき用事ありて推參せり直様居間に案内せられよ
件の執事ゐいと横柄に「主人事ゐ在宅なれども今日ゐ遠路より立歸りて甚しく疲勞し
たれむ何人にも有れ面會ゐ叶はぬ由申居れり然ゐ重て御出あるべしと云せも敢ず日固
遜ゐ眼を瞋らし叱附る如き聲して「我等ゐ親王の令旨を受て御使ゐ来る者なり是非
とも御主人力査殿に面會致さねば相成ぬ異義を申さず早く案内せらるべし　親王の御
使との語と日固遜の權幕とに驚きたる執事ゐ只唯々として兩人を與へ誘引ふ端ゐ下男
を呼て来棄たる二頭の馬を厩へ牽けと言附杯す斯て執事ゐ兩人れ先に立ち案内する折

令虞の面を不審しげに熟々と視て何やらん物案じ顔なるに令虞ゐ不興して此奴無禮ゐ
る老耄ゐな予の面を市店と思ふにやと思へば　令「貴公頻ゐ予の顔を眺らるゝが予ゐ曾て
貴公に會さる事あらぜ。執事ゐ斯く咎られても其無禮を謝んともせぜ歎息して「否足
下の容貌が些と或人と似たるより見し迄なり但し似たるとゐ愚か誠ゐ瓜二つなるゐ不
審に堪ずとて再び先に立ち主人の書齋へと案内す、此時恰も力査が書齋の戸ゐ開てあ
り力査ゐ机に倚て何やらん書物して居たりしが忽ち人の足音をるは首を擡げ振歸りて
打驚き兩人にゐ挨拶もせず矢庭に執事を睨附て「馬苦亂、何とて此人ゝを此書齋に案内
せしぞ慮て誰をも通すなと言附たるゐと罵るを令虞ゐ抑留め「否力査殿此ゐ執事の罪
にあらぜ我等兩人親王の至急なる令旨を受て是まで推參致せしなり、扨其令旨にゐ、令
朝推問の筋有たるに御允許をも得ぜ擅まゝに自邸へ立歸る段奇怪ゐ事に思食さる早く
自身登營して其理由とやし又仕推問の品をも承るべしとの仕事なり斯れば速らに
歸府ありて謁見に入り玉へ小官等是より御供すべし。力査ゐ傲然として「ナニ奇怪ゐ
思さるゝとや力査ゐ逃もせず驚れもせず我爲すべき用事ありて己が自邸に立歸りしを
擅斷の樣に思食され……殊に昨日と云ひ今日と云ひ何と無く御疑念ある樣なるゐ……此
方こそ却て其意を得奉らず思ふる事……さぞれ君命ゐ是非もなし好し〳〵　御身等と同

道をべきに……但し其前二時間の隙を與られよ其間に書類を調て持參せん……馬苦亂御兩所へ饗應の用意せよ……（力査ハ稍暫し默して後）ア、令虞殿我聊か御身に告げゃ度き仔細あり、暫く、と云ふ日固遜ハ其と推して次の間に立出れば力査ハ室の戸を確と鎖を其後我椅子を令虞の傍近く進ませたり

●第三十六回　隱惡の懺悔

力査ハ書齋の戸を確と鎖し座に就しが何事をか言出さんとして言出し得ぜ再び坐を起て那方此方と徘徊するに令虞ハ其樣を不審に思ひて目も放さぜ其の面を凝視居るに力査の顏色ハ益ゝ凶く眼血走り色蒼ざめて何樣唯ならぜ見たまば、扨ハ彼何事をか爲出さんと爲るゃ有ん我も先其用意すべしと思ひ心竊に身構をる時力査ハ漸く坐に復りて其より穴の明く迄に令虞の面を睜詰ると半時餘り卒然として問けるハ「君ハ我家の由緒を知れりゃ。此不意の問に聊か驚きハ爲たれども猶然り氣おく　令「然り些か聞たる事あり　力「然らば此邸宅も先祖勞苦利が建築以後今日ゃ至りて二百餘年ゃる事も知り玉ひん。令虞ハ首肯くのみ返答せず　力「然らば我が祖先歷代の大名を世に顯したるも、此勞苦利の姓の普く世上に知れ渡りたる事も知り玉そん：　然るに今我力査の代に至りて此由緒正しき各家の棟ゃ傷を負せ汚辱を世間ゃ招ぐとハ實に遺恨なる事

ならずゃ……噫其汚辱ハ今日に迫りたり……其ハ他に非ぜ親王ゃ推問是なり、今其仔細を悉しく御身に語るべし心を沈めて熟く聽き玉へ、想ひ出せば早ゃ二十年の昔とおりぬ我兄なる大夫阿西華德勞苦利ハ一個の妻と嬰兒とを殘して死去したれば勞苦利夫人ハ其兒を引連て此邸宅に住ひたり……御身我言ふ處を解し得るゃ　令「然り能く解れり、小生も、其嬰兒が何者にか拐帶されて行方知れぜ夫人ハ其爲に悲痛に迫りて死したるとゃ事を嘗て聞り。　力査ハ又沈思しつゝ、　力「如何にも左樣ゃり其嬰兒即ち予の甥に當る者が踪跡を失ひたれば予ハ來りて此家を嗣ぎ爵位と領地とを相續したり、と言終り又暫くハ無言にて俯向つゝ苦し氣をる息を肩よりして吐く狀を見て心敏き令虞ハ、扨ハ其甥の嬰兒を拐帶したるハ此力査よナ若し左も有らば見るも忌しき曲者ゃなると思ひたれば彼が苦む樣を餘所に見つゝ暗ゃ小氣味好く思ひ居たり。力査ハ令虞の面を餘所に向るを追縋る樣にして覗き込み「先づ聞き玉へ拐帶されたる其嬰兒ハ死したりと思ひしに今猶世ゃ存へ居れり。令虞ハ少く其異聞あるに耳を欹しが猶冷淡に「其ハ不思議なり　力「左樣冷淡ゃ聞做し玉ふな……否真實を打明されて驚きて動顛し玉ふゃ、コレ令虞殿……其嬰兒即ち此家の正統の相續者たる昆威、勞苦利とハ左樣いふ御身の事なるハ……。百雷一回に頭上に落ち碎けて天地一時ゃ眼前に裂け破るゝとも容易ハ

驚かしと見にたる剛膽の令廣も此不意の一言ふに仰天してアナヤと計り飛揚り覺えず椅子より突起たる儘身に造り附の塑像の如く又蟬蛻の殼の如く稍暫くに呆き果てゝ言葉も無し。力査に決心の有樣に悲哀の面色を顯えして「昆威殿(令廣)御免ひへ我苟初の愆心より道あらぬ企望して御身の姓氏を奪ひ御身の爵位を私し御身が土地を領し御身の家居に住ひたると茲に多年一心の願望足て身に富貴に慕せども……嗚呼奈何にせん是非善惡を私庇せぬ我が良心に我を咎めく須臾も苛責を弛めず朝起て膳に對へば我兄阿西華德の靈に麵包の切皿の肉にも現れて汝力査何故に我兒昆威を逐斥て其餐を奪ひ其肉を竊むや早く不義の食を斷て飢て死ぬぬと罵り責め夜半枕頭に夢破るれば我嫂勞苦利夫人の姿に幻に顯れて何故に我兒昆威を奪去り此家に住み此牀に眠るや早く此所を去く我兒を復さぬと其たゆさ眼に我を睨め果はさめ〳〵と打泣て其悲み死に死したる恨を我に聞ゆされば寢る間も起る間も御身が亡き父母の怨靈即ち我良心の苛責より眼睛に映じ出す悔恨の冤鬼に責られて一日片時も安き時なく況て幸福の觀念等に夢の間にも感ぜし事なし斯れば活て世に在るも何にかはせん疾く死ばや死幾回か思ひつれども彼に物ふ狂ひたりと死後の恥辱の流石武士には辱しくて其れも得せず然るに昨日不意くも禮との決闘より令廣、御身との不和の原因を親王に問れ

參らせさり其時予にハタと行詰りて思はぬ面目を失ひしも（力査の心には面目を失ひしと思へるなり）心に思ふ由有ての故ぞ其に事の樣を明に地に聞へ上て罪にるゝ身を惜むに非ぞ先にも云へる我が英國の名家たる此勞苦利の門よりして然る不義の罪人を出をと祖先歷代の靈に對して實に忍ざる所あれば家に歸りし後御身も知れる惹羅莫と此事を談ぜしに彼云々の謀計を述て兎にも角にも此一時を遁れ玉へ然らば親王にも明朝に御出發なり暇おき軍事に紛て遂には此沙汰も此儘に事終るべし今に此外に施すべき術あらぞと云ふに依て娘にも、此說明に必要なる書類を取來ると言聞々置て又親王にも惹羅莫して其旨を奏上させ此館へに遁れ來しが既にして謂へらく斯てにおゝ無お君を欺き又人をも欺くなり行末共に頼み無き我が運命良や此場を遁るたりとも何生甲斐の有るべきぞ寧ろ良心の安きを謀れむ事有の儘ふ君に奏し身の爵位領地家居とも御身に還て其後年頃の身の罪を謝び潔よく刑に服んこそ中々に現世後世とも安樂なる方法ならめと思ひたれば今しも其懺悔狀を書認めんとて筆を執るに我君にも亦御覽ぜる所ありてに特使として御兩所を差越されたりされば既に斯う事實の明白あれる以上に我等恥惡しく愛丟多の御陣へ參るにも及ぶまじ唯是なる書を御目に懸おば其にて足らん又御身が如何なる故ふて秘府に於て生立れし歟を定めて聞たくに思

すならんか其も右の懺悔狀に委細を認め置くべくんれば其にて宜しく承知せられよ扨予は是より認め掛かる懺悔狀ふ執掛るべく思ふなるとも其より先に御身に晃せ參らすべ紀物こそ有れ此方へ來給へとて先に立てべ令廣ね夢に夢見し心地事の是非をも判へ難しが事茲ふ至りて已むを得ぞ今又力査の誘引ふ儘に何かも知らぞ跡に接きて其行く方ふ赴きたり

第三十七回　記念の空房

令廣は力査の跡に接て書齋を出て座數幾間をう過て最も異なる離家の一室に至りぬ力査は手に持たる鑰にて其室の戸を開き中に入るに室内も暗くして物の黑白ね能も分ず且つ幾年の箒も入れで棄置けん塵ね山の如く積りて其氣鼻を撲ち室息すべき迄おるを令廣ね漸くに耐へて暫く目を睜り闇と透して室内の彼方此方を見廻らせば前面の隅ふ一張の寢臺ありて被布枕敷氈までも具りたるが是も同しく塵に埋もれ殊に其枕ふね黴菌生て被布敷氈は黄み朽たり昔話ふ聞し惡魔の棲む家とね此等歟小說にて讀し妖怪の出る室とね斯る所をしも云ふならん歟と覺えて令廣は氣味の宜らぬに附ても又如何ある仔細有て力査が斯る室に案内しにけんと怪くて此と彼の面を見れば力査は俄に色を失ひブル〳〵と身を震ねしながら「嗚呼當時の恐怖しき有樣の目に見ゆるぞや、令

廣殿、吾身が彼夜我等に奪ひ去れしね此室ふり其夜吾身ね那の寢臺の上ふ母吾の懷中に抱かれて寢て居玉ひしを我等が忍び寄て斯う引奪り此所まで來し時手引せし吾身の乳母が急に物の恐しくてやマア待玉へと我等を留る我等ね留られて一生懸命手に拔持たる短刀にて拂ふ機に乳母ね乳の下を劈裂れて即坐ふ絶命、ナウ悲しやと追縋られし吾身の母吾も此体を見て其場に悶絶、我等ね安々吾身を携へ我邸迄と立歸りしが母吾ね其より物狂しく我兒を返せ昆戚を戻せと晝夜ともに叫びつゝ遂ふ又此室にて狂ひ死に死玉へり思へば〳〵怖しき我が惡心人兩個の命を絶て半生の榮耀に誇らんとする此惡逆を天道爭でか容し玉ねん力査の今の懺悔ね天使の拷問親王の吾推問と仰出されし冥路の審判を現世にて爲る活ながらの地獄界ぞやアラ恐しや、と舌の根も貫徹らぞきしも我慢の力査も心の鬼の角を折て言ふとさへも後や先に身を戰慄しつゝ當時の樣を語るに令廣ね先より餘の驚きと悲みとにて涙も出ず唯茫然たる計りにて聞居たりしが今や物語の終るに臨まて稍正氣づき、扨ね今聞し已身を奪ひ去れ其爲に我母の沒なり玉ひしも此室か那の寢臺かと走り寄て見るに目も暮れ心亂れて覺えぞ悲泣の聲を擧げ彼の臺の上に倒れ伏せしが漸くに心を取直して力査に打對ひ「力査殿吾身が實心の懺悔を聞てね今更ら何とも言ふべき樣あし殊に小生既ふ北軍の士官とおりて今日明

日も戰場に向ふ身の爵位領地家邸を從されたまはとて何ぞかは爲ん此は暫く猶佐身預り置て世治り干戈歇て後好機會を見て小生に還さるべし唯今は要なき事なりと云ふ令虞の義心に力査は感じ入しが猶語を繼ぎ「佐身の辭は天晴武官たるに恥ざる言分ては有るなれども我等は又舊惡を懺悔して管只前失を償むんとをるに急あり且や佐身は今方に親王の寵遇を得て不次の登庸に身の面目と施され生死只御軍の爲とのみ思はれども我等倩〻事の体を察するに軍隊の整頓兵食の多寡人數の多少地勢は利鈍共に皆彼に及ぎして我軍は敗形又一〻として足を斯と知りつゝ一旦の値遇の爲に百年の身を過つは智者の敢て爲ざる處況や佐身の勞苦利家は士都華土の朝に非常の恩遇を受しも非を既に佐身の祖父も父も却て今の巴諾伯家に大功勞あるに有ずやされば佐身も宜しく父祖の遺志を繼ぎ又其身の後榮を謀りて早く頼みなき北軍加擔の志慮を翻へし我等が還す爵位領地邸宅とも受取て心易く生涯を送り玉へ是れ敢て我等が一時の勸告に非を併おぼら又亡父亡祖父の遺志なるべしと說諭すを令虞は奮然たる面色して聲荒らげ「怪しらる佐身の仰やは人は名こそ惜けれとの佐教諭にはは小生辱けなく受戴かんが一旦君臣の約を結び死生唯命との誓言を致しさる身を命の惜きに逃げ隱れて剩さへ御敵たる巴諾伯家の方人と成ぶんと凡人に名譽心とやす者の有ん限は爲し得べき義に

はは ずと言放ちて暴らのに牀板を踏鳴し會釋をもせぞ其の儘突と室の外方ぶ出行きたり跡に力査は歎息して「已矣〻〻彼若氣の意地を以て予の忠告を聞ずさまども今見よ遠からぞして予が言を思ひ當る時の有るべきぞ夫に附ても此先祖相傳の領地も家屋も人手に渡りなんずるとの口惜さよ嗚呼此も天數命數さも有べあれ今一回必死の規諫を試みおむ彼まさ思ひ返す事の有るべきやと獨語つゝ暗澹たる面色に無量の憂愁を含せおがら力無げにも己が書齋へと出て行く

●第三十八回　因果應報

令虞は力査の勸告を聞て不快に堪ぞ彼室を走り出で憤然として此方に來るを執事の馬苦亂は出迎へて一室に請じ馬「令虞君唯今主人力査より何か太切なる御咄は致されさりしか令「如何にも大事の話をば承はりたり、但し唯今拙者の口より其を申べき要なしとて無情も去んとするを馬苦亂は暫くと押留め「何か不興の体で在ぞを強て留めやさんは無禮なれども此は和君の爲ぶれはやすあり……蓋し其御話は貴君の御身上の事なるべし。令虞も斯く云れては怒りも成らず坐に就て「然り拙者の素性の事なり、此事に就ては和老最初より與り知れりや。馬苦亂は真面目顔して「否與り知りし事は無れども……拙者は譜代にて既に御身の父阿西華德殿の時代より仕へたり故に御身の往

立をも熟く知れり、但し彼の後遇ひ參らせたる事は無きも先刻御顔を一寸と見し時先代の殿に能う似て居玉ひしに依て概略は推したり既に叔父御が左樣打明けらるゝ上らは爵位も領地も家邸も御身に還さんとての事なるべし、此れ素より順序なり當然なり然や先代御夫婦も草葉の蔭にて喜ばるゝ事ならん又叔父御も多年の後悔茲に消て安心を得らるゝ事ならん、兎に角目出度き御事なるに此よりは猶老奴を憐みて御目を懸て賜せ玉へ……扨も老奴は彼の嬰兒の恙なくて居玉ふ由は聚て知りもが……今斯う立派なる、勇しき武官となりて世に顯れ玉はんとは思ひも掛ざりき、サテ此館へ御移轉の御日取は何時頃にや。令廣は苦ゝし氣に笑ひながら「否子は既に親王が麾下の大尉人となりて此曼丟多義勇兵の指揮を掌る身なれば今明日ふも南方へ出陣すべし素より戰場へ向ふ身の命生て再び還らんとも思はぬ移轉等の義は唯今は聞くも要なしとて再び其坐を起んとするを馬苦亂は遽たゞしく「否ゝ其義は御伴の士官より承はりしが、今は物事既に變じて和君も昆威、勞苦利と名も變らせ玉ふ上は……令廣は立掛ながら後を振向き左も面倒其氣なる顔色して「然る意味も有らん、おまどもは暫く猶阿熱耳敢令廣にて居るべきなり、其委細を聞たくば其方が主人に問ふべし、とて突と此室の外に出て食堂へと來るに日固遯も茲に居りて既に食卓に對ゐんとす令廣は事の樣を

日固遯ふも覺られたと思へば心中の錯亂を無理に壓服け同じく皿に對ひて又子を把しゲ牛の羹肉も鷄の烘肉も恰も木片を咬むが如く其味の良ゝ否かをも知ざりき、斯て兩個は食事を終り力査の挨拶如何と待つ處に忽ち見る那の執事馬苦亂は踏む足も地に着ぬ迄に急遽しく駈來りて「御兩所大變で御座る……大事件でござる……如何致さう……何う致さう……と遽て騷ぐに此方の兩個は驚きて細劒を片手に起つ中ほど令廣は早く聲を掛て「ナニ大變とは何事ぞ　馬「イヤ何事とて主人が……主人が今自殺……拳銃で自殺して果ました……。扨は兩人は飛が如くに室を出て馬苦亂を先ふ其場所へと至りて見るに此場所は他に非ず唯今令廣に案内して當時の獲惡と語りたる那の勞苦利夫人が悲哀の死を遂たりと云ふ空房ありき三人は頓て寢臺の上に俯向に倒れ伏たる力査の骸を引起し見るに大形の拳銃にて胸元を深く打貫たまは迚も治療の達くべきに非ず其時令廣は再び亡屍を點檢るに死骸の左の手に一片の紙を握り持たり令廣は悄と取て披き見れば「死に臨みて此言と汝に遺す、汝が身に結附たる遠征は唯危難と破滅との兩個あるのみ汝宜しく汝が不幸なる叔父の身に鑑て速かふ其軍を脫せよ」と有り令廣は如何に思ひけん其儘隱袋の中に收め又馬苦亂を案内ふ唯一人先の書齋に入て見るに先刻物書たる机の上に何さま悔の遺狀と覺しくて黑色の封蠟固くしたる一

通の書翰あり其表書なる名宛と見れば「大夫昆威勞苦利殿」と認めぬ此と見るより令震は潸然と涙を流して堪ぬが如く打泣たれば傍らに見居たる馬苦亂も此時漸く心づきて敷きの袂をぞ絞りける

●第三十九回　懺悔の遺書

斯て有るべきに非ざれば令震は馬苦亂に命じて家内の男女に此事を告知しめ力査が亡屍は寢臺の上に安卧せしめて戸口には堅く鎖を卸し身は再び書齋に入て彼の遺書の封を披くに中には遺言の狀と一箇の鑰と有り頓て其狀を取上て之を見るに流石は豪勝なる力査として最期に迫りし筆の跡も毫かも紊れぜ其文を讀むに曰く

今や予は身の舊惡と悔ひ我が至敬至愛する上帝の御前に跪づきて我が深重なる罪惡を陳謝し奉つらんとするに方り茲に真心を以て左の事を遺言す

阿熱耳敦令震として世に知れたる少年は實に我兄大夫阿西華德勞苦利の一子昆威にして予は彼が尚其母の懷裏に在る時之を奪ひ去り爾後二十年間其の相續權を竊み之を己が有とせり然るに予は今身の罪を悔るに依て此奪ひたる爵位土地財産家屋とも悉皆之を彼に還附す願くは之に由て我が積年の罪惡を宥恕せられよ

噫誰か予が此土地と此爵位とを僭有したるを見て予は幸福なりしと謂ふぞ予は此懼

るべき大罪を犯してより以來心中の平和は予の身を離れて睡眠も亦予と交りを絶ぬ夜に枕頭に困頓として纔に瞼を合をれば必夢は忽諸吾を驚かして片時も安息をを得せしめぞ苦みて眼を開けば怖しき哉我兄の憤怒として我大惡を責め、又時として我嫂の憔悴として愛子を失へる悲みに迫りて世を逝たる樣を目前に見認ると屢に悲しき、其の苦痛と悲哀、恐怖の悔恨の切なると縱ひ万貫の巖石を以て胸を壓へ万斤の鐵鎖を以て身を縛するも斯迄には非じと思はれぬ

予は此の如く良心の鋭き牙に身を齧れ遂には生き存ふる我命の恨しき迄となりぬ加之なら斯く人の爵位財産を奪ひ我甥の乳母をさへ殺したれば若し此事一朝にして發覺あば此身は淺ましき囚獄に投ぜられて我首は恐しき斷頭臺を枕とせざると得ぞ一念此に至る時は寒からざるに戰き熱からざるに慄ぐ或は時に身の罪を懺悔して心神の安きに就んと欲とは思ふも人慾の浮雲は天理の月光を掩ひて之を斷行をるを肯ぜしめぞ一日又一日と苦惱の炎の中に蜉蝣の墓なき娛樂を貪りて遂に今日に至るまで此爵位と財産とを棄ると能はざりき

然れども予が行爲も悉く惡しとのみは言へからぞ予が行ひたる小善も蓋し又記臆をべきもの有んは他に非ぞ予が昆威を拐帶し去て後之を適當なる保護者に托し其監

督の如きは陰おがらも予之を親らして殊に其費金の如きは予毫かも之を吝まず以て彼をして心志高尚に才藝學術ある一個の紳士と成らしめたる事是あり予は既に彼が良善の君子となりしを見て歡喜に堪ぎ爾後は其給與を増して我が不義の富を減じ隱惡の罪の万一を謝せんとせしが事時と違ひて行れず予が計畫も水泡に屬したり然るとも是實に天の責なり今にして思へば斯る姑息の謝罪方の身の大惡を償除するに足らざるを知れり

抑も士都華土家恢復の企望あるや予は熱心に之を幇助せり而して此幇助は予が心中に幇助すべしと信じたる所あるを以ての故にして敢て他人の知り得べき事に非ず又我言ひ得べき事にも非ず然れども其事は決して成功を見るべらず故に我甥は早く一味の心を飜へし連判の名を削りて遠く局外に身を退けよ是を安全を計るの策なり家名を全くするの方なり祖先丹孝を盡すの道なり特には汝が叔父の力査即ち今汝が爲に死するの我をして心易く天國に至らしむるの祈禱あり又予が汝丹謝するの實心を汝が信受して予が罪と寛恕すると云の明證なり

予が身を果すは前に決鬪あり後に戰場あり豈自殺のみに限らんや然まども此尾輪敦の邸に還りて我が大罪を犯したる室、且つ汝が母の悲哀に死したる室に入て自盡を

るは因果應報の天理に脱して事實に適當しさりと思へばあり此にても予が實心の懺悔より出る自殺なるを知て冀くは予が前の忠告に從はれよ

書齋の秘筐に繼て予が密書を藏めたり今鑰を附す汝宜しく開き見よ之を見ば汝は此土地を所有するの權利ありて且は正しく其身の昆威勞苦利たる事を知らん

嗚呼予は今や罪惡貫盈の婆婆を去て清淨無垢の天國に赴かんとす人間更らに予が心を累はせるもの無し然は有れども此期に臨みて猶愚愛の忘れ難きは我壞君子丹の身上なり予罪惡深重にして彼に一書を裁して別を告ることを得ず茲に空しく暗涙を飲て遥に告別の辭を出すのみ噫我今死せば誰か彼を保護する者ぞ想ふに我甥昆威は必らず彼を保護せん、予が私産は悉く彼が有たるべし其顧勞苦利家財産に比すれば小なりと雖も亦彼が一身を支ふるに於て十分あらん予は今は唯彼が予の爲に後世を祈らんことを望むより他の事なし

此他言んと欲する所多しと雖も思想混生して之を筆に上す能はず、故に僅に此に止む、躊躇半時を緩めれば或は予の決心の變ぜんを懼る、因て速に死に就く、嗚呼昆威よ君子丹よ、我永く汝等と訣れん、幸ひに我罪を容し我爲に祈れ　力査勞苦利

●第四十回　令虞の決心

力査が最期の筆の跡に懺悔の誠實父子の恩愛又た自己への親身の忠告彼と此とを混交ていとも哀れに書立しを見て左しも勇める令廣れ心も黯澹たる幽愁の穿中に擠入られ我にも有らで落る涙を手巾もて拭ふ方も知を唯彼の遺書を繰返し〳〵見て盡ぬ嘆歎に茫然として居たりしが疏と思ひ附て封筒より落たる鑰を拾ひ取り傍なる飾箪笥の鍵を開きて抽斗を明け中を探るに果して大なる一包の書類ありて袋の上に「昆威勞苦利が勞苦利家の財産を有すべき權利の證書類」と認めたり令廣は其と見て毫も疑はぜ表袋の封さへ切ぜして其儘抽斗の内に納め鍵前固くして鑰をは隱袋の中に入れたりさる程に此等の事に時移りて早や黄昏も近きされば驚きて呼鈴を鳴し馬苦亂を呼んとする時恰も好し彼は手燭を持て此室の中に入來りぬ令廣は其と見て「オヽ馬苦亂か、予は此より曼丟多に歸營するが先刻もやす通り明日か明後日には親王の御供して南方へ出發すべけれは活て再び此家に還り來らんや知べからず夫に就て予は汝の忠實無二なる料見を見込て頼を置くべき仔細あり其第一は君子丹壞の身上あり汝より今日の一部始終を彼方に傳へやもべ死は勿論にて猶其上にも跡〳〵の悲歎を慰め參らせんと肝要あり、嗟然るにても君子丹が此凶音を聞し時の其悲痛は……と大息をれば　馬「如何にも老奴も左おそとは推測り參らせるが……但し老奴は彼方の効少より仕へやて其性質の仔細

き事迄も存じたり、壞子は心術飽まで自制に強くましませ尋常の女子の如く取亂し玉ふ抔の事は有るまじきも其丈に御心の苦惱は嚴酷なるべし其等の所は老奴好に和め慰め參らすべし　令「扨第二には我が叔父君の亡屍あり此も君子丹壞と相談して式の如く葬り呉れよ、又第三には此廣き館に壞子の一人住なるべき樣もあらず殊に昨今の時勢なれば旁〻以て敷土列兒六人莫尼加令壞又た惹羅莫上人も此所ゑ迎へて暫く同居あるべ死樣計ふべし、と掟つる時日固遜はツカ〳〵と室の中に入來りて「如何に令廣殿早や日も暮しに何時まで斯て居玉ふぞ力査が血に染たる最期を見て臆病神にや魅れ玉ふ、と恥しむれば令廣は呵々と冷笑て「小生も軍人あり出陣の前に血を見るを吉兆とこそ思へ臆病神抔どとは片腹痛し、早や此家の用向も片附たるにいざ罷らんと言も敢ぜ馬苦亂に目禮して馬丁が牽もて出を馬にヒラリと打乘つゝ曼丟多さして馳歸る斯て兩人曼丟多の市中に入れば日固遜は御返事の事を令廣に托して己が陣所へと歸り行は令廣は唯一人本營の門に馬を棄て唯今歸參の由を申上る親王は令廣一人のみ歸り來れる由を聞し食て不審に思し急ぎ御前に召て事の仔細を問せ玉ふ其時令廣は今日勞苦利邸にて有し事の趣きを事細に聞え上て其後力査が遺言の事又懺悔狀をも取出てゝ竊に親王に奏聞すれば親王も坐に御涙に暮れ玉ひ「我最初より然る意味も有んと思ひ汝

と力査と君子丹とを一間に列ねて相互の舊怨を解き更に双方の新緣を結むしめんと計りしに彼早りて事の此に及びしとの口惜さよさむれ彼が恥を知て自殺したるに流石に武士の魂とて殊勝なり汝も其前罪を忘れて故の肉親の思を爲すべきと勿論たるべし既ていに汝も早や元の令廣にあらず昨日迄に名も知れざる一個の冒險者たるに過ざりしが今日に既に有爵の貴族なり力査が遺言の樣も不便なるに旁に汝も予が麾下を離れて早く勞苦利の邸に還り生涯を安く送るべし早や、〳〵と宣てもるにぞ令廣に先より首を垂て謹をて承てりたりしが此時此と頭を揚げ熱き涙とハラ〳〵と流して「口惜さ仰を承てるもの哉小臣不肖なりと雖も亦一個の男子なり一旦殿下の御爲に生死の忠を盡さんを誓ひ殊に重疊の寵遇を蒙りて面目一身に餘たる御恩を荷ひても身が今更ら斯許りの爵祿に眼の眩みく志を變ずる者と御さげすみのいひしや良し〳〵斯樣の仰を承まてりたるが身の不祥でさんなれ此上に御前にて刃に伏し小臣が貳心を面あたり御覽に入るべきにも、と刃を拔て自殺せんとす親王に「先づ待て、を仰ありて「汝が忠誠予に於て滿足に堪ず前言に予が愆ちなり心に思ふ……扨も明朝に此所と打立べき由先刻諸將より奏聞したれば汝も其用意せよ就ては今日の事と汝が口より猶君子丹よりせ又後事の相談に手間取ては出陣の時刻遲るゝとも其に御允許あらせら

るべし、辭むべからぬ疾く罷るべし　と宣てせて御奥深く入せ玉へば令廣に親二の御情に感佩して戎衣の袂を絞り合す暫しい立難てぞ居たりける

●第四十一回　訣別

翌れば十二月一日なり遂て軍令のありし如く親王に麾下の精兵を統率へて親ら先陣に進み玉へば自餘の將校も亦部下の兵を引具して出發す此を見送る人民に路と挾みて味方の勝利を祝しつゝ府内府外に歡喜の関を擧る其体の勇ましき謂ふ許りなし去れど又た阿熱耳敦令廣に此日親王よりの御允許を得く出陣の跡に留り代言師を招て勞苦利家の土地財産の處置を爲さしめ其事果て後馬に鞭うち勃土列兒夫人の邸に至りて祭内を請ひ君子丹に自己が來りし事を言入れば君子丹に早速出迎へて一室に請ぜ其樣を熟く視るに顔色に蒼ざめ眼に濕みて堪ぬ悲歎を心に懷く者とに見ゆるが何さま自制の心強き故にや聊かも取亂しさる体に無て應對より身の周旋まで平日に變りし所あらぜ其時令廣にいと嚴かに會釋して「扨も此回に何ともやべき樣の無き不慮の變に出遇ひ玉ひて御愁歎の程も嘸らしと察し參らする但し小生に御身の父の所爲につきて毫うも恨を遺す所なし此の義のみに心易く思ひ玉へ　君「其に眞實か妾に又御身が父の舊惡を容し玉ひも妾と迄も憎み玉えんのと心配してひひしに其一言にて寔に安堵して侍り猶此

上とも妾の保護者として往末見纏て給び玉へ　令「其ハ父御の遺言狀ニも載たれバ豆て
する迄も無し勿論執事の馬苦亂よりも既に亨越たるならんと御身ハ此より勞苦利の邸
へ歸りて葬式の事を營まれよ　君「さらば御身ハ妾が秘館ニ赴きて父ろ亡屍を葬る事を
許さるゝ歟。令虞ハ怨し氣ニ君子丹の顏を凝視りて「隔心なる事をの玉ふもの哉縱ひ
事情ハ何とも變れ秘館ハ父御の住ひて御身も成長れたる所ならずや特に唯今小生が故
くたしよ
ゝ當所へ參りたるハ彼の家邸領地共ニ御身ニ讓り參らせんと思ひてなり。君子丹ハ悲
哀の涙をハラ〳〵と流しおがら「扨ハ御身ハ口にハ云ゝとの玉へども心ニハ猶舊怨を
忘れ玉ゑで妾を苦ませんとせらるゝや。令虞ハ驚きて「ナニ苦ますとや其ハ意外あ
り、先つ能く物の心を積りても見玉ふべし我等此回親王の御供せば十ふ九つ命ハ無き
ものと思されよ例ゑ戰場ふて箭玉ニ中り劍戟ニ貫られて討死せんハ勿論の事左あくと
も運盡てハ敵ニ捕てる、事もあらん疫病に罹る事もあらん又ハ兵糧ニ盡き飲水ニ渴し
て飢て死ぬ事も自殺するも昔よゝ戰爭ニハ多く有る例あり既ニ二つとあき命をら棄ん
と思ふを爵位の領地のと今の体ふハ定ニ無用の長物なり現ニ彼の廣大ある家衆多なる
財産も其用我が此一口の劍一挺の拳銃ニも及バゞ且や慰ゐに斯る物ありてハ我勇進の
氣の七分を挫くべしさらば此等ハ我等が爲の身と保つ財寶にハあらで却て名を傷くる

障碍物とこそ言べけれ、サ、捺印證書も此所ニ在りいざ受け玉へと手ニ渡をにぞ君子丹
ハ令虞の死ぬと云ふ決心ろ辭を聞く男勝りも女子の本性唯さめ〳〵と打泣くのみ其時
令虞ハ君子丹の傍ニ摺寄て「斯く決心ハしてひへども唯一の心ニ懸るハ御身が。予を
愛する。との一語なり哀れ此世の思出ニ唯其一言を聞せ玉へ、サア。予ハ決を愛を。との
一言を聞せ玉へ、と手を執ば君子丹ハ涙の顏を羞しげふ悄と揚て莞爾笑み「令虞君妾
ハ御身を愛し侍り行末ハ妻とも見玉へ、と言も敢ず窄き袂もて面を掩ひぬ

●第四十二回　軍議

阿熱耳敎令虞ハ君子丹ニ別れて後馬を早め親王の御跡と追て急ぎし程に其日の午過る
頃追着たり扨ゑ此日北軍ハ馬屈非德に到着し其翌二日ニハ同所と立て利苦ニ至るふ昆
伯蘭親王の大軍途ふ當りて我軍を要擊んとの準備あるよし斥候隊よりの注進あれば親
王ハ此所にて全軍の部署を定め大佐兜禮を先鋒の大將とし大尉令虞を此が裨將として
真先ニ進ませ親王親ら中軍の將として打向てせたるニ昆伯蘭ハ此銳氣とや避ニけん又
列ニ謀る所や有たりけん陣を退くると數十里にして律智非德に支へたり親王ハ此報を
得て喜び玉ふと斜ならぬ、敵引ハ何方迄ゑ逐へ彼等ニ息を繼すると號令して左右をも
顧みゞ全軍を驅て進み玉ふ程ニ此日より四日を經て太闢の街に攻入り玉ふ此所より倫

敦迄に早や一日路に近ければ親王に既に彼都を御掌中に握らせ玉ひし如くに歓ばれ、明日に是非に有無なく一戦を遂て昆伯蘭が軍勢を蹴散し那宮殿より巴諾伯の偽主を逐落きんと頻に勇み立ち玉へども如何なる故ふや味方の將校に勇氣更に引立ぬ唯哥こそりて前途の安否を耳語告る者のみなり、親王に此有様を竊ふ御覽ずて以ての外に驚き玉ひ急ぎ畢利豪卿、巴西公、馬都禮卿、大夫當麻士設利男、愛快愈侯、戈登卿を初として首立たる將校數輩を御前へ召し軍の意見を問せ玉ふ其時戈日戈登に進み出て「明日倫敦攻とやす今日に至りて箇様の不祥の言とや出んば近頃憚りあるに似てゐへども又言で止まんに不忠に當りて殿下の御爲め却て然るべからぬと存ぜ仍て恐れを顧みずやをにてゐ斯うやを我等を初め一座の人々も前の日曼丟多を打立し日の心に引て手剛き防戦もやと危きたる本府（曼丟多）も日固遯等男女三人の材幹に依て一兵に畔ぜして降服させ剩さへ三百餘の精兵を得たれむ此より倫敦に進む途上の諸都府に皆風を望みて降參し其人民に先を爭ふて御陣に馳加はるおらんとに存ずてゐひしに此に空頼にて其後に物の一騎一卒だも馳參ずる者とてに無く到る所の市街皆我軍ふ淡々しき接遇を爲すに未しも土地に依てに陰に怨敵の刃を研て敵對んと謀る者すらもゐひき然ども僥倖に御味方の武威強くして彼奴等に皆閉怖の舌を奮ふ軍までに至らで通行してゐひしも

真實の歸降せし都府と云ふに唯の一所もゐらにを加之ならず昆伯蘭が三万の大軍に前を塞ぎ威德が一万の精兵に後を斷たり良や殿下の偽武威によりて是等の敵どもを打散し一蹄倫敦を奪取たりとしても御覽ぜよ彼府にに御味方の第一たるべき舊教徒に寡なくして却て多年僞主の恩波に浴したる新教徒に多し此等の者爭て我等北方の軍勢に其居住の土地を踏荒さるゝを快よしと思ひゐべき彼の敵兵再び大軍を集めて攻寄ふば彼等皆裏に應じて其軍を引入れゐん事火を睹るよりも瞭なるべし況んや明日の軍に斯う氣を失ひたる味方の人々にゐへば捗々しく彈の一つも打出す者乃有や無や其すら心許なき事にゐ寡に衆に敵せずとに自然の道理、兵に機を以て制をとに兵家の法語殿下願くに此等の所を思惟し玉ひ敵を測り味方を量りて事理合体の仰出され有かしと存じ奉つると憚る所なくや出れば親王に暫く呆れ果て宣せん様も知て在せしが頓て怒れる眼に口惜涙をハラ〳〵と流し玉ひハツタと睨めつけて「ヤア戈登、汝に我が麾下の將軍中に も別て頼もしき勇氣ある者と思ひしに何時の程にか左様臆病神に魅られしぞ汝が如くサウ先の先までを心配してに孰の日ぞ合戦と云ふもの、成るべきや曼丟多を打立てより味方に加にる兵無しと云ふとも又予に敵對せる都府も非らぬ原来斯る天下分目の大戦爭に双方の旗色を見較ぶるに人情の常をて怪むに足らぬ其時進みて敵に當

る者は勝ち退いて敵を避る者は亡ぶる事凡兵法を談ずる程の者の知る所にて汝も此程は道理に惑ふ者には非ざりしを……憶叔も此言を汝が口より出すと云ふは予が運命も未なる歟遮莫あれ此年来先考親王が泉下の御無念を想ひ像り晝夜他國に肝膽を碎きて兵を募り漸くに時機熟して此國に航り来り然も毎戰勝利を得て早や我讐の首を見る歟彼を王位より逐下す歟共に今一日と云ふ今日に至りて假令何樣の困難我が進路の前に横はるとも跳り越てやは止むべき歟、良し敵縱ひ何方あるとも其を踏破つて通らんか何事の有るべき左樣に軍危ふしと思ふ汝は此の陣に居て見物せよ、如何に方々は此事を何と思ひ玉ふ、と息巻荒く親王は傍邊を此と見廻し玉ふ他無念の程も推量られぬ

●第四十三回　退軍

畢利豪卿、馬都禮卿を初として一座の面々は親王が決心の御氣色を見て互に面を見合するのみ一言も辭を發する者なし暫くして談利男は膝を進め「唯今戈登が申條は君の御決心を挫くに似て恐れ入てはいへども小臣等の思ふ所も亦た稍同樣の義にて君は頻に敵軍を小兒の如くに侮り思し食玉へども彼の昆伯蘭も尋常の將にあらず殊に彼が率ゐる三方の兵は偽主戎日が頼み切たる近衛の精兵にて上は今迄は拱手しき軍もせず唯退軍のみしていへむ軍中皆憤怒を含みて兵氣火の如しとやしひふ殊に明日の合戰

を仕損ぜむ倫敦の國を受ると眼前あれば必死の防戰を力めん事も勿論あるべし是等を以て思惟をれば未だ容易く勝敗の數を言へからず況や味方幸ひにして利運あるも其兵の死傷想ふに亦た多からるべきをや斯る危ふき軍して忠義無二一人當千の味方の義士を失はん事御謀略の未しきに似ても願くは是等の義を御思慮ありて御退軍の事然るべすもやと云ば親王は御憤怒益々胸に逼りて遂に物をも宣ふと能はず稍ありて大息をハツと吐き玉ひて「汝等予を棄るか、好し棄べ棄て去れ予は一人にても倫敦に向つて進んでるぞ予が生死はつきて汝等又た一言も云ふ勿れとて其後は天を仰ぎて歎息の聲と發し玉ふより外の事なし其時畢利豪卿は徐に席を起て「殿下御心を沈て熟く微臣が申す所を聞せ玉へ戈登とやし談利男と云ひ孰れか君に不忠を存じて進軍を拒まやもべきや今味方の勢を見るに三千に過ず然も外に應援の頼もなき孤軍なるを之に十倍せる敵兵然も逸を以て勞を待つ倫敦の精鋭に對して雌雄を決せんは三才の童兒と雖も其策の得ざる事を哂ふべしさる無謀の軍して兵機と損し可惜勇士を失ふなば誰か又君の爲に再度の御軍の御供やはいべきや勝敗は兵家の常なり況や是は敗軍と云ふに非ず唯時の不利を見て一時其鋒を納るなれば何の苦うはべき今夜竊に陣拂して當國を去り蘇格蘭の要害地に御陣を召され勇を養ひ兵を蓄へて只管根本を固くするの策

略を運らさゞ其中にゝ御無約ある佛國よりの大軍の援兵も到着すべく又方便を以て謀りたらば英國の諸都府の中にも無二の御味方を得玉ふべし斯して時機を見て再び風の發をるが如くゐ兵を出さば御本意を遂げ玉ゝんと何の疑ひかゝふべき返す〳〵も此回の所ゝは是非に御退去勿論の義に存ぜると云ふ畢利豪卿既に退軍の旨を、言いたれば一座の諸將も異口同音ゝ一先づ曼丟多までも住引揚あるへくやとやをゐおん親王も口惜き限り無く物狂しき迄に見え玉ひしゝども人々の否と云ふゝ施すべ紀術も無くて是非なく退軍の號令を發し玉ふ此時屯士禮を初め令廣日固遜等も皆先陣に進みて本營に在されば斯る評議の有りしを知らぎ明日ゝ一戰と各ゝ勇み立ち罵り合るゝ忽ち中軍より引揚との命令あり令廣ゝ驚紀て本營ゝ至るゝ早や陣拂ありし後おれむ彌ゝ呆れ果て急ぎ馳歸りて屯士禮に此事を告ゐ頻て其隊を引纏て徐ゝと引退紀たれば敵も附從ふ事を得ぎ斯て昨來し街道を二日打て曼丟多ゝ歸着せしが其道ゝにて、蹤て目指す倫敦ゝまて一日路に押詰ゐから敵の大軍に聞怖して府の外廓をだも見ずして歸ると云ふ途中に戰ひの有んとゝ高地を立ちし頃より思ひ設々ゐる事ゐるべきゝ言甲斐なの御軍配や、左程軍の怖しくばなゝし王位を爭ふ抔の大望をば起し玉ひし、アラ心憂や斯てゝ此後の合戰も心許なし斯る臆病ゐる人を大將として可惜しき命を犬死さすなとて退軍

の事情を熟くも知らぬ兵士原ゝ拔〻ゝ落行程ゝ今迄ゝ森黑うたる御陣も俄ゝ間むらゝ隙てこそゝ見えになれされば曼丟多ゐ歸り着玉ひし時も最初の勢ひゝゝ似もやらぎ誰とて一人出迎へ參らする者の無きぞみゐ此府の新教徒ゝ密ゐ黨を組み群を立てゝ北軍を邀へ擊ん抔の結搆を爲すやゝも聞えしかば此所の御陣も猶危ふくぞ見え給ふ

●第四十四回　日固遜の最期

茲に又た碧蓮孃ゝ其情郎日固遜が曼丟多を出立つ日、此度ゝ必ぎ敵の大軍と駈合て目に餘る程の軍あるべし然る場所ゝ御身を連れ行て万一の過失ありてゝ悔ふとも及むず仍て此回ゝ當府ゝ殘り貝倫の家ゝ養むるべし勿論別菲も蹤て其事をば予ゝ言ひ居たりとて此旨を日固遜より貝倫ゝ托み碧蓮ゝ其家に預らきたり斯て後碧蓮ゝ南方より吹く風の香も懷しく只管其夫の無事と勝軍の吉報をのみ待居たるに忽ち親王ゝ御歸陣との報知あり、おゝ抑も如何ゝ今頃の御歸府とゝ心得ぎ扨てゝ敗軍ゝもや、と人々ゝ安き心もせず有しゝ其夜初更の頃門の戸をほとゝと音信ふ者あり誰かと問ば蹤て日固遜が隊附の鼓手ゝて先ゝ自己等と此府の先陣したる魯兒朗なれば碧蓮ゝ急ぎ出迎へて先づ情郎の上を問ひ次ゝ退軍の理由を問ば魯兒朗ゝ咨て「話說ゝ一言にして盡すべきゝ非ぎ現ゝ日固遜も御身に逢ひ委く事情を語らんとて彼所ゝ在り急ぎ行て會ひ玉へと云ふ

日頃戀慕し情郎の來て逢ふと云ふよ碧蓮は取る物も取敢ず其儘魯兒朗に伴れて家を出で大路へと進みしが又小路に入り遂には先の日彼の林駝青に汚辱られんとしたる河岸に出たれば碧蓮は怪しく「魯兒朗どの妾を何方へとて連行くよや親王の御陣は此方か、と問へば魯兒朗は濟らぬ顏して「否御陣は此方ではなれども御身の戀人が河岸端よりやされたれば確よ此邊に、と其處らキヨロ〳〵見廻したる片蔭より丈高き一人の男眉深くしたる覆面をクルリと取て「イヤ其戀人は疾より此所よ待受たり、魯兒朗太儀、碧蓮嬢誠よ暫く逢ひやさぬ、と言ふ顏を見れば林駝青あり此方はアナヤと驚きて逃げんとするを二人して抱すくめ「何も左樣に驚き玉ふな魯兒朗を味方よつけて御身を誘ひ出させしは皆我方略、サ、今更ら兎角言ふにも及むぬ親王は軍よ負て遠く北方へ逃込み玉へば最早此方よも用は無し此ならは御身を連て故郷よ歸り樂しく一生を送ると云が此方の望サア魯兒朗用意の馬と此所へ出せ我自ら新夫人を扶け乘て直よ此より出立せん疾く〳〵と急がをよど心得たりと馳せ出す魯兒朗に敵は一人と減じたれば碧蓮は此隙にと林駝青の捉し腕を振ほどき「盜賊あり〳〵、と叫びつゝ逃んとす彼方は逃さじとて逐ふ程よ端なく前面より馳來る警夜の士官に出會たり、彼の士官は女の聲ふて盜賊ありと呼れるを聞き其を救ふんとて來りしが出會頭に風と見るは何ぞ圖るべき碧蓮

なるよ乃「オヽ碧蓮の　碧「ヤ御前は日固遜どの　日「シテ盜賊は　碧「林駝青　日「シヤ恥知ぞの林駝青めが度〻の惡巧み最早や此度も許されぬと腰なる拳銃を拔取る所へ馳附し林駝青は日固遜と見るより驚とはせしが弱身を見せず　林「ヤア日固遜我が結婚の約束せし婦人を連るよ何とする邪魔だてせば用捨は成らぬと詰寄ば日固遜は冷笑ひ「汝が今の口狀は皆此方よて言ふ事なり先頃よりの無禮の振舞モウ勘辨せぬ覺悟をせよ　林ホヽ面白し我戀の妨碍とある汝が命不憫ながらも貰ひ受た　日「ナンの小癪な左樣いふ汝を　林「シヤ面倒と腰刀を拔より早く飛掛りて切んと進むを一足退りく擊つ拳銃の狙て外れじ林駝青が頭腦をハタと打貫たれば何で溜るべき林駝青は其場に堂と打倒れしまゝ手足を張て息絶たり是より先魯兒朗は隱し置たる馬引立て追來りしが思ひ掛なき日固遜の現れたるを見て小陰を出で勝負如何よと窺ひしに今林駝青の脆くも其場よ討れしを見て驚き懼れコソ〳〵として逃去りぬさる程ふ日固遜は我が長官たる大佐林駝青を討果せしかば碧蓮を證人よ親王の本營へ訴へ出づ依て火急に軍法會議を開かれたるが其事の善惡は兎も角もあれ我私しれ爭ひに依て長官たる者を害せし上は死刑ふ處せらるゝ事勿論なりとの議決あるよで親王も惜しとは只管思食ども一人の故を以て軍律の衰を枉べき事非ず是非なく其翌朝日固遜を銃殺の刑に處せしめ玉ふされば三軍總